
魔道書の魔法使い～俺に優しい平民ハーレムの作り方～

天童翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔道書の魔法使い〜俺に優しい平民ハーレムの作り方〜

【Nコード】

N2121T

【作者名】

天童翼

【あらすじ】

たまたま、抽選に当たって転生する権利を与えられた少年は『幸運』の能力をもらって転生を果たす。彼の思惑通り『幸運』的にゼ口の使い魔の世界にこれたまでは良かったが、彼が目指す平民ハーレムまでの道は遠かった。

なぜなら『幸運』的にも彼は妖精、吸血鬼、ドラゴン、エルフ、お姫様、貴族令嬢、と出会ってしまうから。彼は自分に優しい平民ハーレムを作ることができるのか!? それとも、彼の叔母と『幸運』に負けて異種族ハーレムを作ってしまうのか!? これはお馬鹿な

少年のお馬鹿な戦いの物語である。（注意・これは同作者のゼロの
使い魔、魔眼と魔法と祝福と共に（仮）を作り直したお話です）
上記でも、分かると思いますが真面目なお話ではありません。

Prologue Harem (前書き)

初めましての方、初めまして、天童翼です。
本編に入る前に色々注意事項がございますので、先に書かせていただきます。

作者の娯楽小説として好きに書きますので、ご都合主義展開、ここでは『幸運』ですが、それが多々あります。

原作はもちろん持っていますが、原作のお話を独自に解釈してしまふことが作者には多々あります。原作のみを忠実に再現するべき！と思われる方は読むのお控ください。気分を害される可能性がございます。

上でも述べましたが、作者は原作を持っていてアニメも見てキャラを研究している、つもりですが、キャラ崩壊をさせてしまふかもしれない。あるいはキャラ改編(そういうのが苦手な方も読むのをお控ください。他にも吸血鬼やドラゴンと言った異種族を独自解釈をつけて登場させます。

本作の主人公、サイカは原作知識があり、幸運を持っているだけでなく、様々な特殊な力を得ていきます。主人公チート化がお嫌いな方にはオススメできません。

平民ハーレムなどと書いていますが、あらすじを讀んでいただければ分かりますが、すぐにハーレム化はおこりません。

オリジナル話が結構、数を占める予定ですので原作の学園編が、いつになるか未定です。と、いうよりも、きちんとサイトが出てく

る学園編をするかが疑問です。そういうことですので、原作キャラは学園編前に多数登場する予定です。

作者は現在、多忙なため不定期更新となります。本年度中には完結させたいと思っておりますが、どうなるかは未定とさせていただきます。

上記と同じ理由で感想の返信も、できるか、どうか分かりませんでしたとしても数日、空いてしまう可能性もあります。時間の都合上、返信を質問などされた方のみに限る場合もございます。『俺の感想には返信しないのかよ。作者は俺のことが嫌いなのか？』正直に申し上げますと、感想をくださる方は大好きです！ ですが、時間の都合ですので……予めご了承ください。

今さらですが、このお話はゼロの使い魔を原作とした二次作であり、名前などが同性同名でも実在の人物には一切、関係がございません。フィクションです。

ちなみに、作者は文才というものを持っていません。

誤字脱字も、結構な数あると思います。

そして、最も重要なことなのですが『ハーレム』成分を多大に含みます。（それに伴って少しいかでもです）ですので、ハーレム&微？エロが苦手な方は絶対に見ないでください。

それでも、構わないと思える方のみ本編をどうぞ。

長々と書いてしまいましたが、これから、よろしく願います。

Prologue Harem

………転生とは、突然、やって来るものなんだな。そう俺は思った。

漫画や小説では、ありがちなことでも、『自分が』となると、全然違う。そして俺の目の前に自称神様がいるんだから俺は途方に暮れてもいいと思う。

「ダメよ！」

ほら、心を読むとかいう暴挙に出るし……俺は、ただ、ギャルゲエをして平和に暮らしていられれば何もいらなかったのに。

「もう、そんなダメなオタクライフは認めないわ」

「いやいや、自分が他の人とは違うって思いこむ、中二病は、もう卒業しました」

「そんな人生諦めましたって目でみないで！」

「だって、俺、イケメンじゃないし、特殊能力ないし。だから、仕事と付き合いがない時は、部屋にこもって、オタクライフを」
「だから！　それが、ダメなのよ！」

うるさいな。

「なんでだよ！　俺がオタクライフを満喫しようとも、おまえには関係ないだろ！」

「なんでって、あなたが死んだからよ！」

「あ………そう」

「なんで驚かないの！」

「だって、驚くのだから」

「……………ホント末期ね」

「ああ。じゃあ……………お休み」

俺はそう言っただけで床に寝ころぶ。

「はあ、仕方ない、なんでこんな子に、抽選が当たったんだろ？

ほら、起きて！」

「なんだよ？」

「あなたには転生してもらわないといけないの！」

「いや」

「いやでも、何でも関係ないわ！」

「転生してもらわな！」

「無理だわ　主に、特殊能力とか貰わないと　な」

「……………分かったわ……………たった一つ……………たった一つだけなら構わないわ」

「よし、話を聞こう」

なんで、こんな俺が転生の権利を得られたのか神様は本当に不思議に思っていることだろう。まあ、心を読まずにそれくらいに分かるわな。

「う　ん、どんな力にしようかな」

「ほら、早くしなさい。私も書類仕事とか溜まって忙しいんだから」

最強の能力とかもらうのも良いけど……………やっぱり！

「幸運をくれ。最高レベルまでくれ、神様に愛されているくらいに」

「あら、案外、普通ね。てっきり、ギ　スとか、エクスカ　バーと

か欲しいと言うつと思ってたわ」

「俺は謙虚だからな」

堂々という俺に若干、あきれたように

「……………それは、それは」

神は言った。

「それで、転生先は？」

「さあ？ どこに行くかは分からないわ」

「それなら、今から、その能力をつけてくれよ」

「構わないわ。別にそれがあるからって私が殺されるような事態にはならないもん。てか、そんな能力で本当にいいの？」

「ああ！ もちろん」

ここで、男が不敵に笑ったのを神が見逃したことが男の勝利を確定させたのである。

「それじゃあ、行ってらっしゃい。」

神はそう言って、男を送りだした。

そして、一枚の紙が神様の机から、落ちる。

てんどうさいか
天童才華職業・詐欺師。

Prologue Harem (後書き)

追記

幸運、詐欺師、ハーレムについての作者の解釈への質問が多々寄せられましたので、作者の解釈を載せさせていただきます。

ネタバレ要素も含まれますので本編の途中で、どういう解釈なのか？ 疑問に感じた時のみお読みください。

幼少期編の時点での

『幸運』

この能力を得ているので、お金持ちになって、甘やかされて、幸せに育っていく、と考えられている方がいらっしゃるようですが、作者の解釈は少し違っていきます。

例えば、現代で言いますと、宝くじを当ててお金持ちになることが、その人にとっての幸運なのでしょうか？

安い稼ぎしかないけれど、暖かな家族、信頼できる友人、優しい恋人を持っている人は、贅沢な暮らしはできませんが不幸なのでしょうか？

ただ、甘やかされて育つのは幸運なことなのでしょうか？

大人が心を鬼にして叱ってもらえることは不幸なことなのではないか？

物語で例をあげれば、シンデレラ。ヒロインは最終的にハッピーエンドとなります。彼女は初めから幸せではありませんでした。彼女は不幸だったのでしょうか？ 彼女は偶然にも色々な方の力を借りることができ、王子に見初められる、これは幸運ではないでしょうか？

作者の解釈としては、この『幸運』という能力は必ずしも、主人公に楽をさせる能力ではなく、主人公を成長させるために試練を与えたり、時には偶然、主人公を助けたりする能力だと思っています。

そもそも、幸運のおかげで〜できた、という記述がないから、とって、作者の中では価値のない能力ではありません。

現に幸運的にも、サイカはゼロ魔の世界に転生し、魔道書を得て、優しい家族を得ています。

これを、わざわざ、幸運のおかげで〜できた。とは、あまり連発して書きたくないので書いていないだけで、幸運の能力は確かに発動しています。傍から見れば作者が使いこなせていないように見えるかもしれませんが。

『詐欺師』

プロローグの最後に職業、詐欺師と書かせていただいておりますので、女の子を詐欺的なことで落としていたり、色々な策略を常に行う。というお話を期待されたかもしれませんが、現在、本編は幼少期編です。

作者が主人公をトライアングルメイジにしたり、色々、やってしまっている部分もありますが、そもそも4歳児がどれだけ言葉巧みでも、年上の平民さんを落とすことなど、ほとんど不可能だと思うのでやっていません。

4歳児を恋愛対象として見れる大人は、一部の趣味の方以外は難しいのでは？ という思想の元で、行っています。

謀略などに関しましては、先ほどと同様に、誰が4歳児の言葉を信じるのでしょうか？ 確かに文字を習う、街を綺麗にするなどの行為を行っておりますが、それはあくまで親馬鹿な父親が子供が珍しくまともな意見をだし、なおかつ、自分もそれが有効的だ、と判断したからできただけであって、誰でも弱小貴族の子供を信じる訳ではありません。詐欺師にしても最小限の信頼がなければ何もできません。

昨今、色々なドラマや漫画で格好いい詐欺師が、流行っているのは知っていますが、そもそも詐欺師とは、作者の中では色々な人間がいて、ドラマや漫画の格好いい人間だけが詐欺師だとは思っておりません。

少しネタバレになります、普段は気弱で馬鹿で家族思いのいい子、だけれども、きっちりやる時はやる、そんな詐欺師がいてもいいんじゃないでしょうか？

そもそも、詐欺師とはドラマや漫画のような格好いい人たちのことだけではなく、弱い人間からお金を巻き上げたりする人たちのことも指しますし（主人公の前世は違いますが）。

そのような理由から物語の初期である、この段階で謀略を張り巡らせて相手を陥れることは、幼少期編では行いません。複線として張らせていただいておりますが。

『ハーレム』

これにつきましては、あるすじにも書かせていただいておりますが、この物語は題名にある『俺に優しい平民ハーレム』はすぐには作られません。

あらすじにも書かせていただいている通り、主人公が色々なことをして、その先に不本意な形でのハーレムが待ち受けている……だけれども欲望に忠実な主人公がどうかして『自分に優しいハーレム』を作ろうと頑張るコメディ的なお話です。

H a r e m o 1 俺のメイドさんは四歳(前書き)

P r o l o g u e の前書きに注意事項をのせてありますので、読ま
れていない方はお読みください。

H a r e m o 1 俺のメイドさんは四歳

おっす、才華です！

はつきり、言います俺は転生しました。

そして今、ゼロの使い魔？ の世界にきていますよ。まだ、原作の面子を確認してないので今が、いつの時代かは分からないですけどね！ 俺の能力である『幸運』がはたらいっているはずなので問題いなく原作知識が使えるはず！

ちなみに今の名前はサイカ・アーシユド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムって言うんだ。

名前は覚えなくて結構！

俺、自身も覚えていませんから。

テヘツ

前世が現代の日本だった俺からしたら、こんな長い名前覚えると無理。

そういえば、このハルゲギニアではトイレとかも、なかなか厳しいものがあるんだ。だけど、内政チートとか興味ないから。どうするかは検討中だ。

俺の目的はたった一つで良い！

俺みたいな普通の人間が、いくつも目標をもつと全部中途半端に終わっちゃう可能性があるからな！

そういえば、まだ俺の転生した家の話はしていなかったな。

俺が転生した先の家は幸運のおかげか、トリスティンの没落寸前の貴族だったりする。

なんで！？

俺の能力は幸運だったんじゃないの！？

思惑の通り、ゼロ魔の世界に来たのに！ とか、悩んでも仕方

ないので、とりあえず現実的にコツコツ頑張って生きて行くことと思う。

だって、なんとと言っても、ゼロ魔の世界には可愛ゆい子が多いのだ！

そう、もう俺が何を言わんとしてるか、分かったと思うがゼロ魔の世界に可愛ゆい子が多い！平民にも可愛ゆい子が多いのだ！

いくら没落寸前の貴族とはいえ、平民は逆らえ　　げふん、げふん、もちろん、相手の同意を得てお嫁さんにしますよ。俺は鬼畜なゲームがしたいんじゃないからな。

心ない結婚なんて、現代人の俺からしたら考えられないからな！

え？　可愛いなら原作ヒロインはって？

確かに原作ヒロインも可愛い！　そう断言できるけど………　関わるとか怖すぎて無理です。

よく二次作とかで自分から関わる主人公がいたと思うけど、俺みたいなのが関わられるはずはない！

だって、良く考えて欲しい。

爆発少女に接触　爆死

褐色の巨乳ボインに接触　ゲルマニアさんが怒る

皆大好きクーデレに接触　どっかの王様に目をつけられて死亡

バストレポリューションに接触　馬鹿な坊さんが攻めて来る

翠髪の盗賊さんに接触　ゴーレム怖い

我らが姫様に接触　内政とか怖い

年上の優しいお姉さん　病気って幸運で治りますか？　爆死

モンモン　ギッシュ男が怒る、てか、家もモンモンの実家助けるだけの財政ナツシング

だから！

俺に優しい平民ハーレムを

「サイカちゃん、いらっしや〜〜い」

俺を呼ぶ声の方に返事をしながら、全速力で走りだす！ そう全力だ！

「母上！」

俺は自分の小さな体で母上に抱きつく。

ちなみに今の年齢は四歳です。抱きついてても問題ないよね？

え？

なんで、いきなり四歳かって？

だって、赤ちゃんの時とか、寝てるしかすることないんだぞ！
文章にしたら、俺が母上に抱っこされた。

俺が眠くなった。

俺が寝た。

で、終わるだろ！

それで、俺の家族の話をするのだな。今、俺が抱きついたのは、俺の母（転生後）であるアーシア・アーシュド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムだ。まあ、俺が母上って呼んだから分かると思うけど。

ちなみに母上は魔法の才能がほとんどない上に病弱だったため若くしてハイム家に嫁いで来ているので歳はまだ、二十歳はたちだったりします。俺が言うのもなんだけど、かなり美人！ 母上はハルゲニアでは珍しい水色の髪を腰まで伸ばしている。美しい以外の何物でもない。その水色の瞳も。

皆が大好きクーデレさんの一族と似ているけど、厳密によ〜〜

く見てみたら、俺の水色は全然違つよ！

美人で俺にバリバリ優しい母上。
じゅるり

そして、母上の一番のチャームポイントは胸が大きい！（父上は、母上の胸が大好きな様子だから、乳上と俺が命名）

抱きついた時の感触が……ふへへ。

もう、マザコンと呼ばれても……いや、むしろ、呼ばれたいくらいに俺は母上が好きです。

あ、ちなみに、俺の髪の色も水色です。瞳の色も。

気になった人もいると思うが体が弱い　と先ほど言ったが今は、なんやかんやで大丈夫らしい。

ただ、一つだけ問題があるとすれば、もう子供を産めないらしいが。そのあたりのことは、まだ詳しく教えてもらっていないので良く分からない。

そして次は……別にどうでも良いことだけど乳上……あ、間違えた父上のラルド・アーシュド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムは二十五歳らしい。

それとこれも別にどうでも良いんだけど、没落寸前になる前は、このハイム家ってヴァリエール家と権力、財力共に互角だったほどの名家だったらしい。

なぜ、没落寸前になったかと言うと、先々代のハイム家当主がバカで女にだらしく金使いも荒かったたそうさ。

ただ、女にだらしないなんて我が先祖ながら、なんて不謹慎な奴なんだ！　しっかり仕事して、女にだらしくなれよ！

本当は、先々代のせいで潰れているはずだったハイム家だけど、俺の父上であるラルドは近年稀にみる天才児だったらしく、わずか十五歳で当主になり財政を立て直した。

今では、赤字続きだった財政も黒字になった。

領地に関しても、町一つ分くらいにまで小さくなってしまったっ
ていたのに町三つくらいにまで戻ったそうだ。

そして、本当に残念なことに祖父と祖母は四人共、他界している。
俺に平民ハーレムの作り方を教えてくれないまま！ 爺ちゃんほど
うやうや愛人を困ってたんだ！ 乳上には愛人はいないんだ！ 教
えてもらうには爺ちゃんしかいなかったのに！

あ、そうそう、母の方に、姉がいるが、その話は今度。

「サイカちゃん、どうしたの？」

頭に？マークがついても違和感がないほど、おっとりした母上。

「なんでも、ありません。少し考え事してただけですから」

「そう、それならいいんだかど……もし、サイカちゃんに何かあ
ったら私、死んじゃうわ」

そう言って泣きだす母上。

「母上泣かないください。まるで、俺が泣かしたみたいじゃ……」

……

俺が焦っていると背後から

「アーシア！？ サイカ！ 貴様、自分の母親になんてことを！」

金色の短髪に翠色の瞳を持った、なかなかの筋肉質な男に声をか
けられた。

乳上降臨！？

あ、また間違えた、父上だった。

「それにしても、四歳の子供に杖向けるの、ホントやめて!?
死ぬってマジで！」

父上は、炎のスクエアメイジだから、シャレにならん！」

「あ、あなた、私は大丈夫よ。もし、サイカちゃんに何かあったら
と思っただけだから」

「そうなのか、アーシア。良かった」

ええ!? 俺に謝らないの父上!? てか、先ほど俺にもしものこ
とをしようとしたの父上ですよね！」

「それで、あなた、お仕事はどうしたの?」

ええ!? 母上まで俺のことスルー!?

「あ、ああ、そうだった。入って来なさい」

乳上（もう訂正しない）が、一人の女の子を部屋の中に招きいれ
た。

入って来たのは金色の髪をしていて白い肌、翠色の瞳をした、メ
イド服を着た四歳位の女の子だった。ま、まさか、俺の平民ハ
レムの第一号さん!?

ち、乳上! ありがとうございます! 今ほど、あなたを乳神様
だと思ったことばいけません。

「は、はじめましてアリシアです。よ、よろしくおねがいますっ
」この子はサイカの専属メイドになってもらったために来てもらっ
たのだ」

え? 愛人じゃないんですか?

「専属メイド……しかし、俺と同一歳くらいというのは……」
確かに自分専用のメイドさんがいれば嬉しいけど……さすがに同じ歳の女の子にあれこれ命令するのは気がすすまない。むしろ、本当に愛人の方が……

「このアリシアは現在、産休に入ったメルスの娘でな。メルスの収入がなくなるとメルスの家族は生活できなくなってしまう。だからメルスがこの子を自分の代わりに働かせて欲しいと頼んできたのだ。おまえが拒否すれば……この子を配属する所がなくなってしまうのだが……」

ああ、そういうことか！

こんな小さな女の子を働かせられる場所はない。

しかし、メルスは長年、家に仕えてくれているメイドだから生活できなくなってしまうような事態はなんとか避けてあげたい。

しかし、働かない者に給料をあげては他の使用人に対して示しがつかない。

だから、俺の遊び相手としてアリシアを雇うんだ。

「分かりました。父上、そういうことなら俺の専属メイド第一号はアリシアです」

「そうか、良かった」

父上は、ほっとした様子だ。

理由が分かっちゃえば、こんな可愛ゆいメイドさんなら大歓迎なのだ！

そして将来的には本当に俺に優しい平民ハーレムの第一号にヒカルゲンジは言いました『いないなら、育ててしまえホトトギ

ス

うん、良い言葉だ。

今でも良く覚えてるよ。古典の教科書を読むのが好きになった最大の理由だもん。(注意・世界の言葉面白くしちゃえ用語集の間違い・著者、天童翼・非売品)

「それでは、私は、仕事が残っているので、戻るとするよ」

そう言っただけで部屋を出て行ってしまった。

もちろん、俺にはなく母上に行っただけで済まない。

乳上……あんた実の一人息子を何だと思ってるの？ 普通の四歳児ならぐれてるよ。

まあ、乳上の態度の改善はまた今度考えるところとして今は……俺の目の前にいる可愛ゆい、小さなメイドさんのことだ。

どうしたものか……どんな仕事をさせたらいいんだろう？

将来的には俺に優しい平民ハーレムの筆頭さんになってもらわないといけないから、仕事をこなしてもらわないといけないんだけど今は、な……さすがに四歳に家事をさせるのは……

「あ、あの、サイカさま、わたしはなにをしたら……」

な！？ もう、脅えきつた目をしてるよ！？ 俺の使用人に対するイメージってどんななの！？ ほんの数回、着替えを覗いただけだよ！ そんなに脅えなくても！

しかし、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

取りあえず、何かアリシアに仕事を与えなくっちゃ。

俺は発達途上の頭をフル回転させて、考える。

そっだ！

「それじゃあ、俺と母上が飲む、紅茶をもらってきて！」

これくらいなら、大丈夫だろう。

「はい！」

アリシアも元気よく返事をして出て行ってくれたし。

ちなみに、現代の日本では四歳児が、それなりに重い食器を運ぶのはどうかと思うだろうけど、ハルゲニアでは子供も農家の労働力のため割と幼いうちから力持ちだったりする。

まあ、貴族の馬鹿は違うけど。

しかし……困った、俺はこれから、どうやってアリシアと付き合っていけばいいんだろうか？

……そうだ！ こういう時は経験豊富そうな母上に！

「母上、俺はあの子にどう接すればいいのでしょうか？」

「うゝゝゝん、普通でいいんじゃないかしら？」

母上！ その普通が分からないんですけど！？

しかし、マザコンの俺は何も言い返せない。

まあ、当然だな。

十分くらいして「バリン」っていうコップが割れた音が廊下から聞こえてきた。

廊下に行ってみると 案の定というか……紅茶をいれた、

ポットとコップが粉碎していた

もちろん……傍でアリシアは泣いている。

「うわゝゝゝん」

内心、溜息をつきながら。
俺はアリシアに

「大丈夫だから」

と、言いながら、壊れた食器の後かたづけをするのだった。

これじゃあ、どっちが使用人かわからん。

いや、マジで。

つつか、俺の目標である『俺に優しい平民ハーレム』までの道のりは遠そうだ………

H a r e m 0 2 俺の三十歳の魔法

サイカです。

二回目にして名前の部分だけです。

それで今、俺が何をしているかというところと現在は屋敷の書庫でハルゲニアの文字の勉強をしています。この世界の文字が日本語じゃないのは痛いな。

字が読めるメイドさんに手とり、足とり、教えてもらっている。もちろん、平民さんだ！ しかし、どんなにテンションMAX状態で教えてもらっていても……理系で英語が苦手な俺からすればハルゲニアの文字は英語以上に奇怪な文字で意味が分からん！

しかし！

この世界で生きて行くためには必要不可欠なことなので、頑張る！ 幸いなことに未だに四歳なので覚えが悪くても皆から「まだ四歳だから焦らなくていいよ」とか「才華さまは四歳から文字の勉強をされるなんて、凄いです！」とか、言ってくれるからやる気をなくすことはない！

それどころか、やる気ができます。

べ、別に平民のメイドさんに凄いつて言われたからじゃないぞ！ 今度は誰かに俺が手とり、足とり、あそこも、ぐへへ とか思っていないからな！

そんな頑張っている俺にもやはり、文字以外にも、悩みがある。そう、未だに俺の平民ハーレムのメンバーが誰もいないんだ！ いつになったら、俺は平民ハーレムを作れるんだ！（サイカは現在、四歳なので普通に考えて作れません）

もう一つが……アリシアのことだ。……アリシアに何か頼むと、

大抵、何か物が壊れる。

ああ、その夢が詰まったモノを、揉むぞ！

はっ！？

いけない……………人間の負の部分が出てしまった。

決して俺がエロいからという理由じゃないからな！ 誤解するなよ！

絶対だぞ！

昔、一回、母上の夢の詰まりまくった物を抱きついた拍子に揉んでしまった時は……………三日程、寝込みましたが何か！？

主な理由は出血多量だけど！

俺はエロくない！

しかし、気をつけないと胸を揉んだくらいで倒れていたら……………

もし、平民ハーレムを作れても、俺がそんなじゃあ、まともにエッチがでかな げぶん、げぶん。

何度も言うが俺は

「サイカさまあ~~~~~！」

ふと、見るとアリシアが走ってこっちに来る。

ちなみに水を持って。

ダメだ！

あれは転んでしまうパターンだ！

これはデジャブではなく、以前に何度もあった光景なので分かる！俺がアリシアを止めようと叫ぶのも虚しくアリシアはこけた。

「うわぁ~~~~ん」

…………マジで、一日三回は泣いてるよ、この子。

アリシアを慰めていると、どこからともなく乳上（父上）が現れた。

慰めると言っても頭を、なでなでしてあげているだけだけど。俺が撫でてあげるたびにアリシアは気持ち良さそうに目を細めているから、きつとアリシアは撫でられるのが好きなのだろう。

「どうしたんですか？ 乳上^{ちちうえ}？」

発音は同じだから乳上と呼んでも父上と呼んでも、バレない。つい最近、ふと気づいたんだ、俺って天才！？

「ついに、サイカが魔法を使う日がやって来たんだ」

ああ、確かゼロの使い魔の世界では、四歳くらいに、杖と契約するんだよね。あれ？ もうっちょっと先じゃなかったけ？ まあ、細かいことは気にしない方向で行こう。

それに、現代人の私からしてみれば魔法という魅力的なモノは是非使ってみたいですから。

皆も憧れてるよね！

そうそう、三十歳まで童貞を貫けば魔法使いになれるって言われているけど、あれはきつと嘘だ。

うん、きつと。

俺が前世から数えて今日が三十歳の誕生日なのと、今日から魔法が使えるようになるのは絶対に何も関係ないはず。

そつだ！ 絶対に関係ないぞ！ 絶対だからな！

まあ、そんなことを考えながら中庭に移動してみると家の使用人が全員、見に来ていた。

子供が俺だけしかいないハイム家にとっては、俺の系統がかなり重要なんだろうな。

まあ、たぶん、父上と同じ、火のメイジだと思うけど……。

ちなみに、俺は現在、目じりに涙をためたアリシアと手を繋いでいる。幼女のプニプニの手の感触はなんとも……

は、いけない、いけない。

とりあえず、俺はアリシアと手を繋いでいた手を放してアリシアを俺の魔法を見に来ていた母上に預ける。

母上は相変わらず、綺麗だな……

そして、ついに乳上から杖が渡される。

何となく分かるんだけど、それなりに上等なものだろう装飾はされてないけど。

実戦向きの杖ということか。

「さあ、魔法を使ってみろ！」

「ええええええええええ！？ 無理ですよ、父上、やり方も教わら

ずに、いきなりだなんて！？」

「そ、そういうものなのか？」

使用人たちも、うんうん、と頷いてくれている。

皆、ありがとう。特に女のメイドさんたち！ 俺以外の誰かのお嫁になんか行かないでねっ！

皆、どうでも良いことなので忘れていると思うが、この乳上は一心、天才児なんだ。

今の発言で分かると思うけど、どこかぬけているけど。

頷いてくれている皆の様子に、さすがに空気をよんだ乳上が少し慌てた様子で

「で、では、系統魔法の基本を一系統ずつ試していこう。ファイヤーボール！」

と言つて、人の大きさ程ある火の玉ができる。

そう言えば、ゼロの使い魔の世界の魔法つて、コモンマジックから練習するんじゃないか？ その後で系統魔法を練習するんじゃないか？ まあ、これも細かいことは気にしないでおこう。きっとハイム家にはハイム家の家訓があるんだ！

「さあ、サイカやってみろ！」

俺が思考の海に沈んでいた間に、いつの間にか、乳上は満面の笑みになっていた。

ええ、それが見本！？

あきらかに、そんな大きさの炎の玉作れないでしょ！？

「さいかさまあ〜がんばれ〜」

「サイカちゃん頑張るのよ！」

アリシアと母上が応援してくれる。

くっそ！

女の子に応援されたら、やるしかないだろ！

俺は腹を決める。

「ファイヤーボール！」

元氣よくそう言ったが、何も起こらない。

「よし、火のメイジではないな」

ええええええええええ。

一回の挑戦で決定!?

……まあ、細かいことは気にしないでおこう。俺は別にメイジになりたい訳じゃない。平民ハーレムを作りたいだけだからな。それから、いくつか試した時に、水の魔法だけ使えた。

正確には杖の先からチヨロチヨロと水が出てきた。

まさか……これが俺の初魔法だとは……かなり凹みました。

普通、転生主人公って、もっと大掛かりな魔法が使えたり虚無が使えたりするんじゃないの？

あの神様、本当に俺にくれた能力って幸運だけ？

で、でも、魔法が使えたことに代わりないもん！

水がチヨロチヨロ出ただけでも嬉しいんだよ！ 悪いか!?

また、思考の海に落ちていた時だった。

「サイカちゃんは、私と同じ系統だわ」

控えめにだが頬笑みながら母上は喜んでくれる。

な!?! その笑顔はマザコンの俺に対して卑怯ですよ！

「俺も嬉しいです、母上」

俺は母上に抱きつく。

っ!?! しまった。また、思わず抱きつきたくなってしまった。

え? 既に抱きついてるって? 気のせいだよ。気のせい。

そういえば、母上ってなぜか良い香りがするんだぞ
す〜
は〜〜す〜〜は〜〜母上の香りは俺のだからな！

「サイカさま、おめでとう」

「ありがとう、アリシア」

「えへへ」

頬を赤くしながら、アリシアも俺に話しかけてくる。

もう、アリシアのこの笑顔だけは日に日に可愛くなるように思える！

この笑顔を見ると物を壊してしまうダメさなんて忘れてしまっぜ！
さっきは悩みとか言っていたのは気のせいだ！

ちなみに俺の系統を調べ終わったので使用人たちは、仕事に戻って行く。

「サイカは水の系統なのか……………私と同じ火が良かったのに」

乳上がなにやら落ち込んでいる。

おまえは子供か！？

「あなた、サイカには私が魔法を教えますから大丈夫ですよ」

「そうだが……………」

「乳上、乳上は水の魔法が使えませんから仕方ありませんよ」

「確かにそうなんだが……………」

「サイカちゃん、お父さんはね、自分の息子に魔法を教えるのが夢
なんだって私と結婚するまで、ずっと言ってたのよ、だから」

思い出したように母上が説明してくれた。というより絶対忘れていたのを今、思い出しましたね。

俺だけ乳上を諭したみたいない方だったけど。

「ちよ、アーシアそれは言わない約束だろう……………」

顔を真っ赤にして言う乳上、まったく説得力がない。

それにしても、そうだったのか、乳上。この前まで俺ってないがしろにされていると思っただけど実はメツチャ可愛がってくれていたんだな。

何か嬉しいな　　乳上って呼ぶのはやめないけど。

「……………わたしが、もう一人、子供を埋めたらいいんだけど」

それを聞いた瞬間、乳上の顔が急に真顔になった。

「それはダメだ！　アーシアの体力では、子供は一人が限界だと医者にも言われただろう」

「でも……………」

「そうですね！　俺も、母上がいなくなるのは嫌です！」

母上が死ぬなんて考えられない。

「アリシアもです！」

乳上、俺、アリシアにそう言われて涙ぐむ母上。

「ありがとう、皆」

涙ぐむ母上。

それから少しして乳上は仕事に戻っていった。

しかし……………母上の体のこと魔法でなんとかならないかな？

ちょうど、水のメイジになったわけだから。
……… だけど、乳上とエッチする母上……… 無理だな。俺が乳上を殺してしまうかもしれない。

系統を調べた日から俺は魔法の練習もせずに二週間も書庫の奥にこもっている。

現代人という所の『ひきこもり』や『ニート』になった訳ではないぞ！

実はハイム家の書庫はなんと！ 始祖が残した本を大量に収納しているのだ。

それも、なんかすごい魔法の書の原本。

何てご都合主義。いや、この場合は俺の幸運に引き寄せられたのか？

母上の体の弱さを何とかしたい俺にとっては、ご都合主義、ばんざい。幸運、サンキュー！ と喜んだものだ。

しかし、この魔法の書にも、いくつか欠点があった。

その一つが……… 字が古すぎて読めない。誰にも読めないから、ただの宝の持ち腐れ状態。

しかし、お金の困っても、これだけは残したんだから本当に貴重

な書なんだな　　と考えた俺は玉砕覚悟で書庫の奥にある魔導書の保管庫に向かう。

そして、俺が書庫に入ると、『なぜか』『たまたま』頭の上から一冊の本が落ちて来た。

その本の題名は確かに日本語で『治療系魔法全集』と書かれていた。

え？

なぜに日本語？

そう『幸運』にも俺の頭の上に始祖様が書いた日本語の本が落ちて来たのだ。

いや、日本語って？　この家の本の始祖様って絶対ブリミルじゃないな。

まあ、ブリミル教とか信じてないからモーマンタイ。

という訳で必死に『治療系魔法全集』を読んでいますよ。

それにしても『治療系魔法全集』を読めば読むほど思う。この本って、明らかに人間のトライアングルクラスの魔力量よりも多い魔力を持っていることが前提の魔法が書かれている。上級編になると、もはや人間の魔法？　と疑問ばかりが浮かんでくる。

まあ、烈風やら俺の叔母様なら難なく使えそうな気がするけど。

俺がさらに思考の海に潜ろうとした時、ふと背後から

「サイカさま、おちゃにしませんか？」

アリシアが話しかけて来た。

その顔には少しだけ影が見える。

この書庫の奥に籠るようになってアリシアに構う時間が減ってし

まったからな。寂しがっているんだろ。

違うことで構ってあげているけど、それとこれとは話しが違うの
だろ。前までは毎日、遊んであげていたからな。

「分かった。後、もう少ししたら行くからお茶の用意してて」

「はい！」

元気よく返事をしてくれるアリシア。

俺はすぐに本を元の場所に戻し、二人が待つてくれている部屋に
向かう。

確かに本を読むのも大切な行事だけど、それ以上にアリシアと母
上とのお茶会の方が大事だからな！

母上とアリシアが待つ部屋に入ると、二人から、呼ばれる。

「サイカちゃん」

「サイカさま！」

「お待たせ、二人共」

俺は返事をしつつ、椅子に座る。

「大丈夫よ、私達の用意も今、終わった所よ、ね、アリシア」

「はい！ いま、よういがおわったところですよ」

「そうなのか。母上とアリシア用意してくれてありがとう」

それから、三人で、クッキーをおやつに、紅茶を飲む。

この時、アリシアも、席に座って一緒に食べる。

本来、貴族と平民が同じテーブルでお茶をすることなんてありえ
ないが俺と母上はそういうことをあまり気にしないのでアリシアも
一緒に食べて飲んでいる。そもそも、四歳児一人だけ、別のところ
に座らせるなんて鬼畜だろ？

乳上だけは苦笑いしてたけど、基本的に母上がしていることも文句を言わないからな。問題ない。

もちろん、他の貴族の前ではアリシアに危険が及ぶ可能性があるからしないけど。

ていうか、そんな場にアリシアは出さない。

俺の可愛いアリシアが他の変な貴族の汚れた目で見られるなんて我慢できないからな。

……もし、そんな状況になったら『ぬっころす』かも。

「それにしても読めない本を読んで楽しいの、サイカ？」

母上が一番聞いて欲しくないことを、聞いてきた。普通に考えて普通の四歳児が誰も解読できない本を読めるはずはない。

……母上にはあまり嘘はつきたくない。

でもな……まあ、もし仮に話したとしても、母上もアリシアも乳上も他人に言いふらしたりしないだろうけど。

「あ、ああ。楽しいよ」

「サイカさまは、むつかしいほんを、よめるなんて、えらいね」

アリシアが話題を逸らしてくれる。

ありがとう、アリシア。

「アリシアも、かなり文字読めるようになってきたもんな」

「はい！」

ちなみに、アリシアに仕事をさせるのは一日一回くらい（このお

茶をするために紅茶とクッキーを持って来てもらうだけ) だけだから。

これ以外の仕事をさせた場合は大抵、自分から『サイカさま！アリシアできるよ！』と言ってコップなどを破壊する。この仕事の時もたまにやるけど。

まあ、この頃は、自分達の仕事が増えるのが嫌なメイドさんがさりげなくフォローしてるけど、あれ？ これって結局、アリシア以外のメイドさんの仕事増やしてない？ まあ、アリシアはメイドさん達の間でもアイドルだから問題ないだろう。

まあ、結局は何をしても誰かの仕事を増やす訳だ。

それなら、一応、俺専属のメイドさんの訳だから、俺の傍におくことになった。

そして、俺の傍にいても俺はこの頃、本を読んでいるだけなので特に誰かに何かしてもらう必要はない。

だから、俺が本を読んでいる間、基本的にはアリシアは文字の勉強をしている。とは言ってもハルゲニアの童謡？ の歌の歌詞を見ているだけなんだけど。四歳では普通、文字は覚えられないでしょ？ よっぼどの天才児以外。俺は例外だけだ。

他のメイドさんは『アリシアだけの文字を教えて！』と怒ることはない。

なぜなら、他の使用人は全員、採用される時に、読み書きは習っている。もちろん、算数も。それを提案して始めるように乳上に頼んだのは俺だけだ。他にも領内の子供が無料で読み書きを習える所を作るように頼んでいる。

だって、この世界の平民は学がなさすぎる。別に平民を特別馬鹿にしている訳じゃない。

この世界自体がそういう風になっているから平民に非はない。むしろ上に立つ貴族に非があるんだと言える。確かに平民が学をもてばそれだけ、色々と思いつくから自分の領地で独裁政治をやりにくくなる。大抵の貴族はこれを恐れているんだと思う。俺の考えすぎで、ただ平民に学をもたせる必要はないって決めつけているだけかもしれないけど。

だけど、色々と学がないと問題があるんだよ。例えば商人が金に困った平民を騙して変な契約書にサインさせて奴隷にしてしまおうとか　言いは悪いけど、平民は貴重な税の収集源だ。それを盗られるのは、領地が少ないハイム家にとってはかなりの痛手だ。平民を気にしない弱小貴族もいるが彼らはすぐに没落する。

これは俺の考えであって絶対ではない。これが正解か、どうかも分からない。だけど、十分やってみる価値はあると思う。

まあ、俺が言わなくても天才の乳上なら、いつかやってくれそうな気がするけど。

学校に関しては資金が集まり次第、初めてくれるそうだと。

というより、各村から一人、女の子をハイム家の使用人^{メイド}として雇って文字を教え、村に返して教師をさせる、という仕組みにする予定だ。これで平民で奴隷になる可愛い子が減ればいいな。と!?!?別に少しでも奴隷になる子を減らして可愛い子が俺の平民ハーレムに入ってくれる確率を上げよう、なんて思っただけだぞ!　俺は純粹な理由で俺なりの考察をしたんだからな!

後、仕事がない人のために街を綺麗にする仕事を領が雇って始めている。

それは伝染病などの予防だけど、それは証拠が見せられなかったので他の貴族の方に対する見栄だ、と言っておいた。

俺が何か隠していることを知ってか知らずか、それも後、二週間

程で始めてくれるそうだ。

乳上も失業者をどうにかしたい、と思っていたらしいのも理由らしいけど。

てか、俺は内政チートとか興味ないけど平民ハーレムを作ろうと思ったら、ある程度、財政に余裕がないといけないからな。それに、もし病が流行って将来有望な平民が死んだら大変だろ！

ちなみに、将来的にはガリアかゲルマニアに領民連れて亡命しようかな？ とかも考えてます。こんな泥舟みたいな国にいつまでもいたら死亡フラグ満載だよ。

まだガリアにもゲルマニアにもコネがないからできないけど。てか、ハイム領はガリアと隣接しているんだよね？ なんとか、取り込んでくれないかな？ もちろん、ハイム家が領主このままの状態。考えが甘いか。

「それにしても、このクッキー美味しいね」

「ええ、なんでも『あの』ヴァリエール公爵から頂いた品らしいの」「なんで、ヴァリエール公爵様が？ 確かにハイム家は歴史だけは古いですが、今、そこまで力のある貴族ではないはずですよ。ハイム家にクッキーを送っていいことなんてないでしょ？」

ちなみに、アリシアは、ヴァリエール公爵を知らない様子で、首を傾げている。

うっっっん、可愛い。

アリシアを見るのもいいけど、今はヴァリエール公爵のことだ。

「うっっん、本当のこと言っているのか分からないけど本当のことと言うとね、なんでも書庫の本を譲って欲しがっているらしいの」「書庫の本ですか!？」

あれを今、持って行かれると困る！

あれがなかったら……母上の体の悪い所？ が治せない！

しかし……今まで、あの書庫の本の力を使えた人はいないのに……何であれの重要性に気づいたんだ？ 実は凄い魔道書とはいっても、読めないんだからハイム家の自画自賛の可能性も捨てきれないのに。

それで気づいたとしたら、なんて優秀な人なんだ……

ヴァリエール……侮れないな……待てよ、ヴァリエール公爵の所の次女のカトレアさんは確か病気だったはず（既にサイカは自分ガルイズと同じ年だと確認済み）……そうか、カトレアさんの病気を治す手掛かりがあるかもしれない。

なんだ、少しでも可能性のあることをしておきたい親バカか。

もちろん、あの人は綺麗で優しいから助けてあげたいけど……前回、話したやばさがあるから少し考えておこう。

というより、『治療魔法全集』の魔法が俺が使えるか不明だし。

「それで、乳上は、OKしたのですか？」

「いいえ、あれは先祖代々の資産だから渡せないし貸せもしないと断ったらしいの、それなのに、こんな美味しいクッキーを送ってきたらしいわ」

「ふ~~~~ん」

さすがは、乳上、かなり意思がしっかりしている。

他の下級貴族なら公爵家にそんなこと言われたら、二つ返事でOKするだろうに。

「おかわり、いれますね」

アリシアが、母上のコップに二杯目の紅茶をいれる。

「ありがとう。アリシア」

「はい！」

本当に、アリシアは良い子だな。

アリシアのお母さんが戻って来ても、ここで俺の専属メイドになつて欲しいと、この頃、思い出した。

まあ、アリシアは欠点だらけだけど。

「そう言えばね、サイカちゃんが杖と契約したことだしエリスお姉さまがサイカちゃんに魔法を教えるために来てくれるんだつて」

「エ、エリス叔母さま！？ が来られるんですか！？」

「ええ」

エ、エリス叔母さまが来るだー！？

ま、まさか、こんな所に死亡フラグが……

俺って本当に平民ハーレムを作れるかな？ 完成する前に死ぬよ
うな気がする四歳のこの頃でした。

H a r e m o 3 俺の常識を超越する伯母さま

「いやああああああああああああああああああああああああああああああ！」

別に、女の子にやましいことしてるわけじゃないです！

だって、悲鳴あげて逃げてるの俺ですもん！

え？ 男の悲鳴なんて聞きたくない？ 悲鳴をあげている俺だつてそつだよ！ でも、悲鳴をあげないとやってられないんだよ！

そつこつ考えている間にも、俺の目の前に近づいてくる水の鞭！？

やばっ！？

俺はとりあえず、直感で左に避ける。

おお、『幸運』的にも左に避けたのは正解だったらしい。鞭を避けた。

「ほらほら、逃げているだけでは終わりませんよ。頑張りなさい！」

頑張るだけでエリス伯母さまの攻撃を避けられるなら、この世の人間は全てがチートだと思っぞ！

しかし、そんなことを言う余裕はないので言えない。

俺が、なぜ、こんな悲鳴をあげながら、逃げているかと言つと時間は一時間ほどさかのぼる。

「お久しぶりです、エリスお姉さま」

「お久しぶりです……… エリス伯母さま」

「ええ、アーシアもサイカも元気で何よりです」

今、俺の目の前にいるのは俺の母上の姉にあたる、エリス・シャイ・エ・ライト・フォーク伯母さまです。

エリス伯母さまと母上は公爵家には劣るものの、かなり権力を持つた有力貴族らしい。

ちなみに、ハイム家の領地とは隣接しているんだぞ。

ガリアと大貴族とクルデンホルフ大公家と領地が接しているとか、どんな土地だよ!? と突っ込んだことは数知れず。

そうそう、どっかのギシュ男の家とは違いハイム家はクルデンホルフ大公家に借金とかしてないぞ。

例え、領地を失おうとも借金をしないのが家の掟らしい。

まあ、もっと本音を言えば借金のせいで本をとられるといけないので、この家訓が生まれらしい。

そうそう、なぜ、かなりの権力を持った貴族の所から母上がこのハイム家に嫁いだかというと前にも言ったが母上は病弱だったんです。

え？

それが、どうしたって？

いや、これが結構重要なんだよ。このハルゲニアでは子孫を残すのが第一とされているために病弱で子供がなかなか産めない貴族の女性に嫁ぎ先がない女性なんだ。

確か、原作でもカトレアさんはどこにも嫁いでないだろ？ まあ、

あれはいつ死ぬか分からないっていう理由もあるんだろうけど。
政治的にも家的にも、あまり有用性がなかった母上なのだが乳上は母上に一目惚れしてしまい。

身分の差も考えず、アタック！

乳上が神童と呼ばれていたこともあり、フォーク家は母上の意見を優先して乳上の結婚を許しのだ。

乳上、身分の差とか考えなくて、ありがとう！ こんな素敵なママンに恵まれて俺は幸せだよ！

と、エリス叔母様の話しに戻りますが、このエリス叔母さまは何を隠そう水のスクエアメイジだ。

本来、決闘で最強は風のメイジとされていますが、このエリス伯母様は風のスクエアメイジを瞬殺できるくらい強いらしい。

え？ 常識？ そんなもの持ったら伯母様に殺されるぞ。

ちなみに、あのグリフォン隊を一人で全滅させたとか、三桁にも届きそうな数の亜人に単身で突っ込んで無傷で帰って来た、という噂まである始末。

グリフォン隊の皆さまはエリス伯母さまのエリスという名前を聞くとき震えだすらしいから、前者は嘘ではなく本当みたいだ。

そんなエリス伯母さまだからこそ本来の二つ名である『激流』のエリス、の他にも、世間がつけた二つ名がある………それが『殲滅』のエリスである。

あるいは基本的な世間の常識を知らなかったり、無視したり、常識の斜め上に行くようなところから『常識を超越する女』。

はつきり言ってハルゲニアでは女より男の方が地位が高い。一夫多妻制の慣習があったり、家の当主は男ではないといけないとかがあるから分ると思うけど。

しかし、先ほども言ったが、そんな常識は殲滅のエリス伯母さまの前ではないにも等しい！ エリス叔母さまは男よりも堂々として
いる！ どんな権力者の前でも堂々としている。

そんな伯母さまが、俺に魔法を教えに来てしまった……

どうなるか少し考えただけでも分かる！ 死ぬに決まっているだ
ろう！ この人には常識というものが欠落しているんだから！ 四
歳だからと言って手加減するはずはない！ それがどんなに世間一
般では常識はずれだったとしても！

だから、俺は今日だけでも地獄じごくから逃れるために

「伯母様、長旅でおつかれでしょう、部屋を用意してありますので、
お休みください」

四歳にしては異常なほど賢い言葉づかいで、エリス伯母さまに休
むように促す！ 完璧な作戦だ！ 四歳なのにこんなにしっかりし
ている俺を見てエリス伯母さまはきつと関心して今日の地獄じごくはなし
にしてくれるはず！

そうそう、こんなエリス伯母様でも結婚はできているんだ。

伯父さまはフォーク家に婿養子という形で入っている……まあ、
分かりきっていると思うけど、あえて言うのと完全に尻にひかれてい
る。

何で、こんなエリス伯母さまと結婚したんだろう？ やっぱり、
エリス伯母さまのスタイルや顔に騙されたんだろう。中身ではなく、
顔とスタイルで結婚相手を選ぶなんて……これから俺は伯父さまの
ことを変態勇者と呼ぶことにするぞ！

皆、顔とスタイルには騙されるなよ！ 女の子はお淑やかが一番
だ！ きつと、平民はお淑やかが多いはず！ その良い例がシエス

ただ！ あんなにサイトのことを一途に思い続けるなんて！ できれば俺の『俺に優しい平民ハーレム』にはいて欲しいんだけど、あの子をハーレムに加えると色々と原作が変わってしまうからな……原作知識という武器が使えなくなるのは痛い。

でも、大丈夫。この世界には、きっとシエスタみたいな可愛ゆい子が他にもいるはず！

その子を探し出して、俺は叫んでやるぜ！

『平民、ゲットだぜ！』

ああ、早く言ってみて~~~~

そんなことを考えながら、エリス伯母さまの返事を待つ。ほれほれ、答えは決まっているだろ？ 早く『そうですね』と言ってくれよ！

「いえ、大丈夫です。私はこの程度では疲れません。私の荷物は私の侍女に運ばせるとして。早く中庭に行きましょう。私がじきじきに魔法の基礎をしっかり教えてあげましょう」

な、何だって！？ そんな馬鹿な俺の完璧な計画が失敗するなんて……

「さあ、サイカ、行きますよ」

そう言っつて、エリス伯母さまに引きずられて中庭に連行される俺。ちなみに、さっきも伯父さまの話をする時、容姿に騙されたとか言っただけ。エリス伯母さまは容姿とスタイルだけは完璧だ！ いや、完璧すぎる！ と言っつても過言ではない。

引き締まった体。

母上と同じ巨乳、推定Dカップ（俺のミラクルアイ判定）。

綺麗な、水色の髪。

見事なお尻の曲線。

顔も街へ出れば誰もが振り返る仕事のできるOL風な美人。ちなみに、本当に仕事はできるらしい。

着ている服も、もちろん、センス抜群。

きっと、この部分に変態勇者は誑かされたんだ。

中身以外は完璧なところに！

だからこそ余計にため息がつきたくなる。

はあ……何で、そんな人が俺の伯母さまなんだろう？

このまま、何も話さないで中庭に引きずられて行くのも嫌だったので

「そういえば、エリス伯母さま、伯父さまはお元気ですか？」

変態紳士について質問をすることにした。

「ええ、元気ですよ。わたしがこちらの屋敷に長期滞在すると聞いて寂しがっていましたがね」

……嘘だ！

例え、変態勇者でも毎日、毎日、このエリス伯母さまと一緒にいてストレスが貯まらないはずがない。

絶対、しばらく、一人でいられて喜んでくれるって喜んでくれるはず！

そこまで断言できる程、エリス伯母さまの中身は残念だ！

そこで、ふと気づいてしまった……

「……長期滞在ですか？」

「ええ、もちろんですよ。わたしは弟子を見捨てるようなマネはしませんから、あなたが立派なスクエアメイジになるまでは、ここにいます」

なんだって!?

スクエアメイジ!? そもそも、スクエアメイジになれるのってエリート中のエリートだろう!? 大抵の人間はなれないはずなのに、この伯母さまは俺の魔法の才能を見る前から俺をスクエアメイジにするつもりなのか!?

そもそも、そんなの一年や二年ではなれない!

嫌だ! 俺はエリス伯母さまの地獄を体験するよりも、平民探しに行きたい!

はっ!?

そつだ、まだ切り札がある! この一言で逆転サヨナラだ!

「し、しかし、私のために、エリス伯母様と伯父様の夜の営みを邪魔するのは………」

そつ、エリス伯母さまと伯父さまには子供がない! 結婚するのも乳上と母上の方が早かったらしいし。

ちなみに、エリス伯母さまの前では、『俺』なんてことは言わな
いぞ。

小さい時（二歳）の時に言って、折檻うけたからな。

普通、二歳の子共が『俺』って言っただけであそこまでするか…

……あれはもう、トラウマレベルだよ。本当に『常識を超越する女』
だよ。

「……………大丈夫です。私たちは作ろうと思えば、いつでも作
れます。子供がいらぬ気をまわす必要はありませんよ」

な、なんてチート使用の伯母さま！？ このハルゲニアはそこま
で医療が進歩していないから、安全日とかいう現代の常識が存在し
ない。よって、子供ができる日というのも分かっていないはずなの
に……………完全に『常識を超越』しているよ。もしかして、俺の『幸
運』のような常識を砕く力をもらっているんじゃないのか？ いや
……………転生者は俺の『幸運』のおかげで俺だけのはずだ。

俺が願ったのは『幸运的にも俺以外のイレギュラーがないゼロ魔
の世界』だからな。

「それでサイカは、どこまで魔法が使えるようになったのですか？」

しまった！？ 次の作戦を考えるの忘れてた！

「……………まったく使えません」

だつて！

書庫にずっと籠っていたから魔法の練習なんてしてないよ。

それに書庫の魔法は俺の今の精神力では、まだ使えないよ！

「それでは、まず……そうですね。実戦形式の訓練をしましょう」

「はあ!？」

「実戦形式!？」

「この殲滅のエリスは、なんと言いましたか？」

「なんで魔法が一切、使えないに対して実戦形式の訓練をします？」

「本気で『常識を超越』しすぎているぞ! どの世界に四歳児に
実戦訓練をする伯母がいるんだよ!

「でも……きつと、俺がそう言っても『他所よそは他所よそ、我が家は我が家です』と言われるのがオチだろう。ああ、何で、こんなにエリス叔母さまには常識がないんだ……今さらだけど神様に『幸運』じゃなくて、何か他のチート能力をもらえば良かった。まあ、たぶん『幸運』のおかげで絶対に死なないと思うけど。」

そして、時間は冒頭に戻る。

「エリス伯母さま!？ 無理です!？ 死にます!？」

「大丈夫です! あなたは、できる子です!」

「そんな無茶な!？」

「例え、俺ができる子であったとしても!

時々、こつちを見るメイドさんたちは『ご愁傷様です』的な視線だけこちらに向けて去って行くし!

エリス伯母さまが俺に対して行っている魔法は、大気の水を集めて自分の杖に水を纏わせ4メートル程の鞭を作りだす魔法だ。ちなみに、あの鞭がどれくらい強力かという俺が避けて逸れたムチ

が木に当たった場合の例を出してみると　木の当たった部分は刃物（名刀）に斬られたように綺麗に切れました。

前世でダイヤモンドを加工するのに水を使うって聞いたことがある……確かオウターカッターって言ったような……

なんでハルゲギニアであれを再現できるの!?

……殺される!?! 絶対に!

また、俺に向かってムチが迫る!

これ、逃げられないぞ!

直撃コースだ!

こうなりやヤケクソだ!

昔、本（普通の魔法編）で読んだ魔法の名前を叫ぶ。

「アクアオール!」

イメージは水の壁ができてエリス伯母さまの鞭を防ぐような感じで。

ちなみに俺はあまりに怖すぎて目をつぶって魔法を使った。

目を瞑っているから魔法が使えたかどうかも分からないぞ!

いつまで経ってもムチの痛みがこない　魔法はきっと成功した

いんだ! ……と願いながら恐る恐る目を開ける。

そこには、地面から水が吹き出して水の壁を作っていた。

「おお、俺、魔法が使えてるよ!」

あの水がチヨロチヨロ出る魔法は魔法とカウントしたくないから、これが初めての成功だ。え?　前はカウントするとか言ってたって?　何のことかな?　気のせいでしょ。気のせい。

これで、きつとエリス伯母さまも満足してくれるだろう。

だって四歳児がコモンマジックをすっ飛ばして、これ程までに立

派な魔法を使つたんだ。

満足してくれないはずがない！

叫びたい程の嬉しさを必死に抑えながらも俺はエリス伯母さまの顔を見る。もちろん、終わりだという確認をとるために。

「……………俺？」

清々しいまでに素晴らしい笑顔で首を傾げながら俺を見ているエリス伯母さま。

俺、さつきエリス伯母さまの前だというのに……………私ではなく俺って言ってしまった……………気がするようない……………しないようない……………

再度、エリス伯母さまの目を見る。

思ったことはたった一つだけ。

もうダメだ　と、ちょうど中庭の端の方を見ると乳上がいた。

おお！

神は俺を見捨てなかった。

もちろん、ブリミルさま、なんてこれぼっちも信仰してないけどな！

俺は乳上に助けってくれと目配せする。

すると俺の顔とエリス伯母さまの顔を見比べて……………震えだした！？
どうなってるんですか！？

乳上！　もう乳上って呼ばないから！　お願いだよ！

顔だけは人より優れている乳上が変な顔してるよ！（注意・サイカの父親は神童と呼ばれる程、頭が良い。しかし、現在サイカはそのことを忘れてる）

そういえば、乳上が前に「……………昔、エリスさまに、な……………フルボ

ツコにされたんだよ……あれはアーシアとの結婚を三日後に控えた夜のことだったよ」とか言ってたような気がします。

このチートな伯母さまと正面から決闘するなんて何を考えているのか分からないけど勇気があるよな……

と、現実逃避するよりも……目の前の恐怖に打ち勝つために頑張ろう。

「エリス伯母さま」

「何か言い訳はありますか？」

おお、四歳児に言うことではありませんね。

死ぬってマジで……。

だけど、俺は平民ハーレムを作るまでは死ねない。

だから、現代の日本に古来よりも伝わる秘儀の一つを使う！

必殺！ 土下座しながらの命乞い！

「俺はまだ四歳児ですから」

折檻は軽めにしてください！ と、言う前に俺の意識を失ったのだった。

「う、うん」

「サイカさま、だいじょうぶ？」

起きると、そこには、眠そうな目を擦りながら俺にそう聞いてくれるアリシアがいた。

「アリシア、今、何時だ？」

「はい。おねむのじかんです」

おねむの時間とは普段、アリシアが眠くなる時間だ。ちなみに、だいたい夜の九時くらいだ。

「アリシアが看病してくれたの？　ありがとう」

「はい！」

ああ、可愛い。

あのエリス伯母さまの地獄の辛さをアリシアの笑顔が忘れさせてくれるような気がする。

というより、体が筋肉痛以外で痛くないところをみると、あの鬼畜伯母さまは自分で怪我させておいて自分で俺の体を治したのか？　自分で治すくらいなら初めから俺に怪我させないでくださいよ。

まあ、『常識を超越する女』であるエリス伯母さまに言っても無駄だろうけど。それに、どうせ治すなら筋肉痛も治してくださいよ

……

「~~~~~」

目を擦りながら唸るアリシア。
やっぱり、眠いんだな。

いつもなら、屋敷のお風呂に入って、ベッドに入っている時間だもんな。

そんな時間まで、俺のために起きててくれたのか……

「アリシア、今日は一緒に寝ない？」

「いいんですか!？」

アリシアは目を輝かせる。

アリシアは、まだ四歳だ。親から離れて暮らすには幼すぎる。夜は寂しいから他の使用人と一緒に寝ている。

俺と一緒に寝たいと言った時もあったのだが俺の理性が持つか分からないから、やめてもらった。

平民ハーレムを目指していると言っても俺はまだ、四歳の平民に手をだしたら、俺は唯の変態になってしまう。俺は変態なのは確かだけど、常識のある変態だからな。

「ああ、俺の看病をこんな遅くまでしてくれていたからね。もう、他の皆と一緒に寝てくれって、頼みに行くには遅いだろ？」

「だけど……今日は特別だ。」

だって、俺のせいで他のメイドさんに『いつちよにおねむしてください!』とアリシアが頼む時間がなくなっちゃったんだからな。

それに今日は絶対に俺はアリシアに手をだせないからな。

「はい! サイカさまといつちよに、ねられるなら、アリシア、まいにち、サイカさまのかんびよします!」

ああ、なんて可愛い子なんだ。

俺の元に一生、置いておきたい子だ。

平民ハーレム第一号!?

エリス伯母さまの折檻修行は嫌だけどアリシアと毎日寝る口実ができるなら……我慢できるかも。

「さあ、おいで」

俺はベッドの布団を少し開けて入るようにアリシアに促す。

「はい!」

俺は魔法を使って部屋のロウソクの火を消した。

「サイカさま、すごい!」

「すごいだろう」と返しつつもアリシアにも毛布をかけてあげる。

なんとか……体を動かさせたぜ。しかし、ちょっと動かしたただけも……

我慢している間に突然、アリシアは辛そうな顔をする。やばい! 何かアリシアが嫌がることしたか!?

「サイカさま、サイカさまがねてる、あいだにママからおてがみがきたの」

「そうなの? よかったね」

あれ? お母さんから手紙が来たなら喜ぶと思っただけ……

「うん! それでね……あかちゃん、生まれたの」

いつも、ひまわりのように明るく笑っているアリシアにしては珍しく本当に辛そうだ。

弟か妹が生まれて嬉しくないのかな？

「良かったじゃないか」

「……うん。でもね、サイカさま、あかちゃんが生まれたらね。アリシア、サイカさまと、おわかれなの」

ああ、そういうことが。

「アリシアね、このみんなすき、サイカさまも、アーシアさまも、みんな、すきなの。おうちのみんなもすきだけど……」

「アリシアがいたいのなら、ここにいたらいいよ」「いいの？」

少しだけ瞳に涙をためて、聞いてくるアリシア。

「いいよ、アリシアが、ここにいたくなくなる時まで、ここにいていいよ」

「ありがとう、サイカさま」

そう言って、俺の胸の中でアリシアは少し泣いた。

不安だったんだね。

ちなみに、俺はアリシアに一切、いかがわしいことをしていません。

なぜなら、その日の夜は比喻ではなく本当にエリス伯母さまの水の鞭から逃げ回ったせいで全身筋肉痛だった。

かろうじて杖を持って火を消して、アリシアに毛布をかけてあげるのが限界だった……あれ？ そういえば、俺ってさっき杖持っ

てたっけ？

泣き疲れてすやすや眠るアリシアを見ながら、俺も眠りにつくのがあった。

意識が完全になくなる前にエリス伯母さまが世間の常識を学んでくれますように、と信じていないブリミルさまに祈ったのは言うまでもない。

H a r e m o 3 俺の常識を超越する伯母さま（後書き）

まずは少し謝罪を。

作者にとつて、このエリス叔母さまの存在はサイカの戦闘能力をチート化するにあたり、とても都合の良いキャラクターです。

でも、自分で書いておいて、こう言うのも何ですが四歳児に実戦訓練をさせる叔母って（笑

一応はエリス叔母さまがサイカに厳しいのには、きっちりとした理由があります。しかし、理由を書かずにアリシアとイチヤイチャさせるのを優先させてしまいました。すいません。

先に理由を説明した方が話としては、すっきりとして良いかとも思ったのですが本音を言うタイトルも、あれですしサイカを平民とイチヤイチャさせたかったんです。

このエリス叔母さまがサイカが目指す『俺に優しい平民ハーレム』に、どう関わっていくのか？ と理由についてはお楽しみで。

最後になりましたが魔道書の魔法使いを投稿してから約2日。多くの方に、お気に入り登録と評価、あるいは感想をいただきました。本当に嬉しかったです。ありがとうございます。

これからも、魔道書の魔法使い〜俺に優しい平民ハーレムの作り方をこれからも、よろしくお願いします。

H a r e m 0 4 俺の妖精さま

「きゃあああああああああああああああああああああ」

こんにちは、サイカです……

この頃、こんな始まり方ばかりになってしまつて、ごめんなさい。皆さんのご想像の通り、またエリス伯母さまに拷問……もとい折檻されているので許してください。無理ですつて悲鳴をあげないなんて……

「使用人と夜を共にするとは……ハイム家の人間という自覚を、もっと持つべきです！」

そう言つて昨日と同じように水の鞭を俺に振つてくる。

もう、皆さん、お分かりだと思ひますがエリス伯母さまに昨日アリシアと寝たのがバレた。

まさか、朝一番に俺の部屋に突入してくるとは……想定外だったぜ。

現在は場所を俺の部屋から庭に移して逃走中だ。あのままじゃ、アリシアにまで危険が及ぶからな。

「エリス伯母さま！ は、話を聞いてください！」

「問答無用です！」

俺の魂の叫びは常識を超越する伯母さまには、一切、届かなかつたみたいだ……その言葉と同時にムチが帰ってくる。

くっそ！ 別に四歳児が他の四歳児と寝ても問題ないだろ！？

普通、『微笑ましい』という感情が芽生えるでしょ！ それが、この伯母さま野郎は！ 折檻だと！

今はまだ、体力が残っているので避けられているが……後、五分ももたないだろう。

つつか、そもそもの話、なんで四歳児にボディでエリス伯母さまのムチを避けられているか、謎だ。

たぶん、どつちから来るか分からなかった時に勘で避けると確実に避けれるのが大きいと思う。

さすがは神様からもらった幸運！ それと、なぜか当たったと思った鞭が弾かれたりしている。

こうなったら、エリス伯母さまを倒すしか俺が折檻を逃れる術はない！

……でも、チート使用の最強のエリス伯母さまを倒すのにはどうしたらいいのか、ぜんぜん、分からん。

現状を詳しく分析しよう。俺の使える魔法は………水を杖の先からチヨロチヨロと出す、水の壁を作る　の二つだけ。

軽く詰んだ？

チエスでいう所のチエックメイトだよな？

チエックを通りこしてチエックメイトから始まるゲームなんて聞いたことないけど！？ 昔、友人とよくしたチエスでも、ハンデをつけたことはあるけど、ここまで積み状態じゃなかったよ！

そんなくだらない思考を続けている間もエリス伯母さまのムチは飛んで来る。

ムチをほんの二三回程、避けた時だった。

ふと、視界の隅に黒い影が映る。

「サイカさまをイジメないで！」

そこには泣きながら俺とエリス叔母さまの間に割って入って来るアリシアの姿が！

さっきまで、一人で俺のベッドで寝ていたのに！？ どうして起きたんだ！？ ……俺の悲鳴が原因かな……………

それよりも、やばい！ エリス伯母さまの水のムチの軌道はアリシアの顔に直撃コースだ。

エリス伯母さまが必死に軌道を変えようとする。必死な顔だ。

しかし、いくらチートな伯母さまでも物理現象は止められないみたいだ。

アリシアが傷つけられる！？

俺のために…………嫌だ、そんなこと…………絶対に嫌だ！

俺はない頭をフル回転する。

ここからアクアオールを使っても、たぶん、自分から離れると発動までの時間がなくなってしまうアクアオールではエリス伯母さまの鞭の方がアクアオールの発動より早く、アリシアに届く！

でも、俺が走った所で同じだ。

でも…………でも…………

考えている暇はない！ 走れ俺のロリボディ！

『助けた方が良いですか？』

何か幻聴が聞こえる！？ だけど、助けられるなら俺の妄想でも構わない！

「助けてくれ！」

『かしこまりましたあ

カウンター』

ガキンという音がして、エリス伯母さまの水の鞭が弾かれる。ま、まさか!?

俺の幻聴じゃなくて、現実!?

自分の鞭がアリシアに直撃したはずなのにアリシアが無事なのを見てエリス伯母さまは呆けている。ちなみにアリシアも可愛く尻もちをついて後、目をつむっている。

「誰か知らないけど、ありがとう!」

誰か知らないご都合主義的な誰かにお礼を言った後、俺は走り出す。もちろん、アリシアの元に。

「いえ、いえ、主のためなら、火の中、水の中ですう。今の間にメイドさんを助けに行った方がいいですよ。マスター」
「え、あ、そうだな」

マスター?

俺ってまだ、平民ハーレムマスターになってないよな?

まだ、一回も『平民ゲットだぜ!』って言ったことないもん。それ以外に俺がマスターと呼ばれるはずがないしな? だって俺、普通の人間ですぜ。

と、それよりも今はアリシアだ。

俺は幼児ボデイの限界を超えるかの勢いのスピードでアリシアのもとに行く、俺。

やはり、幼児ボデイを越える勢いでも所詮幼児、遅い。

くっそ、これが大人ボデイなら、すぐに行けるのに。

俺がアリシアの元まで辿り着いた時、未だにエリス伯母さまは呆

けてアリシアは目をつむったままだった。よし、今の間だ。

「アリシア」

「ほえ……サイカさまあ？」

アリシアの瞳には涙が浮かんでいる。やっぱり、怖かったんだろ
う。俺はアリシアの頭を撫でながら

「エリス伯母さま！ 平民を守るのが貴族です。魔法は平民を守る
ためにある。そう私はエリス伯母さまより教わりました！」

叫ぶ。ここが、俺の正念場だろう。

ちなみに教わったのは二歳です。普通の二歳児だったら絶対に覚
えてないと思ってしまうぞ、エリス伯母さま。それどころか、普通は理
解できないだろ？

「え、ええ、その通りです」

さすがにうるたえているエリス伯母さま。もう少しで、小さな幼
女を殺してしまいそうになったのだ。自分勝手な貴族以外はうるた
えて当然！ 特殊性癖のある人は知らないけど。

「それなら、なぜ、アリシアを攻撃したのです？」

「あ、あれは、あの使用人が勝手に出てくるから……」

ここは折檻を終わらせるために、たたみかけなければ！ 先ほど
正念場と言ったのはこのためだ。

「言い訳ですか、『私』はいくら折檻されようと構いませんが、『私』
の可愛くて幼い平民を傷つけるのは許しません。そう美少女の平民

を傷つけるのは例え、神が許しても『私』が許さない！」

決まった！

ここまで言われてしまえば、何もできなくなるだろう！ この前のように『俺』という失敗は犯してないしな！

チェックメイトだよ、エリス伯母さま。

「分かりました……そこは謝ります　しかし、サイカ、あなたの折檻と謝罪は別です。先にあなたの折檻を済ますことにします。その後でゆつくりと、その使用人に謝罪します」

あれ？

なぜか死亡フラグ回避できていないような……

『マスターはカッコイイことを言いますね』

俺がまた現実逃避に至りそうになった時、さっき聞こえてきた幻聴がさつきより大きな声で聞こえてくる。

『当たり前ですよ。マスターの耳元で喋っているですからあ』

そこで気づいた……俺の右耳のところに人形みたいな羽の生えた何かがいる。

『わたしの名前はエレイン・フォー・グランダール・スプリングです』

……どう見ても精霊です……

『違いますよ。マスター。わたしは妖精です』

……ゼロ魔の世界に妖精いたっけ？ 水の精霊さまはいたような気がするけど。

『マスターが書庫の主になってくれたおかげで復活できたんですよ』

そんな嬉しそうな顔されても……

『マスターがピンチみたいなので、わたしが助けてあげますよ』

さっきから気になってるんだけど、俺の心が読めるの？

『ちょっとだけですけど』

なぜ、そこで少し恥じらうんだ……

俺は俺の耳元にいた妖精、もとい精霊様をじっくりと観察する……長い翠の髪に、その緑色よりも深い色の瞳。そして透き通るような白い肌……着ているのはボロい翠色の布……それに幼い顔、アリアの他にもう一人、妹ができたみたいだ。

「サイカ良い、度胸ですね。私を無視するなど」

ドスのきいた声で俺に話しかけてくるエリス伯母さま。

し、しまったエリンと話す？ のに集中しすぎて、エリス伯母さまの存在を忘れてた！？

『マスター、マスターが戦うなら、わたしも戦いますよ』

胸の前でガッツポーズする妖精さま……可愛ゆい。

妖精さまがいれば勇気百倍だ！

しかし、あのタイミングで出て来たくれたのは、きっと俺のチート能力『幸運』が発動したからだろう。久方ぶりに役にたつてくれたぜ！

「アリシア」

「ひゃ、ひゃい!?!」

「ちよっと、ごめんね」

俺はとりあえず、アリシアがどこも怪我をしてないかを確認するため、アリシアの体をメイド服の上から色々と触る。

け、決してエロい意味じゃないからな！ これは、そのし、心配したからだ！

「サイカ……あなた、わたしの前で良い度胸ですね」

何かエリス伯母さまが言ったようだけど、怖そうだから無視！

「エレイン、行くぞ！」

俺はエレインに声をかける。生き残るためなら妖精でも何でも頼るんじゃないか！

『はい。あ、マスター私のことはエレンでいいです』

「分かった、エレン。二人で力を合わせて、チート伯母さまを倒すぞ！」

『はいですう』

「……先程から誰と話しているのかは知りませんが、折檻です」

そう言って水の鞭を再び、俺に振るってくる。

『カウンターですよ』

俺をカウンターでエリス伯母さまの水の鞭から守ってくれる。

『マスター、私が今、使っているカウンターはカウンターとは名ばかりで、あの人の攻撃は弾くことが限界ですう。マスターが決めてくださいです！』

「えっ!?!」

やばい、もしかして、エレンは俺が二つしか魔法を使えないことを知らないのか？

『大丈夫です。『幸運』的にも私が目覚めたことでマスターは、精霊から力を借りられるはずですよ。ですから、今のマスターなら水を杖の先からチヨロチヨロと出す魔法が強くなっているはずですから!』

……俺の魔法……水を杖の先からチヨロチヨロと出す魔法って言われた……自分で言うのはいいけど、他人に改めて言われると何か情けないな……

『何をいじけているんですか、マスター！ エレンのカウンターはもう、もちませんです』

「わ、分かった。もう、どうにでもなれだ!」

俺は魔法を発動させる。

そして、杖の先から……杖がない？ あれ？ だけど、拳くらいの大きさの水球がエリス伯母さまに飛んで行った。

エリス伯母さまは目を大きく開けて、驚いている。

俺、今……普通に先住魔法使っちゃまったよ。妖精さまたちに言わせれば精霊魔法みたいだけど。

それにしても何で？

エリス伯母さまも驚きすぎて俺の水球を頭に受けた……

……あ、めっちゃ怒ってる。

『マ、マスター。ま、魔力が持ちません。次はダメです』

何か、自分で自分が怖い……何で先住魔法を俺が使えるの？ 俺って実は人間じゃなかったの？

「サイカ……お仕置きです」

妄想にひたっている間に、俺の意識は途切れるのだった。

目が覚めるとそこはよく見知った天井だった。

「あ、サイカさま！」

「ぐはっ!? あ、アリシア!？」

俺は寝ていたベッドにアリシアがダイブして来る。

さすがに四歳の体で同じ四歳の人間にダイブされたら体が痛い
です。

まあ、美幼女平民だから許すけど!

「もう、おけが、だいじょうぶ?」

俺の上に乗っっぱなしで聞いて来るアリシア。

「ん? 俺って怪我してたの?」

「はい……エリスさまが、おみずのひやく? をつかって、くれた
からなおったの。だけど、アリシアしんぱいな……」

ぐっ!??

上目づかいで俺を見て来るアリシア……その翠色の瞳の金髪美幼
女にそんなことされたら……俺の……理性が……このハルゲギニア
では襲っても……

はっ!?

いかん、俺は何てことを考えていたんだ。せっかく、アリシアが
心配してくれていたのに。

それに俺は平民ハーレムを作る男。こんなことで理性が持たない
ようでは貴族を怖がっている平民をハーレムに加える何てできない
ぞ!

「お話し中ですが失礼します。サイカさま、起きられたのでしたら

至急、旦那様の書齋に向かってください。旦那さま、奥さま、エリ
又さまがお待ちです」

「え？」

今まで、存在に気がつかなかったけど俺の横に見知った顔のメイ
ドさんが控えてくれていた。

……考えたらアリシアだけに俺を任せるってことはないよな。
だって仮にもアリシアはメイドだけど四歳だもんな。

「分かった」

それだけ言っただけで部屋を出ようとした所でアリシアに服の裾を掴ま
れた。

「どうしたの？ アリシア」

「……ごめんなさい」

「え？」

「サイカさま、アリシアのせいで、おこられる」

アリシアの瞳にはうつすらと涙がたまっている。自分のせいで俺
が怒られると思っているんだな。

「大丈夫、怒られるんじゃないよ。お話しに行くだけだから」

「ほんと？」

「うん、本当。だから、アリシアは他のメイドさんと一緒に仕事を
しててね」

「はい！ アリシア、がんばる！」

ガッツポーズをしながら、決意表明するアリシア。今の君の可愛
ゆさなら大統領にもなれるぞ。

俺は控えてくれていたメイドさんに目配せしてアリシアを連れて行くように指示する。

意図を察してくれてメイドさんはアリシアを連れて部屋を出る。

さて、これから、どうしよう？

というより、あの妖精さまは何だったんだろ？

そういえば、何で妖精さまかつて？ だって、神さまは神さま、妖精さまは妖精さまでしょ。

『マスター、エレンって呼んでくださいです』

ふと、また耳元で幻聴が聞こえる。

……嘘です。幻聴じゃないです。

「エレン、まだいたの？」

『ひどいです。エレンはマスターの僕なので、一緒にいるのは当たり前です』

「……………分かったよ。俺は今から乳上と母上とエリス伯母さまに会いに行くけどエレンはどうする？」

『エレンも行くです』

ということで、なぜか、エレンも同行することになりました。

ちなみに僕しゅへって聞いて、ちょっと興奮した俺は可笑しくないよね？

男なら、例え妖精でも自分から『ご主人様の僕しゅへです』とか言われたら興奮するよね？ ねえ！

部屋の中は静寂が包みこんでいた。

そんな中、口を開いたのは薄い水色の髪を肩近くまで伸ばした女性エリス・シャイ・エ・ライト・フォークだった。

「なぜ、未だにあなたは話してくれないのですか？ 婿殿？」

書齋に備え付けられている自分専用の席に座っているのはハルゲニアでは一般的な金色の髪をした青年とも言える容姿を持ったハイム家当主ラルドはそうエリスに尋ねられても無言という返事をするだけだった。

「はあ、本当に何も話してくれないのですね？」

エリス顔は笑っているのに目は一切笑っていない笑みを一身に受けてもラルドは口を開こうとしなかった。

「エリスお姉さま……彼を責めないであげてくださいますか？」

そう言ったのはハルゲニアでは珍しい水色の髪の色をしたサイカの母であるアーシアだった。

「しかし……」

「お願いします」

そう言って頭を下げるアーシア。

「はあ、分かりました。とりあえずサイカを待ちましょう」

エリスも実の妹にここまで言われてしまっただけは何も言えないのであった。

また部屋に静寂が訪れる。

それから、どれくらい経った頃だろうか？

部屋の扉がノックされる。

「サイカです」

「入りなさい」

今まで、一切、口を開かなかつたラルドが口を開く、そのことに少々驚くエリスだが入って来る人物がサイカのため、そんな動揺した姿を見せる訳にはいけない。　　と思ひ、すぐにいつもの真顔に戻る。

「失礼します」

入って来たサイカにアーシアの隣に座るようにラルドは促すと立ち上がり後ろの窓から空を眺める。

そして唐突に

「エリス伯母さまから聞いた継承したのか？」

そうサイカに尋ねた。

「え？」

それに何のことか分からないと言った風にサイカは首を傾げるが、ラルドは言葉を続ける。

「おまえが書庫に通っている時点である程度、予測はついていた。おまえが継承者なのだろう、と。しかし、父としてはそれを認めたくなかった。しかし、おまえが継承してしまった以上、始祖について話さないといけない。エリスさま、サイレントをお願いします」

「分かったわ」

そう言っただけで懐から取り出した杖を一振りするエリス。

「これで外部にこの話が漏れる心配はなくなった。話そう、我がハイム家の本当の存在意義。その前にサイカ、エレイン・フォー・グランダール・スプリングを呼びだしてくれないか？」

「え？」

再び驚くサイカ。

「そうか、未だに継承して間もないんだな。エレイン・フォー・グランダール・スプリングに姿を見せるように言ってくれるだけで構わない」

「……分かりました」

サイカは父に言われた通り、自分に色々なことを教えてくれるであろう、妖精に呼び掛ける。

すると、サイカの目の前に突然、緑色の髪に瞳、羽を持った人形程の大きさの妖精が現れた。

「はあ、本当だったのか」

それを見て一人、溜息をつくラルド。

「どついついことが説明してくれるのかしら？ 婿殿」

「そうですね。エレイン・フォー・グランダー・スプリング、私
まず聞いていることを話す。その後、もし間違っていたら君が訂正
してくれ」

すると、名前を呼ばれた妖精はサイカの方を向いて指示を求める
ような仕草をした。

「サイカからも頼んでくれ」

「エレイン、お願い」

「はいですう」

「それでは話をしましょう。まずは、この家の成り立ちからで
す。このハイム家は始祖ブリミルから書物を預かったと言われてい
ますが、それは全て嘘です」

『え？』

その言葉にサイカとエリスはそろって声を上げる。二人とは対称
的にエレインは気まずそうにする。

「サイカも驚いたということは、まだ何もサイカに話していない
だね。エレイン・フォー・グランダー・スプリング」

こくん と頷くエレイン。

それを確認した後にラルドは再び口を開く。

「我がハイム家は人間でありながら、始祖ブリミルの虚無ではなく先住魔法、つまり精霊魔法を極めた一族なのです」

「ちよ、ちよつと待ちなさい婿殿！ あなたの話しが本当なら、今まで誰も読めなかつた理由は！」

「そうですね。エルフや他の高度な知能をもつ亜人が扱う文字だったからです。そうは言っても遙か昔に使われていた文字なので今の文字とは違っているかもしれませんが。それにあくまで人間とエルフ、その他の種族がそれぞれの文字で書いたため色々な言語で書かれているはずですよ。ただし、精霊魔法を受け継ぐべき継承者にもみ読めるとされてきました」

あっているよね、エレイン・フォー・グランダー・スプリングに聞くラルド。

それにエレインは控えめに頷く。

「初代ハイム家当主は、エルフや他の亜人と共に様々な魔道書を作り、そして書庫の本の魔法、全てが書き写され、精霊を宿した『はじまりの書』を作成しました。『はじまりの書』は現在でもハイム家の書庫の一番、奥に隠されています」

「その書に宿っていたのが……エレンなんだね」

「そうだ、サイカ。そして、その妖精が宿った魔道書『はじまりの書』はハイム家の当主の中でも精霊魔法を扱える資質を持つ者のみを主と認め、その妖精が姿を見せた。どの当主でも使えるわけではなく、あくまで資質をもつものだけだったが」

「待ちなさい！ ……それが、もし本当ならサイカは……ロマリアに……」

「はい、エリスさま、間違いなく異端に認定され殺されます。幸い、最後に精霊魔法を扱えた第三十九代当主がロマリアを騙すため世間に始祖が作りだしたものだ」と言いふらしたのです。その始祖はブリミルだと言わずに。まあ、あの書物の中では、初代当主が始

祖とされているのであながち嘘ではないのですが。だから、直接『はじまりの書』の力を虚無が分かる人間に見られない限りはばれないはずです」

「そうですか……それは良かった。例えば、私でもロマリアと『一人』で全面戦争をすれば勝てるか分かりませんかからね」
『え！？』

エリスのその言葉に若干、退くサイカとラルドだったが……ラルドは取りあえず話を続けることにした。

「だから、この話は内密に」

「分かりました。私としてもあの金の虫どもに大切なアーシアの子供をみすみす渡すつもりはありませんからね」

「なら、この話は、もう大丈夫ですね」

最後にそう締めくくったのは今までまったく話しに参加しなかったアーシアだった。

H a r e m 0 4 俺の妖精さま（後書き）

視点ブレをなるべくしないように努力している、つもりですが、まだまだ、文章勉強中で未熟な私ですので、どうしてもサイカが登場しない場面の書き方がうまくいきませんでしたのでサイカの登場しない部分は三人称で書くことにしました。

基本は一人称で書きますが時々、三人称がでてきます。

H a r e m o s 俺の驚き

サイカです。エレンと魔法の書についての話をした日から少し経ちました。

まあ、基本的には何もありませんでした。ただ、俺がエリス伯母さまのしごきを受けていただけで。

何でも俺に精霊魔法に頼らずに、強くなってもらいたいらしいです。

確かにロマリアにいる時に精霊魔法を使うと神官がうるさいだろうしな……まあ、ロマリアに行きたいとも思わないから、あんまり関係ないとも思えるけどロマリアの神官は結構、どこにでもいるからな……あの馬鹿どもは。

しかし……あの伯母さまのしごきはマジでしんどい！ まあ、実戦訓練は初日以降、一切ないのが救いだけど。理由を聞いてみたら、なんでも魔法を覚えたての頃に死ぬような体験をすると、飛躍的に魔力が上がるらしい。

だけど、4歳にすることはないだろ！ 皆忘れているかもしれないけど俺は4歳だぞ。前世では、まだ、小学校にも通ってない！ どのかの魔砲少女でも魔法を使うようになったのは9歳ですよ！ 無理、死ぬって！ でも、死んだら、平民ハーレムが作れないから頑張って生き残るけど。

ちなみに……本来、やっぱり魔法は8〜10歳の間にコモンマジックを覚えるらしいです。

でも、どっかの馬鹿乳上が『サイカに早く魔法を教えたいんだ！』と言いながら周りの反対を押し切ってコモンマジックを、どっかに忘れ去り、あの中庭で俺の系統を調べたらしい。

だから、未だに俺はコモンマジックは使えないまま、それなりの

水の魔法が使えるようになったぜ……やるせねえ……

そんなことを考えつつも俺は今日もエリス叔母様のしごきを受ける。

さぼった時の折檻の方が何倍も辛いからな……

「サイカ、今日はこれくらいにしましょう」

「はい、エリス伯母さま」

現在している修行^{イジメ}の内容は杖の先から水をチヨロチヨロ出す魔法を俺の精神力が尽きるか、エリス伯母さまが許すまで使い続けることだ。

別に、これくらいの辛さの修行は精神年齢が魔法使いになれる年齢だから問題ない！ だけど、だけど！ 通りかかったメイドさんが、魔法（水をチヨロチヨロ出す）を使っている俺を見て苦笑した時は本気で死のうと思うほど恥ずかしかった。

だって、まるで、まるで……トイレしているみたいじゃないか！ 杖から出ているのは、せめてもの救いだけ！

……そうそう、エリス伯母さまのしごきがすごいのか俺がすごいのか分からないけど俺は一昨日、ラインメイジになった。

このペースなら最少年でスクウェアになれる可能性まである……らしい。

本当は俺、魔法なんて、どうでも良いんだけどな……ただ、平民の美少女を集めてハーレム作ればそれだけでいいし、でも、水を杖の先からチヨロチヨロ出す魔法でラインメイジになれたかと思うと やるせない。

そういえば、ラインメイジで思い出したけど、貴族って何であるなに何かを自慢しようとするんだろう？

乳上と母上とエリス伯母さまはさほど自慢しないけど、この前、

家に遊びに来た某貴族は自分の息子が七歳ですでにコモンマジック
を使えるんだって自慢してたよ。あのまま、ほっといたらきつと、
二時間程自慢しそうな勢いだっただ。

乳上の時間がいくらか使われようが構わないけど俺と母上とアリシ
アの午後のお茶の時間を邪魔されなくなかったから、四歳らしく『
僕、四歳だけど、ラインメイジだよ』と胸を張って言ったら向こう
の某貴族は顔を真っ青にしていた。

某貴族がグラモンとか言っていたような気がするけど、まさか、
原作で国軍の元帥をするような貴族が家のような没落寸前貴族の家
にわざわざ来ることはないと思うから絶対違うと思うよ！

平民ハーレムを作る前に戦死フラグを作るようなことはしてない
……よ、たぶん……

「サイカ！ 話を聞いているのですか？」

「はい、聞いています！」

と、いけない、いけない、また思考の海に入っていたよ。

「今日はこれでやめてしまっってよろしいんですか？ エリス伯母さ
ま」

「ええ、今日はこれくらいにしておきましょう。明日の模擬戦に向
けて精神力を温存しておいてもらわなければいけませんから」

「え！？」

何て言ったよ、この婆おばあちゃん！

「だから、明日、ラインメイジになれたお祝いに私がサイカに稽古
をつけてあげると言っているのですよ」

「い、いえ、まだ、私はエリス伯母さまの足元にも及びませんので

……」

注意、俺はエリス伯母さまの前だけ自分のことを『私』と呼ぶ。

「そんな謙遜することはありません。今のサイカなら『はじまりの書』を使わなくても十秒はもちます」

じゅ、十秒!? だと。

それなら、初めからやりたく……

「なんですか? それとも、私の稽古が嫌なのですか?」

「い、いえ! そんなことはありません! エリス伯母さまの稽古は大好きです!」

前に、嫌いと言ったら後の三日間は死ぬかと思うくらいの地獄を見せられたから、死んでもエリス伯母さまの稽古を嫌だなんて言えない。

まあ、その時は模擬戦じゃなくて、ただの修行内容が辛くなるだけだったけど。

「それほどまでに好きなら、やはり明日、行います」

しまった!? 罠だ! しかし、俺にこれ以外の選択肢は……ないな。仕方ない。

明日、エリス叔母様にしばかれよう と、あきらめかけた時に俺は気づいた。

「エリス伯母さま、お言葉ですが私はまだ四歳児ですよ。そんな私に戦いはまだ早いです!」

ふと思いついた勝った……これなら、エリス伯母さまは言い返せ

ないはず！　いくら常識を超越しているとはいえ、戦がまだ早いことくらい分かるだろう！

「戦場では年齢は関係ありません」

「……さいですか」

一瞬にして俺の意見は撃沈。知っていましたよ。この伯母さまに常識が通じないのは。だから、そんな伯母さまなら……

「エリスおばさま一人で国が落とせるんじゃないですか？」

と、思った事を口に出してしまった。ど、どうしよう……これ
で機嫌を損ねたら……死ねる！　やばい！　と、焦ったがエ
リス伯母さまは少し考える仕草をしだした。

「……尊敬してくれるのは、ありがたいんですけど、それは無理で
すね」

尊敬じゃねえよ、とつつこみはいれないことにした。俺も日々、
学習しているよ。

「そうなんですか？」

だけど、意外だ。この人ならやれると思ったんだけど……

「ええ、世界には、私と互角に戦える者が数人います」

世界！？　世界と言ったよ、この伯母さま！　それも世界に数人
！？　これってエルフとか竜とかも数に入るのかな！？　人間だけ
の話だよね。

「一番近場の『人間』で言うなら『烈風』ですね。まあ、決闘では私が勝ちましたが」

勝ったの！？ この伯母さま！？ あの二自作なんかではチート使用の最強の貧乳に！？ 豊満な胸を持たれるエリス伯母さまが！？ それも人間って言ったよ、この人……

「まあ、元々、女の癖に男装ができる程、胸の小さな女の小賢しい魔法などに私が負けるはずはありません」

……ガチでこの伯母さまには逆らわないでおこう。そんな誓いを立てる俺だった。

「さて、屋敷に戻りますよ」

俺とエリス伯母さまが屋敷に向かって歩きだすと

「しゃ、しゃいかさま たいへんですう」

こちらに向かってアリシアが慌てて走ってくる。

どうしたんだろう？ それにしても、本当にこの子は可愛いな。転ばないかな？ って、俺はアリシアにお父さんか！？ というツッコミを自分にしながら、それでも心配してしまう俺だった。

ふう、なんとか転ばないで俺とエリス伯母さまの元にこれた良かった。

「しゃいかさま、しゃいかさま、ちやいへんなんです！-!」

焦り過ぎて嘔みまくるアリシア。ああ、相変わらず癒されるな。

「アリシア、落ち着いて、ほら深呼吸して」

「は、はい。す〜は〜は〜す〜は〜は〜」

「落ち着いた？」

「はいっ！」

「それで、何が大変なの？」

「……………アーシアさまが『ゆうかい』されました」

『な！？』

俺とエリス伯母さまは、同時に驚く。確か、今、母上は父上と共にお城に向かっていたはず……………エリス叔母さまも一緒に行ってくれと何度、願ったことが。

「だんなさまが、おけがしてかえってきてね、それでアリシア、だんなさまと、しっじさまが、おはなししてるの、きいちゃったんですっ！」

メイドは見た！ という、あれか。

「そうなの、教えてくれてありがとう」

とりあえず、アリシアの頭を撫でる俺。

「はいっ！」

撫でられるのが気持ちいいんだろうな、目を閉じちゃったよ、この子。ぜひ、部屋にテイクアウトを！

「サイカ、サイカは、アーシアと共に、自室に戻りなさい」

なぬ！？ 添い寝しただけでも怒った、この叔母さまが！？ というよりも心を読まれた！？ そんな馬鹿な！ いくらチート使用なおばさま、でもそれはできないはず！ もし俺のあれやこれやの考えがばれていたのなら…… やばい軽く死ねる。毎日、毎日、平民さんとイチャイチャする妄想に励んでいたなんて他人に知られたら恥ずかしくすぎる！

「分かりましたね？」

そんな俺の考えとは裏腹にエリス叔母さまが今まで俺達に聞かせたことがないほど低い声でそう念を押す。

これは…… 分かっていたさ。俺が考えていた馬鹿な能力をエリス伯母さまは持っていない。つまり所、俺に何もさせないつもりなんだろう。

「しかし」

俺は乳上はどうでのいいけど母上が危険な目にあっているのに無視するなんてできない！ できれば俺の手で助けに行きたい。

「二度は言いません。ライルがいて誘拐させてとなると子供が出る幕ではありません」

一応、乳上はあれでも火のスクエアメイジだからな。そして、反論は許さない、と言った風にエリス伯母さまは風のような早さでどこかへ去ってしまった。だぶん、行先は父上の所だろう。

「アリシア、一つお願いしてもいい？」

「はい！ アリシアはやればできるよ、だから、だいじょうぶですっ！」

本当に、この子は。

「ありがとう。前と同じように俺のベッドで、お昼寝しててくれるかな？」

「はいっ！」

そう言って、アリシアは、俺の部屋にトテトテと走って行く。メイドさんたちにはバレてしまうがそこは俺の幸運とアリシアの可愛さでカバーだ。さて、俺はまず情報収集といきますか。

俺は現在、乳上の書斎の屋根裏にいる。

え？

なんで、そんな所にいるかって？

簡単な話だ！

小さい時にメイドさんの生着替えを……もとい、屋根裏で遊んでいた時に屋根裏の構造は完璧に分かるようになったぜ！

まあ、子供一人くらいが入れるスペースしかないから、大人は入れないので俺の家に敵対する人間おとながここから侵入して色々な所に行くのは不可能だ！ だから乳上や母上に黙っているのも許される。

さて、幸い我が家に風のメイジはいないから、俺がここにいってもばれないだろう。『マスター……覗きはよくないですよ……』

エレンが俺を諭すように言ってくるが……てか、本当に神出鬼没だよな、この子。

「エレン、誘拐されたのが乳上なら俺は何もせずにエリス伯母さまに任せる！ でも今回、誘拐されたのは母上だ！」

一呼吸おいてから俺の心の中の本音をぶちまける。

「母上とイチヤイチャしていいのは俺だけだ！ もし盗賊なんかが母上にちやっかい出してた時は、本気で俺が自分で制裁しないと俺の気が済まない！」

『……マスター……私、マスターがダメな子に見えてきましたです
う……』

「気のせいだ！」

『そうですか……』

お、エリス伯母さまが来たので話を聞くことに集中する。

『アーシアは誘拐されてしまったのですか？』

『はい、申し訳ありません。私がつと、強ければ……』

ここからではベッドの上に寝ている乳上の顔は見えないがきつと悔しそうな顔をしているんだろう。

まあ、乳上と俺はライバルだから同情はしないけどな！

主にどつちが母上を好きかで！

『いえ、仕方ありません。例え鍛錬をサボっていたとしても、あなた程の使い手にそこまでの怪我を負わせるのです。並みの相手ではなかったでしょう』

『いえ、相手が誰であろうと守れなかったことは事実ですから』

……さすがは乳上……そこは感心だ。

だって、これが他の貴族なら、もの凄く言いわけをするんだろうな。

『相変わらずですね姫殿。貴族には珍しい、そんな謙虚な所にアーシアも惹かれたのでしょう。後は安心なさい。私がアーシアを救います。あなたにもしものことがあれば、無事に帰って来たアーシアが悲しみます』

『ありがとうございます。それで警備の者を用意しますので少々お待ちください』

『姫殿、結構です。トライアングルメイジが六人と平民が十五人ですか？ 私なら五分以内で倒せます』

……トライアングルのメイジ六人と平民を一人で五分？

どれだけチートなんだよ……エリス伯母さまは……というより、その戦力って本当に盗賊なのか？ 中規模くらいの村なら一瞬で占領にできる戦力だぞ。

『しかし……』

『くだいです。私は今からすぐにアーシア搜索に乗り出します。くれぐれもサイカが暴走しないように見張っていてくださいね。あの子にもしものことがあったら……』

そこで少し苦しそうな顔をするエリス伯母さま……あ、俺の位置からエリス叔母様の顔は見えるんだ。

でも、いつも、しごかれてるけど、やっぱり俺のことを……

『私の楽しみがなくなります』

おい！ そのチート婆！ 俺のことをどんな風に思っているんだ！

『それは……』

『冗談ですよ、婿殿』

『はは……あなたが冗談など珍しいですね……』
『婿殿を気遣ってですよ』

エリス伯母さまの話は……本当なんだろうか？

嘘なんだろうか？

俺には判断がつかない……いや、マジで……目はマジだったよっ
な気がするけど……顔は笑ってたしな……

まあ、今は母上の方を優先させよう。

「エレン、力を貸してくれる？」

『もちろんです。ますたー、絶対にアーシア様を助けましょう！』

そう意気込んでくれるエレイン。しかし、敬意を払って呼んでいた呼び方『マスター』から、子供が友達を呼ぶような感じの『ますたー』に変わってたような……でも、とりあえずお礼は言っとかないとな！

「ありがとう」

『はいっ！』

さて、母上を誘拐した奴らを徹底的に虐めないとな……それと一応だけど、『覚悟』をしないとイケないだろうな。

……人を自分の手で殺す『覚悟』を。

しかし、さっきも言ったが本当に、ただの賊なのだろうか？

H a r e m 0 6 俺の中二病(前書き)

今回は中二病と勢いだけで乗り切ろう！ をコンセプトに書いて
みました。戦闘は、ほとんどありません。

H a r e m o 6 俺の中二病

「エレン、見張りは？」

『たぶん、いないですう。でも、一応、エレンが確認してくるので待っていて欲しいです』

現在、俺とエレンはハイム領から首都へ行くために通る道から入れる森に来ていた。そして、少し遠くに洞窟が見える。そこに母上はいる。

おそらく、まだエリス伯母さまは、この場所を特定できていないだろう。

なぜ、チート伯母さまを出しぬけたかと言うと 『はじまりの書』を使ったからだ。そもそも『はじまりの書』というのはインターネットの検索エンジンに近い。例えば、転移系の魔法が知りたければ『転移ができる魔法』と念じながらページをめくると、あの書庫の本にそういう魔法が載った箇所があれば、そのページが『はじまりの書』に現れる。

もし、原本が何らかの形で失われていても、『はじまりの書』の検索には引つかかるので読んでいたら頭が痛くなるほどの膨大な量の魔法の知識が詰められていることになる。

なら、はじまりの書さえあれば、原本なんていらなくねえ？ と思つかもしれないが話しはそんなに簡単ではないんだ。『はじまりの書』が扱えるのは精霊魔法が使い、なおかつ、ある素質があるハイム家の直系だけらしいから。他の人が何か知りたくても知ることはできなくなってしまう。本とは誰でも公平に知識を得られるものはずだから、『はじまりの書』を持つ者だけが独占してはいけない。

まあ、それは昔の話で今は文字が誰にも読めないから結局のところ、俺の独占状態なんだけどね。

それに初代ハイム家当主、つまり始祖が、どんなことがあっても書庫の本『全て』を守るように遺言で言い残したのも理由らしい。

今、言った事は全てエレンの受け売りだけど。

ここまで話したなら大抵の人は分かっただろう。俺は『はじまりの書』の中にあるサーチ系の魔法を使って母上を探した後、肉体強化魔法を自分に使って、ここまで走って来た。

まあ、サーチ系の魔法で結構、魔力使っちゃったから残っている魔力は普段の六割程だ。これでトライアングルクラスのメイジと平民たちを相手に勝てるか？ と聞かれれば、分からないとしか答えようがない。実戦は初めてなのだから。

だけど、まあ……たぶん、大丈夫だろう。エリス叔母さま並みの化け物はいないだろうから。俺の魔法とエレンが使える『カウンタ―』を上手く利用できれば、おそらく無傷でも勝てるはず。それに俺には幸運があるから死なないはず。

「ますたー、見張りの人がいたですう。でも、普通の人じゃなかったですう。たぶん、見張りの人がラインメイジです」

「え？ 見張りがメイジなの？」

見張りがラインメイジ？ おかしい普通の盗賊ならチェスで言う所の『兵』^{ポーン}つまりは平民を見張り役に立てるはずだ。

魔法の使えない者は特殊な例外を除けばメイジよりも弱い。メイジが相手なら一対一であれば、ドットにさえも、一瞬で殺される可能性もある。でも、それはメイジも同じだ。奇襲を受ければ一瞬で殺される可能性もある。だから、普通は戦力的な損失を考えた場合

は普通、戦力を残しておくために平民を見張りに置くはず。

トライアングルクラスが確か6人いたらしいから……ライン程度の戦力は使い捨てなのか？ 盗賊なのに……

「エレン、中の様子も窺って来てもらってもいいかな？ 本当はすぐに突撃するつもりだったけど、普通の盗賊とは違うみたいだ。できれば、母上が無事かどうかも確認を頼む」

『はいですう』

ふう、これで、取りあえずするべきことはした。後はエレンの調査の結果によつて作戦を立てよう。ちなみに、なぜ、エレンに行つてもらつたかと言うとエレンは自分が姿を見せたいと思つた相手意外には認識されないからな。透明人間状態だ。エレンの場合は透明妖精だけだ。

え？ いつもの訳の分からない俺とは違つて？ 当たり前だろ？ ここで何も考えずに突撃なんてしたら人質にとられている母上の身に危険が及ぶ可能性もあるんだ。綿密に作戦を組む必要がある。そもそも、突撃するだけなら叔母さまに任せれば問題ないだろ？ あの人なら場所が分かれば何も考えずに突撃するよ。それが嫌だから俺が態々動いたんだ。決して母上がエロいことされるかもしれない状況に我慢できなかった訳じゃないからな！ じゅ、純粹に俺は母上を助けたいだけだからな！

『ますたー、中を見てきましたあ』

「ありがとう、エレン。それで中の様子は？」

『はいです。どこかに行く準備をしていました』

「っ!？」

つまり、エリス叔母さまを呼ぶ時間がなくなった訳だ。元々、呼ぶつもりはなかったけど。

それよりも、だ。おそらく、母上をどこかに移すんだろう、どうりで、見張りにラインメイジをつけるはずだ。アジトが最も襲撃されて困る時は移動前の荷造りの時だから。

盗賊なら、せっかく手に入れた財宝を襲撃のせいで壊されるようなことは避けたいからな。

『それとアーシアさまは縄で縛られていましたが傷などはありませんでしたあ』

な、何だつて!?! S Mだと!?! 俺でさえ、したことがないのに……盗賊共め……殺してやる! 俺の母上に俺より先にS Mを強要するなんて!

『ますたー、落ち着いてくださいです! 魔力が漏れると見張りのメイジに見つかかるかもです!』

「そ、そうだったな……ありがとう、エレン」

ふう、ついつい、エロのことになると反応しちまったぜ。俺が目指すのは平民ハーレムだけど、やっぱり大好きな母上ともエッチなことしたいもん。

え? きんしんそうかん? 何それ? 俺、馬鹿だから難しい言葉分かんない。

もちろん、母上の同意が得られなければいけないけど……(一生、得られることはないだろう。少なくともアーシアはノーマルだ)

『それよりも内部の情報ですう。中には平民が15人とトライアングルメイジが6人とラインメイジが3人でした』

……その戦力は絶対に盗賊じゃないだろ。

『中で俺たちは雇われただけ、とか言っていました』
「……黒幕がいるのか」

やっぱり言えば、やっぱりだけどな。

『でも、ラルドさまが負ける程じゃないと思うです』
「えっ？」

『この戦力ではラルドさまは落とせないですう、他に誰かいるはず
です』

「……それも計算に入れないといけないな」

時間がない。

俺が今、思いついたプランは4つ。

俺が洞窟に正面から突入、混乱させ、その間にエレンに母上を助けてもらう。

盗賊は相手にせず、転移魔法で母上の元まで飛んで母上を連れて再び転移で逃げる。

幻術系の魔法で盗賊？ を混乱させている間に救出。
洗脳系の魔法で見張りを操って母上を連れださせる。

これくらいだろう……だけど、どれも欠点だらけの気がする。
とりあえず俺は考えたことをエレンに話して意見を求める。

『どれも無理だと思うですう。今のますたーの魔力は六割くらいです。後の二つは大量に魔力を必要とするですから絶対に無理です。それに幻術系と洗脳系は『はじまりの書』の中でも禁忌指定される程、扱いが難しいです。今のますたーの技術では相手を操るより先に、ますたー魔法に吞まれるです』

「そっか……」

やっぱり、多少の危険は覚悟でエリス叔母さまを呼んで来て突入してもらうか？ いや、ダメだ。もう奴らが逃げる準備をし始めているんだ。呼びに行く時間がないしエリス叔母さまを探すために後、半分くらいしかない魔力を失う訳にはいかない。黒幕が誰か分からない以上、他にどんな奴が潜んでいるか分からないんだ。

「新しいプランを考えるよ」

俺はもう一度、思考の海に

『待つてくださいます。ますたーが考えた前二つの意見にはエレンも賛成です』

「え？ でも、さつきは」

『確かにエレンは縄で縛られているアーシアさまを傷つけずに助けられませんし、転移魔法も理論上は連続では行えないですう。でも、二つを合わせれば可能です』

「転移が連続で使えないって初めて知ったよ。でも、無理だろ？ エレンが言っているのは母上のところまで転移して、そして母上を守りながら脱出だろ？ 俺も考えたけど俺はラインクラス。トライアングルメイジたちの魔法を受けながら、なおかつ入口と奥からの挟み撃ちされている状態じゃ……」

俺もエレンが行ったプランを考えなかった訳ではない。

だけど……母上の安全を考えたら……

『ますたーたちの遊びであるチェスで言う所のますたーは実はプロモーションが使えますです』

「え？」

プロモーション？

『はいです。これは『はじまりの書』とは別でエレンの固有技能です。ますたーと融合することでますたーの潜在能力を引き出すです。その上、エレンが持っている高純度の魔力で肉体を強化できますです。』

「融合？ いや、さすがに意味が分からないんだけど」

融合って……いくらファンタジーの世界だからって……何でも許されるはずが……

『時間がないので簡潔に説明するです。エレンたち上級精霊は、それぞれ特殊な力を持っているです。エレンの能力は人間と融合することで、人間の心を振動させるのです』

「振動ってことは……つまり……」

確か、原作でガンダールヴも感情で戦っていた……つまりは、感情を高めるといふことか？

『その認識で間違っではないです。人間が怒りや憎しみなどの感情でメイジとしての器を大きくすると同じです。エレンは擬似的にその進化する時の状態を発生、維持するです。ただし一種の錯乱状態でもありますので複雑な行程を必要とする魔法は使えません、二重人格のようにマスターの人格とは別にもう一つのマスターの人格を発生させてしまうです。用は力技が得意な状態になるです』

しまった。エレンとは一部、意識を共有するんだった。

『大丈夫です。何となくしか分からないので正確な思考内容は分

からないです。いくらますたーが、こんな有事の際にでも え、えつちなことを考えていてもエレンには細かい描写は分からないですよっ」

「ちよつと待て、エレンその言い方だと俺がこんな時でもエツチなことを考えている、と思われるだろ！」

「さつき、考えてたですう」

……確かにSMのことを考えていました……ごめんなさい。

『これでアーシアさまを守りながら脱出することができるです』

「分かった。それで行こう。作戦は転移で母上の元に行って、そこでエレンと融合。母上を守りながら脱出」

「完璧ですう」

二重人格とか……俺が俺でなくなるみたいで実は怖いけど……頑張ろう、母上を助けるためだ。

『大丈夫ですう、二重人格が発生するのはエレンと融合している間だけです』

……へたれ根性もエレンには筒抜けだったみたいだ……へたれ根性を小さな妖精に指摘されるとか恥ずかしすぎるよ！ そういうこととは思っただけでも口に出すな！

「了解であります！」

ビシッ！ と敬礼するエレン。

さつさと母上、助けて帰る……俺のヒットポイントの残りが少なすぎる……主に精神的な部分の……

『それじゃあ、作戦開始ですう』

エレンの声と共に俺は転移魔法『メタスタスイス』を発動させる。使用者の思い描いた場所か、他人の魔力波長を便りにして、その人の所まで転移する魔法。欠点は複雑な術式が必要な上、思い描くのが場所だった場合、かなり鮮明に頭の中に風景を想像できないといけない。人の魔力を便りにするにも余程、常に近くにいる人間くらいにしか使えないらしい。

さつき『はじまりの書』を読んで覚えてんだけど。ちなみに『はじまりの書』にのっているのは、あくまで『魔道』であって『魔導』ではない。詳しい使い方は載っていない。道はあるけど、導いてくれないんだ。俺の場合はエレンに教わっているけど。

エレンは魔法をいくつか使えないけれど、魔法の知識はかなりあるらしい。自称だから、どこまで本当か分からないけど。

『成功なのですう』

エレンの言葉と共に俺のしている風景がガラッと変わる。先ほど

までは森の緑が一瞬で洞窟の茶に。

「な、なんだ!?!」

前世で体験した船酔いのような感覚に見舞われつつも、なんとか状況を把握する。

俺の目の前には椅子に縛られ目隠しされた母上が。そして、母上から少し離れたところに盗賊の格好をした男たちがいる。

「エレン!」

『はいですう』

エレンの返事と共に俺の体は緑色の光に包まれる。

『チューニング・オブ・ソウル
魂の調律』

俺の中に何かが走り抜ける。

何なんだ!?! 分からない。今まで感じたことのない感覚だ。でも、『メタスタシス』とは違いの船酔いのような感覚ではなく、どこか気持ち良い。せ、性的にじゃないぞ! まるで母親の温もりを得ているかのようだ……でも、似ているだけかもしれない。転生者だから赤ん坊の時にも意識があつた俺だから分かるはずなのに……断言できない。

『大丈夫ですう。エレンに身を委ねてくださいです』

くらっ

確かにそうだった。頭が一瞬。体から心が離れたみたい感覚だ。

これは俺の死んだ時の感覚と似すぎている　でも、あの時は体から心が離れる感覚だったけど今回は違う心が体から離れたのに未だに心が体の中にある。

『仕上げですう』

まだ、何かあるのかよ!?

『目覚めるは魔道の王（キング・オブ・アウェイク・ディアボリズム）』

中二病きたあああああああ!

ドクンッ

『成功ですう』

俺の中で何かが生まれる。そして、そいつは俺の喉を使って勝手に喋り始めた。

「さあ、始めるとしようか、わたしの子猫ちゃんの救済を」

……

「賊よ、私の疼く左目をおまえ等程度に止められると思うなよ?」

……

「わたしの子猫ちゃんを傷つけた罪、償ってもらおうぞ。我が伝説の剣で」

…………… テメエは俺の口で何を言っただらんだ！ これは何だ！ 何なんだ！ 確かに、この状態が凄いのには分かるよ！ 一つの間にか母上のところまで行ってるもん！ 俺の『メタスタスイス』は未熟だから4メートル程の誤差が出たよ。その誤差の距離を一瞬で移動して母上のところまで行ったもん！ 俺の体は今、高純度の魔力を纏っているから肉体強化されているのは分かるよ！ でもな！ でもな！

「お待たせしました。わたしの子猫ちゃん」

自分の母親のことを『わたしの子猫ちゃん』と言いながら目隠しをとってあげて杖の周りに水を纏わせて剣を作りだして母上を縛っていた縄を解くつて。どんな周知プレイだよ……

「サイカちゃんなの？」

「ええ。助けに参りました。わたしの可愛い子猫ちゃん」

俺の顔でウインクするなあああああああ！ 四歳児でウインクとか異常にキモイんだよ！

何なんだよ、何なんだよ、何なんだよお！ 俺っちは泣いちゃうぞ！

母上も若干頬を赤らめて困っているじゃねか！

つつか、『我がの疼く左目』『我が伝説の剣』だと！ 良くも、そんなことが言えるな完全に中二病じゃねえか！

『…………… 成功です…………… ですう』

ふと俺の中から声が聞こえる。

エレンか！

エレン、これはどういうことだ！

『ますたー……あの、その、えっと……』

エレンがオロオロしている間にも俺？ の悪行は続く。

「子猫ちゃん、あの外道たちは、わたしの左目の力を使い殲滅します。子猫ちゃんをわたしの（左目の）暴走に巻き込ませる訳にはいきません。わたしに、しばし猶予を」

そう言うってから母上の手をとり、手の甲にキスをする。さながら物語の勇者だ……キモイよおお。俺、マジで泣くよ……

ポツ　と顔を真っ赤にする母上。

え！？ 何、この展開！？ それよりも、これは重要なんだけど俺の左目は普通だからね！ 何の特殊能力もないからね！

「さあ、やろうか。わたしの力の前に跪くが良い」

まさか、4歳児のボディで、こんなことを言い出すとは盗賊？

たちも思っていなかったのだろう、啞然としている。

『あ、あのですね……ますたー』

何だエレン、この状態を止めてくれるのか！？

『融合で生まれる二重人格の主は……大変、言わずらいのですがま

すたーが普段、理性と言う名の檻に縛り付けている本来、こうありたいと思っっている自分です……』

な、何だと！？ こんな中二病に俺が憧れているだと！？ 神さまに俺は中二病卒業しましたって俺は言っただぞ！

『でも、卒業できてなかったんじゃないですか？』

そ、そんな……

『それもさらに悪いお知らせですう』

これ以上、悪い知らせなんてないだろ？

『今のますたーの体から雌を虜にするフェロモンが出ています………です』

はあああああ！？

『今の状態のますたーに攻め寄られれば鉄の意思を持っていない人間なら大抵、落とせますです』

そ、そうか……だから母上も……

『たぶん、ますたーの言う中二病の人は女の子にモテたんじゃないですか？』

………確かに（アニメの世界では）モテていた。

『それが原因ですう。ますたーの願望が強すぎて本来なら全て肉体

強化に使われるべき高純度の魔力がフェロモンのな役割を担ってしまっているです……普通は100パーセント体の強化に使われるんですが肉体に強化に使われている魔力は60パーセント程で後の40パーセント程を無駄に使っている………です』

俺のヒットポイントは……0です。お家に帰らせてください。

俺、屋敷に帰ったらアリシアとお昼寝するんだ………

「ば、化け物だ………どうやって現れたんだ、こいつ………」

盗賊？ の一人がおずおずと口をやつと開いた。

………この中二病の男のどこが化け物なんだ？ ただの馬鹿だろ……俺だけ。

普段、エレンが俺のことを馬鹿にしている気持ちがちよつと分かる。……

現代の諺ことわざにあつたよな？ 人の振り見て我が振り直せって。俺、これから普通の人間になれるかも。

平民ハーレムマスターを目指すのはやめないけど。

「ふつ、わたしの左目の力だよ。空間を押し潰して、わたしがそこに割り込んだのだ」

『ひいいいいいい』

違うよ、『メタスタスイス』という転移魔法だからね。左目の力とかじゃないからね。

「おお、右手も疼くか？ そうか、賊の血肉を欲するか？ 誰から我が右手の餌になりたいのだ？」

ガクガクガク おい、震えるなよ……俺の右手はどっかのフラ

「グメーカーと違って魔術は消せないぜ……あれ？ 左手だったけ？
（俺の中では）主人公の俺がこう言うのもなんだけど。もう、ど
うでもいいや。疲れた……よ、アリシア。」

「さあ、一番最初にわたしの左手の供物になりたいのは誰だ？」
「た、助けてくれ」

剣を腰にさしていた男が一人逃げ出した。おそらく平民だろう。
というより、さっき右手って言ってたよな、おまえ、いつ右手にな
ったんだ？

それを引き金にどどん、我先にと逃げだして行く盗賊？ たち。
……あんたら勘違いも良いところだよ。

「に、逃げるな、おまえたちっ！」

必死に頭領らしき男が叫ぶも……誰も見向きもしない。トライア
ングルメイジも半分ほど逃げ出した。

「さて、おまえたちはわたしの右腕の供物になりたいんだな？」

初めて知ったけど、にこにこ顔が不気味だぜ、俺。

「だ、だめです、俺は『あれほどの大金』を出されても化け物と戦
う何て、ごめんだ！」

またトライアングルメイジが逃げ出した。

残ったのは、たった二人だ。

「こんなガキにビビりやがって情けない奴らだ」

頭領さん？ あんたも足、震えているよ。

ああ、アリシア、帰ったらお庭でお花を摘もう。きっと、アリシアには良く似合うよ。

「では、始めるとしよう」

トンッ

と地面を蹴る俺。

たったそれだけの動作だというのに、一気に頭領との距離を縮める。

そして、再び、エリス叔母さま直伝のアクアソードを作りだす。

これは杖の周りに大気中の水を纏わせて剣を作りだすんだ。圧縮して、なおかつ細くしているから、そのあたりの刀よりも数倍切れるぜ。

普段でも、それくらい斬れるんだ、今の中二病的な俺は魔力だけは溢れているから名のある刀だって斬れるかもだぜ。

「くっ、エアハンマー！」

それ、失敗だぜ。高純度の魔力で肉体強化している俺なら、見えるんだ精霊が。精霊たちが見ている方向からエアハンマーであんたが狙っている場所も分かる。

だから。

「アイスオール」

母上の周りに水の壁を作りだす。

「無駄だ。おまえたちの攻撃はわたしの左目が全てとらえる」

いえ、両眼で見えていますよ。

「こ、こいつ、本当に化け物なのか!？」

「不味いっすよ、俺ら殺されますよ」

良く見ると、こいつ見張りをしていたラインメイジだ。頭領らしき男の子ぶんだったのか。

「に、逃げるぞ!」

「分かったす!」

そう言っつて、盗賊? たちは逃げて行った。

……………後に『ハイパー中二病モード』と名づけられることになる俺の最強に『痛い』力での戦闘は、ほとんどはったりで終わりを告げるのだった。

「さて、わたしの子猫ちゃんはどこかな?」

エレン、お願いします。融合解除してください。そうじゃないと俺、転生者で初めて自分から生きることやめる転生者になるかもです…………俺の『幸運』よ。おまえはどこに行った?

H a r e m o 6 俺の中二病（後書き）

ハイパー中二病モード……自分で書いてて痛い。

でも、この主人公が真面目に戦術立案して内政とかをやるのは……何か違和感がありますので、力も馬鹿っぽいものを考えました。

もし、知っている方がいらっしやいましたら教えていただきたいのですが。ゼロ魔の世界のトイレというのは、どのようなものなのでしょう？ 原作を読み返そうにも、どこかにトイレの描写あつたかすら、作者の馬鹿な頭では思い出せない始末……全て読み返していると執筆の時間が……

昔のヨーロッパと同じなのでしょう？

Harem07 俺の失恋

ぐすんっ

前回、意味分らない程、中二病だったサイカ・アーシユド・リラ・フォーエン・ジ・ハイムです……

あれから、特に黒幕が登場して、中二病VS悪の親玉みたいにはならず、普通に母上を家に連れ帰ることができました。結果オーライです。

しかし……

「サイカさま、だいじょうぶ？」

頭がおかしくなる程の精神的なダメージを受けてしまったため自室のベッドで布団にくるまっています。あんなことを平然と口走るなんて……黒歴史だ……黒歴史以外の何でもない。

ベッドの横で心配してくれているアリシアにも顔を向けられないくらいのダメージだ。だって、『あの』エリス伯母さまが『……大丈夫ですか？ 今日修行はなしにしましょう』と言ってくれるレベルだもん。

「無理だ……アリシア、ここは一人にしておいてくれ……」

そういえばエレンは久しぶりの融合で疲れたらしくて、書庫にある『はじまりの書』の中に戻ってしまったっている。

「いやです！ アリシア、サイカさまのそばにいるもん！」

「……………」

返事がない。ただの屍になりたい。

「サイカさまはアリシアの『ごしゅじんさま』だもん」

……

「それに、サイカさま、アリシアにやさしいもん！」

……

「サイカさま、いつつもアリシアと、いろんなところでおもちやであそんでくれるもん！」

……

「サイカさまといっちょにおねむすると、きもちよくなれるもん！」

っ！？ 最後の一言、メツチャ、誤解生むからね。

ばっ

と布団から飛び出てアリシアの肩を掴む。

「ア、アリシア。俺とおねむしたら、気持ち良くなれる。とか誰か他の人に言ったことある！？」

「な、ないお」

「よ、良かった」

それに聞く人が聞けば、俺がアリシアに性的な悪戯をしているみ

たいに聞こえるからな。他の三つも間違いないように訂正しておくけど。

サイカさまはアリシアの『ごしゅじんさま』だもん　俺の専属メイドなので当たり前です。そういうプレイではありません！いや、メイド属性は好きだけど！

それに、サイカさま、アリシアにやさしいもん！　行為中の時のことではありません！　妹のように可愛がっています！　将来的にはどうなるか分からないけど！

サイカさま、いつつもアリシアと、いろんなところでおもちゃであそんでくれるもん！　アリシアが、おままごとしたい！　とか、花を詰みに行くだけだからね！　決して大人の玩具で遊んでいる訳じゃないからな！

「えへへ、よかったサイカさま、げんきになった」

……アリシア

「ごめん、アリシア、俺が悪かったよ。俺はまた自分の目標に向かって毎日、元気一杯で頑張るよ！」

「うん、アリシア、サイカさまのもくひょう？　おうえんするね！　がんばれ、がんばれ、サイカさま」

「あ、ありがとう。アリシア」

もちろん、アリシアは俺の目標が『俺に優しい平民ハーレム』を作ることだなんて知らないからな。俺の夢を知っているのは、この世界では俺だけだ。

それから、俺とアリシアは二人で、こっそり楽しい時間を過ごすのだった。

も、もちろん！　性的な事じゃないよ！　ただのお医者さんごっこだからね！

「それにしても、本当にサイカちゃんが、良くなってよかったわ」

今、母上はベッドの横にテーブルとイスに座っている。俺が鬱状態から解放されたこと俺の様子を見に来たメイドさんに聞いた母上が一番早く、ここにやって来たのだ。

ちなみに、今、アリシアはこの場にいない。俺と母上とアリシアが飲む紅茶を持って来てもらっている。皆、忘れているかもしれないけどアリシア（4歳）は俺の専属のメイドさんだよ。一日、一つくらい仕事させないとアリシアが怒るからね。普通、逆のような気も………仕事させすぎて、怒るんじゃないの？ と思うかもしれないが、そこはアリシア・クロリティ！

「サイカちゃん、わたしサイカちゃんが、わたしを助けに来てくれた時、とっても嬉しかったの。本当に涙が出そうな程」

頬を赤くして、そう俺に言ってくれる母上。それはまさしく恋する乙女のそれだった。

うっ！？

母上のこんな顔を見ただけで俺は黒歴史スミナリを生み出しつつも母上を助けたかいたがあったというものですよ！

「俺も母上が無事で嬉しいです」

「ありがとう。でもね、もう、こんなことはしないでね」

「え？」

「私は、生まれた時から、そこまで体が丈夫じゃないの。たぶん、

他の人の寿命よりも遙かに早く死ぬと思うわ。でもサイカちゃんは違う。わたし『たち』と違って『五体満足』に生まれて来てくれた。そのおかげでサイカちゃんは今から色々なモノを見たり、色々な人の役にたてるわ。未来があるの。だから、私のために無茶するのは今回だけにしてね」

俺には母上の言っていることが分からなかった。いや、分かりつつも理解しなくなかった。違う、頭では理解しても心が理解しなかった。

だって、母上はこんなに優しくて、お淑やかで、皆に優しくて、皆が大好きで、そんな母上だから周りの皆も大好きな母上なのに……

「母上」

俺は今の母上が儂く散る花のように見えた。綺麗だ。今まで見た、どんな花よりも、どんな宝石よりも綺麗だ。

だけど、そんな儂い美しさはいらない。俺は母上に生きて欲しい。

「なに？」

パチンッ

乾いた音が、部屋の中に響く。

『俺』が『母上の頬』を叩いたのからだ。

「え？」

母上は、驚いた顔をしている。

それもそうだろう、俺が母上に手をあげたことなど今まで一度も

なかったから。赤ん坊の時から、ずっと。乳上に対しては足で蹴ったり色々してきたけど。

「次にそんなことを言ったら、もう一回ビンタしますよ。母上は俺にとつて大切な人です。絶対に見殺しにはしません。だから、また今回みたいなきっかけでも助けに行きます」

ちゅ、中二病みたいだから、本当はこんなこと言いたくないけど。言わないと絶対に後悔する。

「そ、それでも、私のためにサイカちゃんが死んでしまいますのは……」
「死にません、そして、母上の病弱な体は必ず俺が治します。だから、二度とそんなこと言わないでください」

究極の死亡フラグだな。でも、俺には『幸運』もあるし、死亡フラグ回避くらい、どうにかなるだろう。やばい、黒歴史を思い出してきた……また布団にダイブしたくなって来た。

「……………」

俺の言葉を聞いた母上は無言で涙を流した。その姿に俺は不覚にも見とれてしまった。先ほどの儂さにはない。まるで、必死に生きるために運命に抗う女神のような美しさがそこにあったから。

俺は実の母だというのに……………母上のことを……………。

色々、馬鹿なことを言ったり、SMなど騒いだり、中二病モードの時に本気で口説くようなことをしているけど……………たぶん、転生してから初めて俺が恋したのは間違いなく、アーシア・アーシュド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムだ。

分かっているさ。俺らしくない。俺はもっと馬鹿みたいに美少女

追いかけている方が似合っている（ただの馬鹿）。

だけど、さ。初恋が実らないって分かった瞬間くらいは真面目でいさせてくれよ。

母上のこの姿を見て分かる。この人はどこまで行っても『俺の母』であり『俺の父の最愛の人』だ。俺のことは『自分の子供』として愛してくれている。

俺の恋は一生実ることはない。

フェロモンとか色々使えば確かに籠絡できることはできるかもしれない。でも、それは、いつか母上を傷つけることになる。

だから、俺の初恋は本当にここで終わり。

母上は好きなままだけど、それは『女』としての愛ではなく『家族』への愛へと変える。

ああ、父上、久方ぶりに、あなたを殺してしまいたいと思いました。

父上が母上を生涯一人の妻として選んだように、俺はたくさんの人を愛するハーレムを作ることをここに誓います。

え？

最後は締まらない？ まあ、俺は馬鹿だから。

「サイカさま、入ります」

ノックはなく、いきなり扉を開けるアリシア。

そこに広がっているのは頬を赤くして涙を流している母上と、どこかバツの悪そうな俺。

もちろん、優しいアリシアは

「あ~~~~、サイカさまがアーシアさまをなかしてる、メだよ、サイカさま!」

可愛らしく、そう言ってくれる。助かった、これ以上、この場にいたら。失恋の痛みで泣きだしちまうところだったんだ。アリシアと一緒にどこかに行こう。

そう思っただけはアリシアの方を　　見てかたまってしまっ

……………アリシアに怒られるのは、まあいいんだよ。だってアリシアの可愛いのは正義だから。

だけど、何でアリシアの後ろに『乳上』と『常識を超越するシスコン』がいるんだよ。

「サイカ! 貴様! 自分の実の母親になんてことを!」
「自分の母親を泣かすとは……………これは折檻をした後に、いつも三倍のイジメ……………ではなく、修行をつけてあげないといけませんね」

はい、俺の死亡フラグです。ああ、誰か、この『乳上』と『常識を超越するシスコン』をなんとかしてください。

あの転生させてくれた神様にでも頼めばいいのかな? その前に俺の命残るかな? この頃、幸運が役立たずの能力に思えて来たよ。失恋の心を癒す時間くらいくれよ。

あの失恋から、数日経った。

俺はあれ以前と変わりなく同じようにエリス伯母さまに修行をつけてもらっている。別に好き好んでじゃない。しないと虐めの量が倍になるから嫌々ながら頑張っているだけ。まあ、一人で母上を助けに言ったことについての折檻は母上を泣かせた？ と勘違いした折檻を当てたということでした承してもらった。

ただ、それだけ別に変ったことはない。母上のことは『家族』として今も大好きだし、母上も完全に俺から受けたフェロモンの効果が消えたのか俺のことを恋する乙女のような瞳で見ることはない。エレン曰く、あのフェロモンは高純度の魔力を受けたことによる船酔いのような状態なのだとか、だから時間が経てば、元に戻るらしい。

そして、今日なんやかんやで、保留になっていたエリス伯母さまとの模擬戦が行われている。

「サイカ、相手の一点を見るのではなく、相手の全体を見るのです！」
「はい！」

ちなみに、あの時の盗賊？ 戦をエリス叔母さまが高評価してくれたらしくて（母上が伝えた）修行が三倍になりましたので……おそらく、今ならトライアングルクラスのメイジなら楽勝になってい

ると思うぞ。もちろん、あの時の状態がどういう状態だったのか『フェロモン』以外の部分は説明したんだけど。それでも、三倍最悪だよ……

俺としては失恋を癒すためにアリシアや他の平民さんたちとイチヤイチヤライフを送りたいのに！

「水のメイジの真髄は相手の体の水を読みとって相手がどんな動きをするかを予測することなのです！」

そう言つてエリス叔母様が『水爆』アクア・エクスプロージョンを放つてくる。

ちなみに『水爆』アクア・エクスプロージョンというのは大量の水（俺の家の庭にある湖の水全部）を拳ほどの水の塊に圧縮して相手に近づいた時にその水の塊の圧縮を解くというもの……すると、あら不思議………広範困穢滅魔法になります。

大量の水がいきなり押し寄せてくる訳ですから………まともに受ければダメージは相当なものです。

その上、その水には、エリス叔母様の魔力が込められている。その能力とは 魔力を練りにくくする作用があるんだ。

この叔母様を相手にして魔力が使えなくなるのは………ただの自殺死亡者になるだけだ。

ちなみに、この『水爆』アクア・エクスプロージョンエリス叔母様曰く、大気中の水でも使用可能とのこと………

ヤバイって！

マジで！

「いやああああああああああああああああああ！」

俺は対面も気にせず悲鳴を上げながら、その水の奔流から逃げ

る俺。

これって、相手の体に流れる水を読みとっても無駄じゃない？と、今更ながらツツコム余裕はない！

良く見ると……………落ちてくる水に少しだけズレがある。……………その微妙な違いを読み取りながら避けて行く。人間必死にやれば、色々できるもんだな。

俺が瞳に涙をためているのは何かの間違いだ、うん、きっと間違いだ。

あの死ぬ前になつたら全てがスローモーションに見えるというあれじゃない。きっとそうだ。俺はやつとの思いで水爆から逃げ切る。その先に立っていたのは満面の笑みを浮かべたエリス伯母さまでした。

「では、次です」

俺が必死に避けている間にエリス伯母さまが第二派の準備をしていたみたいです。

……………無理です。

エリス伯母さまの命令で『はじまりの書』の魔法は一切、使わせてもらえていない状態で……………。絶対避けきれません。それにエレン曰く、あの忌まわしき黒歴史の力を使ったとしてもエリス伯母さまに勝っているとは限らないらしい。

その後は案の定、俺はエリス伯母さまが作った水の奔流に巻き込まれてしまった。

ああ、本当にこの頃、俺って良いことないな。失恋はするし、平民ハーレムは影も形もないし……………内政チートものに路線変更しようかな？

はあ、おんにゃのことイチャイチャして……………そう思う、今日、

この頃でした。

ただ、エリス伯母さまの修行が三倍になってくれた、おかげで母上の失恋を思い出す回数が減りました。

正確にはそれを考える余裕がないだけだけど。

H a r e m o 8 俺のハルゲギニア魔法事情（前書き）

今回、この二次作内限定のハルゲギニアの精霊魔法と四系統魔法の作者の独自解釈が入ります。

今までであった二次作の解釈が気にいっている方、原作の魔法事情が気にいっていて原作以外は受け入れられない方、独自解釈が苦手な方は読まない方がいいかもです。

しは外で遊んだらどうですか？」

あの俺に四歳児にさせるとは思えない異常な折檻………も
とい、修行をさせているエリス伯母さまが言うことか？

あまりの驚きで変な顔をしてしまっていると思う。

「なんて顔をするのですか！」

エリス伯母さまに水の鞭ではたかれました。

痛いです……

「だって、エリス伯母さま！ わたしに普段は厳しいことしか言わ
ないのに急に変なことを言いだすから！」

「サイカは私をどんな人間だと思っているのですか!？」

「……子供を虐めるのが好きな」

「死にたいですか？」

「すいませんでした」

俺は即効で土下座しました。人間、謝る時は迅速に行動しないと
ね。ハルゲニアでは土下座の文化があるのかないのか知らないけど。

「分かればよろしいのです………それに私も好きであなたに厳
しくしている訳ではありません」

……………エリス……………

伯母さまは、今何て言った？

「その顔は、もういいです！」

再び変な顔をした俺をばっさり切り捨てるエリス伯母さま。

「……………さいですか」

「もう、もう少ししたら家を出るのですから少しは……………」

「え？」

「いえ、なんでもありません。忘れなさい」

変なエリス叔母様。

「では、私は行きます。明日の朝の訓練には遅れないようにしなさい」

それだけ言い残して、エリス伯母さまはどこかへ去って行った。

本当に何をしに来たんだろう？

それから、俺は読みかけの本に目を落とす。

『ますたーでは、続きですう』

「うん、お願い」

現在、昔、読んでいた『治療系魔法全集』を読んでいる。そもそも、今まで読めても魔法が使えなかったんだよ。魔力不足で。でも、エレンが教えてくれたんだけど、俺ってそれなりに魔力量の持っているんだ。今まで使い方が分からなかっただけで、この間の黒歴史トラウマのおかげで少しだけ、自分の魔力を自分で認識できたことと修行が三倍になったことで俺は、昨日、実力的にはトライアングルに昇格できた。

これって異例の早さなんだよ。数ある二自作なんかでも四歳のトライアングルはいないはず。

まあ、俺自身の魔力は未だにラインだから精霊魔法を使用している場合に限るけど。

エレンに聞いた所、俺に治療系魔法の知識をもっとつけた状態で、

エレンの力を借りれば母上の体を治してあげることができる状態にやっときたらしい。

そこで、エレンに治療系魔法の基本とかを教えてもらっている。さすがに治療系は色々覚えることがあつて難しい。

そもそも、四系統の水魔法の場合、自分で作った行程を精霊に使わせるだけだから複雑な魔力を練る必要はない。

だけど、精霊魔法になると全然違う。自分ではなく他人に魔法を作ってもらふんだから、複雑なことも全て精霊に伝えなくてはいけない。

どういうことかと言うと、確か誰かが『四系統の魔法は命令』、『精霊魔法はお願い』と言っていたような気がする。それは間違っていないけれど合つてもいない。

精霊よりも上位の存在であるエレンが言うには『四系統の魔法は精霊に自分で構築した魔法を使ってもらふ』、『精霊魔法は精霊に魔法を構築してもらい、使用する』らしい。精霊が全行程を行うことによつて精霊に与えた魔力を全て魔法に変換してくれているから、精霊魔法の方が四系統よりも強いらしい。逆に言えば自分で作った工程を精霊に押し付けているから精霊に与えた魔力が全部魔法に反映されないため四系統魔法は精霊魔法に勝てないんだ。

ちなみに虚無については、また違う考えが存在するらしい。

まあ、精霊によつて魔法が生み出されている、という根本的な部分は同じなので時々、エリス伯母さまのように無意識のうちに精霊に魔法を構築してもらっている人間もいるらしい。

だから、実はこの世界でチートな人間たちは大抵は無意識に精霊魔法を使っているらしい。

どうりで、『烈風』とか『殲滅』と言つた奴らは異常な力を使え

る訳だ。精霊魔法を使っていたらエルフと同等かそれ以上でも納得できる。

まあ、精霊魔法は精霊が見えないといけならしい、とか、精霊の存在を認識できないといけない、という勘違いがエルフの間でさえもあるらしいから、皆、気づかなくて当然だ。

この頃、人間とエルフは魔法について議論していないので気づくことは当分ないだろう。生まれた時から、人間は自分で構築した魔法を使ってもらうのが当たり前で、エルフは精霊に魔法を構築してもらうのが当たり前なのだから。

ちなみに、この『精霊に魔法を構築してもらおう』というのは滅茶苦茶、難しい。簡単に言えば、子供に勉強を教えるようなものだ。完全に自分が理解していないと、きちんと相手に教えられない。だから、もし、理解していない状態で無理矢理使うと前回の転移魔法のように誤差や効力の変異が起こる可能性がある。

……エレンにその話を聞いてエルフは賢いんだな　と思った俺は間違っていないはずだ。

『ますたー、これにて講義は全て終了ですう。理解できましたかあ？』

「あ、うん」

やばっ、聞いてなかった。

『本当ですか？』

「嘘です。ごめんなさい。もう一度、お願いします」

『よろしいですう。これからは、もっと素直に言うてくださいです』
「はい」

それから、俺はエレンに再び、講義してもらおう。

なかなか……難しいな……

『これにて、本当に講義終了ですう』

「エレン、ありがとう」

『どういたしましてですう。アーシアさまに魔法を使う前に森の動物たちで試してみるです』

……動物愛護協会が聞いたら、激怒するようなことを今、エレンが言わなかった？

『ほら、ますたー、早くするです！』

……エレンがやけに張り切っている。……仕方ない。

「アリシア。俺は少し出かけて来るから母上のお世話をしててね」

横で寝ているアリシアにそう伝える。なんかムニヤムニヤ言っているよ。メツチャ可愛ええ。もちろん、毛布はきちんとかけてあげているよ！

「……………ん、ほえ？ さいかしゃま？」

ああ、寝ぼけたアリシアも可愛いな。でも、エレンが『早く、早く』と言って俺を急かしてくるので仕方なく俺は急ぐ。

「母上のお世話、お願いできる？」

「じゃー…」

もちろん、これは方便で母上の面倒をアリシアがみるのではなく、アリシアの面倒を母上に見てもらっただけなんだけど。

さて、俺は山に行くとするか。ちなみに屋敷から約3キロ位の所に山がある。時間がもったいないので、俺は肉体を魔法で強化した状態で走る。これなら、十分程度でつけるだろう。

「ちなみに、聞きたいんだけど、エレン！」

『何ですか？』

「俺が母上の体を治すための魔法を使ったら成功率は？」

『今のますたーとエレンなら100パーセントです』

「えっ？」

『ますたー、そんなことより、森に行くです。森はいいです。早く、森に行きましょう。森に行けば動物さんたちの治療ができるですよ』

……………もしかして、エレンが森に行きたいから、そそのかされた？

それから俺は森で、動物達を治療しまくったのではなく……………

……………エレンと森で遊び回った。

……………なぜ？

そして、もうひとつ、気がついた……………屋敷を出たのは朝であり……………今、あたりは真っ暗……………そもそも、エレンが必死に色々なところを連れ回すんだ……………森って木の根とかで道が道路なんかと違うから、歩きまわるのに体力をかなり使うんだよ。エレンは飛んでるから問題ないけど。体力を使うという事は……………つまり

腹減った。

俺は最後の力を使い転移魔法で、いつきに屋敷まで移動する。
腹減った……………

「あら、サイカちゃん、どうしたの？」

転移した場所にはちょうど、母上とアリシアと数人のメイドさんがいた。おお、幸運の能力、ありがとう。

「腹減った……………」

そう言っただけは倒れた。

『きゃあああああああああ！』

その日、母上&メイドさんの悲鳴が屋敷に響き渡った。

後で、どこで何をやってたか、エリス伯母さまに問い詰められたのは言うまでもない。

「……………申し訳ありませんでした」

俺は頭が地面に埋まりそうな程、頭を下げていた。

なぜなら、エリス伯母さまに昨日、きちんと朝の修行を受けるように言われていたのに……………昨日、森に行って疲れていたため寝過ぎてしまいました……………。

後は……………言うまでもないですね。

俺の寝室に常識を超越する伯母さま降臨。

俺に向かって水爆を発動。

寝ていた俺は若干おぼれながら中庭にでる。
もちろん杖など持っていない。

……エリス叔母様の鞭が無情にも俺の体に直撃する。もちろん、精霊魔法で避けたら、エリス伯母さまの機嫌がさらに悪くなることなんて分かりきっている。

だから、逃げる俺。

俺に未だに殺気の籠った鞭を振るうエリス叔母様……
それが二時間程、続いた後、やっと俺に弁解のチャンスが巡って来た。

「そうですか……昨日、森で遊んだのがそれほど、楽しかったのですか」

「いえ……何も言っていないんですが」
「そうですか」

やばい、俺はまったく許してもらえない気がする……

「はあ、仕方ありませんね」

おお、許してくれるみたいです。
なんとという幸運！

「では」

「ありがとうございます！」

「うふふふふ　　水流激爆包囲陣（アクア・カレント・インサ
ークルメント・フォーメーション）！」

俺の立っている場所の地面が割れて……え？
割れて？

「いやあああああああああああああああああ!？」

俺の立っている場所の下から大量の水が吹き出して来た。

もちろん、その水に吞まれて天高く吹っ飛びました。

……………落下した時、受け身を失敗して腕を一本折るだけではなく、さらに全身打撲の重傷でした。

水流激爆包囲陣（アクア・カレント・インサークルメント・フォーメイション）。確か、エリス伯母さまを『殲滅』と呼ばせている理由の一つだったと思う。地下の水脈を刺激して大地に噴出させるチート魔法。俺は今回、手加減してもらったみたいだけど、本来の威力なら水流に吞まれた瞬間に全身の骨が砕けるらしい。地下に水脈がなければ使えない、という欠点を有するが、逆を返せば、水脈がある範囲全部を攻撃できるという魔法。

……………こんな形で見たくなかったです。はい。後、エレンから伯母さまが精霊魔法を使っている、と聞いてなかったら絶対に、この魔法の威力は納得しなかったと思います。

H a r e m 0 8 俺のハルゲギニア魔法事情（後書き）

前回、いただいた感想で思ったのですが、あらすじを読まねずに本編を読んでくださったっている方もいるかもしれませんので2話後より本格的にサイカのハーレム計画がはじまる前に、ここにもあらすじと補足を書かせていただきます。

この物語は

たまたま、抽選に当たって転生する権利を与えられた少年は『幸運』の能力をもらって転生を果たす。彼の思惑通り『幸運』的にゼロの使い魔の世界にこれたまでは良かったが、彼が目指す平民ハーレムまでの道は遠かった。

なぜなら『幸運』的にも彼は妖精、吸血鬼、ドラゴン、エルフ、お姫様、貴族令嬢、と出会ってしまうから。彼は自分に優しい平民ハーレムを作ることができるのか！？ それとも、彼の伯母と『幸運』に負けて異種族ハーレムを作ってしまうのか！？ これはお馬鹿な少年のお馬鹿な戦いの物語である。

よって、タイトルには確かに〜平民ハーレムの作り方〜とありますが平民ハーレムオンリーになるかは現時点では不明です。（5月20日現在では最終話までのプロットは完成しておりません）

というよりサイカが頑張らなかった場合、異種族ハーレムだけになっってしまう可能性もあります（笑

作者の現在の頭の中では平民ハーレムは完成しますが。

彼がどんなハーレムを作って行くのかを、見守っていただければ幸いです。

H a r e m o g 俺の母上

今回、もの凄い偉業をやり遂げたサイカです。

母上の治療をすることが可能になってるのは、前回で皆さん、ご存じだと思いますけど。それをついに実行します。もちろん、エリス伯母さま抜きで！

え？

何でエリス伯母さまがないって？

ふふ、この天才サイカさまは思いついてしまったんですよ。

エリス伯母さまをフォーク領に帰ってもらおう秘策を！

その方法とは変態勇者さん筆跡を魔法でコピーして『エリス、おまえがいなくなっからというもの、エリスと過ごした刺激的な日々のことを思い出さない日はないんだ。こんなダメな夫で、すまない。だけど、会いたいんだ。この気持ちは抑えきれない。サイカの教育が大切なのは分かる……頼む、一週間だけでいいんだ。君の顔をみせておくれ。一生のお願いだ。我が愛しのエリス』と書かれた手紙をエリス伯母さまに渡しておいたんだ。

これを受け取って読んだエリス伯母さまは顔を赤くして『し、仕方ありませんね。サイカ、わたしは一度、フォーク領地に戻ります。わたしがいないからといって鍛錬を怠ってはいけませんよ』と言ってフォーク領に帰って言った。

にやっ

俺に不可能はないぜ。

と、言いたいところだけど、まさか、そんな便利な魔法があったことに俺も驚いたよ。

エリス伯母さまがフォーク領に帰ったことで俺は現在、エレンに教えてもらった治療系魔法の復習をしているところだ。

100パーセント成功する、とエレンに言われているけど、母上のことなんだ絶対に失敗する訳にはいかない。だからエリス伯母さまがいない間の、この時間をフルに使わせてもらっせ。

「サイカさま、また、むつかしいほんよむの？」

「ごめんね、アリシア」

俺が書庫に向かうのを見て肩を落とすアリシア。

落ち込むアリシアを見ていたら罪悪感がふつつと湧いてくる……

「うん、うん、アリシアはだいじょぶだお」

寂しいせいか、アリシアが少し幼く見える。

俺だって魔法の勉強なんてせずに、アリシアと遊んでいいいた方がずっと楽しいんだよ。

だけど、さ。これは母上のためだから……

え？

まだ、自分の母親に未練があるかって？

もしも乳上が、たまたま不運にも寿命よりも早くに亡くなった場合だけは……はっ！？ 俺は何を考えているんだ。もちろん、未練はないさ。みんなも振られた相手にいつまでも付きまわっていたらダメだぜ。世の中は広いんだ。いつか自分のことを分かってくれるおんにゃの子が現れるはずさ。未だに自分に現れていない男が言う言葉じゃないかもしれないけど気にするな。

「じゃあ、行ってくるよ。アリシア」

「はい……」

ちなみに何でアリシアは書庫に文字を勉強しに行かないかというと、アリシアが文字を覚えるという動作に飽きました。そりゃそうだよ。普通の4歳時が、いつまでも同じことを飽きずに行っていたら、そっちの方がおかしいよ。もちろん、俺は例外だぜ。中身は30歳のおっさんだからな。

アリシアの寂しそうな視線を背後に受けつつも書庫に向かう俺。後、もう少しの辛抱だから待っててくれアリシア。これが終わったら時間が許す限り、遊んであげるからね。

早いもので、エリス伯母さまが去った日から、あっと言う間に6日経ちました。

うん、あれだね。楽しい時間はすぐに過ぎてしまうという、あれ。

「エレン、今日、母上の治療をするよ。問題は？」
『ないです。エレンの体調もますたーの魔力もオールグリーンです。』

「OKじゃあ。母上と乳上を中庭に呼びだそう」
『はいです。』

今日で……母上の病弱体質と体の悪いところを全部直す……これは、つまり『母上が俺以外にも子供を産めるようになる』ということだ。俺にとっては苦渋の決断だ。

だって、母上の体が治っても下品な話、母上を抱くのは俺ではなく父上なのだから。

おそらく、母上の体が治った、と聞けば父上は今日の夜にでも母上を抱くだろう……それを俺が耐えられるのか？

耐えてみせるさ。俺は……平民ハーレムを作る男だからな……
けど、父上、ぬころしちゃっても、皆は許してくれるよね

さて、バカなことを考えるのは、ここまです。俺が今から使う魔法『聖杯の器（カリス・ヴェッセル）』は、『はじまりの書』の中でも禁忌中の禁忌の魔法だ。気を抜けば自分が精神が魔法に吞まれて死ぬ可能性もある。

なぜ、『聖杯の器（カリス・ヴェッセル）』が禁忌指定されているかと言うと理由は簡単なんだ。使用者が持っている99パーセントの魔力を消費してしまうから。その人の魔力保有量に関係なく。もちろん、最低でも発動だけに人間で言うところのトライアングルクラスの魔力が必要だ。

言うまでもなく魔力とは精神力だ。

精神力が一気に99パーセントも失われれば待っているのは間違いないくシヨック死。だから禁忌指定。『死』という対価を支払う代わりに、どのような重傷でも、生まれた時からの病気で治してしまおう。

もちろんだけど、俺は死ぬつもりはない。俺はエレンの協力を得ることで、急にはなく、ゆっくりと魔力を放出する。

エレンのおかげで限りなく死の危険が減ったとはいえ、『聖杯の器（カリス・ヴェツセル）』は難易度の高い魔法。気はいっさい抜けない。効力が強いということは失敗した時のリスクも当然高いのだから。

俺は精神統一に入る。

父上と母上への説明については事前に行っている。

「サイカちゃん……」

父上と母上が中庭に来てくれた。

と、いうことは俺を信じてくれたーということだ。

俺が事前に伝えていたのは『俺は母上の病弱を治すための魔法が使えるようになりました。だけど……必ず成功するとは限りません。母上、もし、俺を信頼してくれるなら明日、エレンが呼びに行くのでエレンと父上と一緒に中庭に来てください』。

もし、来てくれなかった場合は、もう一度、一から魔法を勉強し直して母上の信用を勝ち取るつもりだったけど……杞憂だったみたいだ。呼び出す時の言葉が脅迫のようになったみたいだけど……それは許して欲しい。だって先ほども言ったけど、母上の体が治っても、俺ではなく父上が母上を抱くのだから……

「教えて欲しいの……本当にサイカちゃんに危険はないの？」

……おそらく、ここで俺が『はい』と答えれば母上は間違いなくこの話をなかつたことにするだろう。

そうかと言って、母上に対して『いいえ』という嘘をつきたくない。

俺が柄にもなく悩んでいるとー

『そんなの危険がない訳がないじゃないですか！ ですよ！』

エレンが母上に向かって叫んでくれる。

『マスターは、今、とても苦しんでいるんです！ アーシアさまのことが好きだから！ 好きだから治してあげたいけど、体を治してあげてもマスターにとっては何も変わらないです。アーシアさまが好きなマスターが報われることはないです！ それでもアーシアさまを助きたい一心で自分の命の危険をかえりみずに魔法を使おうとしているんです！ これ以上、マスターを侮辱するな——です！』

……エレン。

「そうだ。アーシア。サイカがおまえのことを母親以上に愛していることは、わたしも知っている」

え？ 父上！？

「この子は生まれた時から、ずっと聡い子だった。だから、例えば、アーシアが治っても自分が自分の母親と一緒になれない、それも分かっている。それなのに、アーシアのために命を懸けるんだ。アーシアが、ここでそれを言うのは同じ男として許さない。そんなサイカだから、長年、わたしが死ぬ思いで探し求めた術を見つけ、わたしを越えたのだよ。まあ、もし仮に体が治ったアーシアをサイカが狙っていたとしても、わたしはアーシアを誰にも渡す気はないけどね」

『あの』父上が母上に対して許さない？ 初めて聞いた……でも、知っていたんですね、俺の気持ち。

全て理解した上で身を退いたことも……これだから乳ばかり追いかけているバカな親父は嫌いなんだ。

俺よりも男として……俺のことをきちんと分かってくれている。いつも分かっているフリをしているんだから……俺はあんたを越えてないよ。

最後の言葉……あんたは俺の永遠のライバルだぜ。

たぶん、あんたを越えた時こそ、俺の平民ハーレムが完成する時だ。

「……そうね。わたしが間違っていたわ。お願い、サイカちゃん。

わたしを治して」

「はいっ」

俺は短く、そう呟くと意識を魔法に集中する。

小声でブツブツと呪文を唱え始める。

一言たりとも間違えない。俺は母上を救うんだ。その思いと呪文に集中する。

俺の周りでエレンが俺から放出される魔力を調節してくれている。

呪文で精霊たちに俺のやりたいことを伝え終わる。

精霊たちが俺の魔法を発動させるべく動き回ってくれる。姿が見えなくてもそれくらいなら分かる。

『聖杯の器（カリス・ヴェッセル）』は全ての属性の精霊の力を借りて始めて成功する魔法。

みんな、俺のためにありがとう。

先ほどまでせわしく動いていた精霊たちの動きが

ピタッ

と止まる。

完成したんだ魔法が。

そこから急に俺の体から大量の魔力が抜け出していく。どんどん、どんどん。エレンが俺の魔力の放出量を制御して、少しずつ出してくれているはずなのに……気を何度も失いそうになる……

自分の持つ魔力を99パーセント使う……頭で考えていたよりも遙かにしんどい……

俺の苦しみとは正反対に

「気持ち良い……」

母上が呟く。今、緑色の光が母上を包み込んでいた。

『大丈夫です。安心してくださいです。魔法は順調ですう』

エレンが俺の顔の前までやって来て、そう伝えてくれる

。エレンの顔には疲労の色が見える。やっぱりエレンにも負担が掛かっているんだ。

ありがとう、エレン。

『大丈夫ですう』

「きれい……」

ふと、声のした方を見るとアリシアが中庭の入り口付近で母上を見ている。

たぶん、俺と母上を探していたのだろう。一応、今日は他のメイドさんにアリシアのことを頼んでいたんだけど……

これが終わったらアリシアと、あのメイドさんはお仕置きだな。

それに今日、アリシアは一度、実家に帰る予定なのに……荷造りはできているんだろうか？

『マスター、魔力放出率78パーセントです。後、少しです頑張ってください』

……まだ、78パーセントなのかよ。
遠いな……

ついには、倒れそうになる。

今、立っていられるのが不思議なくらいだ。

『マスター、94——96————97————98』

人間の体って、やっぱり凄いわ。こんなに倒れそうなのに倒れないんだから。

『今です！ マスター！』

「聖杯の器（カリス・ヴェッセル）！」

次の瞬間、母上が翠色の光に包まれて行くのを確認しながら、ゆっくりと意識を手放す、俺だった。

「よく頑張りました」

ベッドの横に本来なら、ここにはいないはずのエリス伯母さまがいて俺を労ってくれる。

この天井は俺の部屋のものだ。エリス伯母さまに拉致された訳じゃなさそうだ。

「何で、ここにいますか？ エリス伯母さま」

「サイカの悪知恵程度でわたしを出し抜こうなど100年早いんですよ。初めから、サイカのイタズラ程度、見破っていました」

嘘だ。

手紙渡した時、素で顔を赤くしていた癖に……

「俺は何日、寝ていましたか？」

「いえ、まだ、半日経っていません。わたしでも驚く回復力ですよ。あのエレンという妖精も数日は起きないだろう、と言っていたのに」「そうですか……」

何でそんなに超回復をみせているか分からないけど……結果的にみれば精神力の回復は早いに越したことはない。

「サイカ、あなたはいつも、いつも、無茶をして……少しは心配する方の身にもなってみなさい」

「……ごめんなさい」

エリス伯母さまが怒るのではなく、諭すように言ってくれるなん

て……

「あなたよりも先にアーシアが目を覚ましました。まだ治療専門のメイジに見てもらっていませんので確かなことは言えませんが、わたしが見た限りではアーシアの体は常人のそれでした……つまり、サイカの魔法は成功です」

やった！ という感覚より先に、良かった！ と思うのはやっぱり、俺がヘタレだからだろうか？ それとも、まだ、精神力が完全に回復していないからだろうか？

「ふふつ、サイカのその安心した顔はライナに似ていますね」

笑顔でそう言うエリス伯母さま。

ライナ……伯父さまのことか。あの人は元気にしているのだろうか？

「それはそうと、サイカ。前々から決まっていたことなのですが予定を早めて今日、経つことにしました」

「え？ 何の話ですか？」

「あなたをフォーク家の行儀見習いとして、フォーク家に招くことです」

「はあっ!？」

さっきまで、抜け殻のようだった気分が一変した。

おい、おい、それは聞いてないぞ！ 第一、この伯母さまの根城になんて行ってみる！ 死んじまうぞ！ いや、確実に死ねるぞ！

「ふふつ、やっと、いつものサイカの顔に戻りましたね。では、経

つことになってしまう」

そう行つて、俺の抱き上げると

「サイカは軽いですね……」

そう言いながら、馬車へと連行するのだった。

……マジ、どうしよう……次回で俺、死んじゃうかも。

そして、エリス伯母さまが連れ出してくれた、おかげで俺は幸運的にも父上と母上が、泣きながら抱き合っているシーンを見ずに済んだ。

エリス伯母さまが俺の思いを知っているから連れ出してくれたのか、それとも単なる自分勝手なのかは分からない。

ただどーっただけ言えるのは悔しいし苦しいけど言つよ、父上。

母上を大切にしないと奪いに行くぞ。

そして、俺は平民ハーレムへの道をまた一步、歩き出すのだった。
エリス伯母さまに連行されながら……締まんねえ……

H a r e m o 9 俺の母上(後書き)

母上ルート、BAD END……というより、これが普通ですよ。ね。自分の母親を父親から奪うのは……倫理的に……

母上、略奪ルートを期待していた方、すいません。

さて、次回から、ついに本格的に平民ハーレム&異種族ハーレム作成編に入ります！ と、言っても未だに4歳児なんですけどね(笑)

H a r e m 1 0 俺のお姉さんメイド

俺は現在、晩ご飯を食べていなかったのにも関わらずエリス伯母さまの豪華な馬車でフォーク領に連行されているサイカです。

正直に言つて、かなり疲れている……

だって、本来なら俺は絶対安静だよ。

それなのにエリス伯母さまが……

まあ、たぶん、今頃、乳上と母上は喜び合つて抱き合っているだろうから……それを俺は見たくないんだけどね。

だって見たら、ふつふつと嫉妬とか色々な感情が俺にだって起きますよ。いくら（俺の中では）主人公でも、大好きな母上だったから。

その点、俺は『幸運』だったのかもしれない。このタイミングで拉致されたのは。

だけど……やっぱり行きたくないです。

行儀見習い……もちろん、俺に修行をつけるための方便ですよ。

ここから、始まる色気のない生活に絶望した……

『大丈夫ですう。エレンはますたーと一緒にですう』

ああ、付いて来てくれたエレンが可愛ゆすぎて、スリスリしたいです。

『ますたー、くすぐつたいですう』

「何をニヤケているのですか、サイカ」

「い、いえ。何でもありません。エリス伯母さま」

そういえば、すっかり忘れていたけどエレンは普段、俺以外には

見えないんだった。何でも初代ハイム家当主がエレンにやたら姿を見せないようお願いしたみたいだ。命令じゃなくてお願い、ここ重要。

「そろそろ、窓の外にわたし『たち』の屋敷が見えてくるはずですよ」

『たち』のところを強調する理由は……きっと変態勇者が自分と結婚しているのを強調したいんだろう。

何気に独占欲が強いからな……エリス伯母さまは。

エリス伯母さまの屋敷か……公爵家みたいにデカいだろうか……

「えっ!?!」

エリス伯母さまたちの屋敷を見た瞬間、俺は思考を停止してしまふ。

原作を知っているから公爵家みたいな大型の屋敷でも驚かないつもりだったけど……これは理解不能だ。

だって……俺の目の前には……

『立派なお城ですう〜。ますたー、エレンは先にお城見学をしてきます』

そう言いながら俺の手から放れて、城に向かうエレン……

エレンの言うとおり、俺たちの前には大きな城があった。確かに原作の公爵家みたいに屋敷が広大な面責を有しているわけじゃない。だけど……城って。

それに王城よりは建前なのか確かに小さいよ。小さいんだけど……やたらと豪華だ。昔一度、見たことがあるから間違いない。

……確か、フォーク領はハイム領と同じでトリステインでは税が安い領地で有名だ……安い税でこれだけの城が建つって……どんだけ

けチートなんだ……

それか、あれか？ 本来はトリスティンの貴族たちも、これからの城を持てる収入はあるけど、バカみたいに見栄のために金を使うから無理なのか？

それならバカとしか言いようがない……

バカというなら、俺の目の前で誇らしげに座っている伯母もバカとしか言いようがない……

城の必要がどこにあった？ 屋敷で十分だろう？

「何ですか？ 何か言いたいことがあるのですか？」

「立派なお城ですね。わたしは感激いたしました」

「そうですか」

上機嫌そうなエリス伯母さま……口が裂けても『バカだろ』など
は言いませんよ。だって命は大事だもん。

それから少しして、だんだん城が近くなってくる。本当に豪華な
装飾だな。

「ふう、着きましたね。さすがに一日ほど馬車に揺られてると、
つらいものですね」

首を回しながら馬車から降りるエリス伯母さま。

馬車の中で聞いた話んだけど。エリス伯母さまは本当に一日、
馬車に乗っていたらしい。一週間、フォーク領に戻っていたのも本
当らしいから。今日、またハイム領に来てくれたんだ。

俺が魔法を使ったのは、まだ朝の早い時間で半日寝ていた訳だから……俺が起きたのは午後3時くらい。エリス伯母さまがハイム家に着いたのは午後2時くらいらしい。1時間ほど俺を看病してくれ
たらしいから。1時間の休憩ですぐに、また馬車に乗ったんだ。ハ

イム領とフォーク領は隣接しているため、半日ほどで行き来できる
とはいえ……1日も馬車に乗っていて疲れない方が異常だろ。

もちろん、馬車を操作してくれている使用人は交代してるよ。大
名行列じゃないけど、後ろから着いて来てくれている、もう一台の
馬車に数人乗っているよ。使用人はチート使用じゃないぞ！

「何をしているのですか？ 早く降りてきなさい。サイカ」
「あ、ごめんなさい」

俺はひょいっと馬車から降りる。

やばいな、見上げれば見上げるほど思う……豪華だ……

俺とエリス伯母さまが門に近づくと勝手に扉が開く。

もちろん、いつの間にか俺とエリス伯母さまが乗っていた馬車は
どこかに行っていた。なんて迅速な仕事だ……フォーク家、使用
人部隊……これでは俺がハイム家に逃げ帰ることが、できないじゃ
ないか。

そして、扉から中が見えてきた刹那――

『お帰りなさいませ、エリスさま、若さま』

大量？ のメイドさん（美少女&美人さん）が頭をさげている。

……庶民の俺にはきついです。確かに転生して貴族になったけど

……ハイム家は没落寸前だから……そんなに使用人はいない……せ
いぜい、古参のメイドと執事が10人ほど（アロシア込み）だ。

……ただ……見た感じで今、目の前に100人くらいのメイドさん

……
フォーク家、すげえ。

というか、こんなに可愛ゆい使用人さんたちがいるなら一人くら
い俺の俺に優しい平民ハーレムに入ってくれないかな。今のこの口

リボデイならシヨタコンでも受け入れてあげられるよ。
俺がそんなバカなことを考えていると不意に

「……………ライナはどこですか？」

ものすごく低い声でエリス伯母さまが呟く。

今更だけど変態勇者こと伯父さまはライナという名前なんだ。

その呟きを聞いてメイドさんたちの顔が歪む。さすがはフォーク家の使用人。エリス伯母さまの恐ろしさは嫌というほど分かっているんだろう。

「ラ、ライナさまは……………」

一人のメイドが口ごもると、突然、周りが騒ぎ始める。

「あんた知っている！？」「知らないわ」「朝、エリスさまが出かけられた後、ライナさまを起こしに行ったのは誰よ」「わたしだけど、わたしが起にいったら、既に起きてらして……………」朝食ができたら呼んでくれ』と仰られていたわ……………」それで朝食ができたから呼びに行ったら……………」もぬけの殻だったわ」「そ、そんな、どうするの！?？」

いや、メイドさんたち、全部、エリス伯母さまに聞こえているからな。

おそらく、また、エリス伯母さまから解放されたと思ったら、すぐ帰ってくることを知って逃げ出したんだろう。

逃げるくらいなら結婚しなければ良いのにーと思う俺はおかしいんだろう。

それにしても、エリス伯母さまの夫なら逃げてても無駄なことくらい知っているだろうに……

わざわざ、無駄なことを……

まあ、俺には関係ないから良いけど。

「サイカ、わたしはこれからライナを探しに行かなければなりません。あなたは先に部屋にメイドに案内してもらいなさい。時間も遅いのでライナの見つかった時間によっては今日の鍛錬は休みとします」

な、なんだって!?

それなら、話は別だ！　ライナ伯父さま、頑張つてエリス伯母さまから逃げてください！　俺はあなたを応援しています！　今のあなたなら、見つかったても2時間ほどは逃げきれはるはずです！

ちなみにライナ伯父さまは結婚当時、風のラインメイジだったんだけど、エリス伯母さまの折檻から逃げているうちにいつの間にか、トリアングルメイジになったという逸話を持つ伯父さまだ。きっと、今回もやつてくれるはず！

「では、わたしは向かいます。リリス、サイカを頼みます」

「はい。エリスさま」

そう眼鏡をかけた黒髪ポニーテイルのお姉さんに言って風のメイジでもない癖に風のごとく、どこかに消える伯母さま……さすがチート。

でも、この世界には黒髪で黒い瞳は珍しいし、この人も実は原作のシエスタの親戚かなにかなのかもしれない。

俺の読んでいた原作や二次作では異界（現代）の人間がハルゲギニアに来る定義が曖昧だった。

俺が死んでから、そのあたりを原作でやったのかもしれないけど……後で検討だ。

できれば、俺のいる『このハルゲギニア』では現代との接点を完全に遮断したい。

だって、もし現代との交流が行えるようになってみる。

間違いなくハルゲギニアは現代の国々に侵略される……原作でもサイトの持っていたロケットランチャーで、この世界のトライアングルメイジのゴーレムが簡単に壊されたし、世界大戦中の兵器であるゼロ戦に風竜では歯が立たない。現代の兵器にハルゲギニアの魔法は戦力としては完全に負けている。

それに一番の問題はハルゲギニアの人口と現代の国々の人口では、明らかに後者に分配が上がる。

異文化交流という言葉の侵略が行われるに決まっている。国際連合などが止めてくれる、という楽観論は『ここで生きている』俺からしてみればしない方がよい。

誰かも言っていただろう？ 物事は『最悪の事態を想定して動くべきだ』と。

元現代の日本人の俺が言うのも何だけど、世界はそんなに甘くない。

現代で、さえも、飢える人間や貧困に耐えられず自分で死を選ぶ人間もいるんだ。

まあ、侵略以前に……サイトを現代から拉致して奴隷つかいまにするであらう、俺たちもたいがい鬼畜なんだけどな……あ、日本がハルゲギニアに攻め込む大義名分だったわ。日本国民を拉致し奴隷として強制労働させたっていう。

日本も資源が少ない国だ。

サイトのことを元に銃をちらつかせながら資源交渉するだろうな。

もし仮に、交渉が破談してもサイトを理由に攻め込むだろう。

始めは国民も反対するだろうけど、サイトのことをメディアで報道すれば国民は理解してくれるだろう。もしかしたら明日は自分が召還されて奴隷つかいまにさせられるかもしれないんだから。

かく言う俺も、もし逆の立場なら間違いなく、奴隷解放戦争？

に賛成だろう。

そういう理由があるから俺は現代との接点を絶ちたい。ロマリアのバカ坊主共が反対するかもだけど。

おいおい、考えていこう。

と、まじめな話をしちまったな。俺らしくない。

まあ、まじめな話はここまでで後は！ このリリースさんという平民美人さんとイチヤイチャするぜ、ぐへへ。

「では、サイカさま、わたしの後ろについてきてください」

「はいっ」

メイドのみなさんが解散して仕事に戻っていく中、俺はリリースさんの後について行く。

よし、仲良くなる基本は、相手のことを知ることだな。

「リリースさん、質問してもいいですか？」

俺は4歳児特有の可愛らしい笑顔をみせる。自分で言うのも何だけど、俺の容姿は可愛い。だって、滅茶苦茶綺麗な母上の息子なんだから、当たり前だろ。

このスマイルなら、リリースさんも骨抜きにできるはず！

「はい、かまいません」

ぐぬぬ。さすがは、仕事ができそうなのはある。めっちゃ事務的なやりとりだ。

しかし、俺は負けない。

「リリースさんはメイド長なんですか？」

「はい。第一メイド隊のメイド長です」

……第一？ 俺を倒しても第二、第三のメイドがいるぞ！ とかのノリだろうか？ もし、質問して『そうですか、何か？』といわれったら俺のヒットポイントが減る可能性もあるから、聞かなかつたことにしよう。

「リリースさんはいつからエリス伯母さまに仕えているのですか？」

「わたしが12歳の時になります」

「この屋敷しゆくには何人メイドがいるんですか？」

「149人です」

やばい。

仲良くなるどころか、なぜか、一問一答形式の問題みたいになっているぞ……なんてこった……俺のニコポが効かないとは……

しかし、俺は諦めない！

絶対にこの、仮面を取り払ってみせるぜ！

5分後、俺の完全敗北で、この戦争は終わったのだった……

あれから3時間15分29秒後。ライナ伯父さまの悲鳴がフォーク家に響きわたった。

あの伯母さまから3時間も逃げきるなんて、伯父さまもたいがいチートだな。たぶん、チートじゃないと生き残れなかったんだろうけど。

それから少ししてリリスさんが俺の部屋にやって来た。
たぶん、この少しの間にライナ伯父さまの盛大な折檻が行われたのだろう。

「サイカさま、失礼します。エリスさま、ライナさまがお待ちです。わたしの後について来てください」

リリスさん、一応、フォーク家の当主はライナ伯父さまなんだから、先に名前言ってあげようよ……さすがに俺も変態勇者の不憫さで枕を濡らしそうになった。

それから、豪華そうなジュータンが敷き詰められた廊下を歩く。

あ、そうそう、馬車の中でエリス伯母さまあ教えてくれたんだけど。母上を誘拐したバカを雇っていたのは……実はヴァリエール！などではなく。普通のバカな貴族共だった。あのクツキーとか怪しかったから、俺はヴァリエールかと思っていただけ……やっぱり世の中は単純じゃないな。

エリス伯母さまの優秀な密偵の調べでは何でも、この頃、調子に乗ってきているハイム家をこころへんで潰しておこうという三段だつたらしい。

自分たちの利益を増やそうとしないで、他人を貶めようなんて……ただのバカだろ。

それも、そういうことをするバカな貴族は金がない。だから、そのあたりのバカな貴族に声をかけたらしい。『なあ、なあ、ハイム家と一緒に陥れようぜ』と。それで参加した貴族は7家だそうです……アホだ。アホすぎる。家を貶める暇があれば内政しろよ、と言いたくなる。

まあ、それでも母上を誘拐とは許せなかったので、俺が制裁をと思っていたのですが、すでにエリス伯母さまが優秀な密偵さんたちに頼んで彼らが国の金を横領していた証拠を王宮で公開したそうです（もちろん、ハイム家とフォーク家が公開した、と思われなように綿密な作戦を立てて）。

それで、もちろん、彼らは没落。たまたま、彼らの領地がハイム家とフォーク家と隣接していたため、その領地は二家に分配されました。トリステインに放っておける領地なんて存在しないから……ただでさえも、税率高くて国外逃亡を図る平民は多いので税の納入率が毎年下がっているのに……

王宮で頑張っているマザリーニ？ さんには、さらに頑張っているものだな。あの人しか、まともに政治している人はいないから。そのうち、マジでヴァリエール王朝ができるかもしれない。原作を読んでいる限り、そうなった方が、この国のためだと思うけどな……原作のルイズの性格からしても、あの人たちは貴族の中の貴族ばいからな。今よりはマシな状態になるだろう。

まあ、王位争いなんてして疲弊したらトリスティンは他国に侵略されて滅ぶけどな。ガリア王位争いをして無事だったのは大国だから。見栄だけのトリスティンにはできない。

まあ、それはどうでもよいので、リリスさんに再度、挑戦する！

「リリスさ」

「サイカさま、この部屋でエリスさまとライナさまがお待ちです」

……作戦を決行することすら、できない。

なんで、こういう時に『幸運』が発動しないんだろう……

リリスさんに扉を開けてもらって中に入る　するとそこにはエリス伯母さまと包帯でグルグル巻きにされた男の人たちとメイドさんたちだった。

「……エリス伯母さま……その方は、どなたですか？」

その瞬間に場の空気が固まった。

いや、こうなるのは分かっていたんだけどね。だって……言いたかったんだもん！

「……こんな格好で済まないな……確かに、こんな格好の人間が伯父だとは思わないよな……」

泣きそうな声でそう言う包帯の男。

……なんか悪いことをしたように感じるのは俺の気のせいかな？

「やっぱり、ライナ伯父さまでしたか……その……」愁傷さまです」

「分かってくれるか……サイカ……」

「はい……」

俺とライナ伯父さまと、どこか心が通じあえたような気がした俺
だった。

「そうか、話の分かる子供に成長してくれて嬉しいよ」

「わたしも話の分かる伯父さまがいてくださって心強いです」

「サイカ……」

「ライナ伯父さま……」

「おっほん」

『ひっ！？』

エリス伯母さまの咳払いで俺とライナ伯父さまが同時に情けない
声をだす。

ライナ伯父さまは真剣？ な顔になる。もちろん、包帯で目の部
分しか見えないから分からないけど。

「やはり、親元を離れると寂しいか？」

「……はい」

乳上と母上がいチャついていたなら、乳上を殺しかねないけど、や
っぱり今まで4年間、慣れ親しんだ皆と離れるのは、やっぱり辛い。

「エリス……やはり、こんな小さな子供を親元から離すのは……」

な！？

俺のためにエリス伯母さまに逆らってくれるのですか！？
今更だけど、なんて良い人なんだ！

「大丈夫です」

ライナ伯父さまの言葉を一瞬で切り捨てているエリス伯母さま。

「しかし……」

切り捨てられていても俺のために頑張ってくれているライナ伯父さま。

「大丈夫です」

「しかし……」

「わたしが大丈夫と言ったら大丈夫なのです！」

「………はいっ」

ライナ伯父さま、あなたはよく

やってくれました。さすがは変態勇者です。変態かMの人じゃなかったら絶対にエリス伯母さまは口説けなかったと思います。あなたは前者だと俺の直感が教えてくれます。

「これでライナとの顔合わせを終わりということ、よろしいですね。サイカ」

「はい」

まあ、ライナ伯父さまの顔は包帯で見えないけどね。

「では、わたしは少々、早いですが休ませていただきます」

そう言ってリリスさんを伴って部屋を出ていくエリス伯母さま……あれ？ 夜の営みはいいのかな？

俺に気をつかってくれたのか？

まあ、他人の営みのことなんて興味ないんだけどね。

後、あの堅苦しいメイドさんはエリス伯母さまのお気に入りが……どつりで堅苦しい訳だ。

俺のニコポが通用しなかったのも真面目すぎるから表に出さなかつただけだろう。

エリス伯母さまが外に出ていったのを見計らってライナ伯父さまは口を開く。

「すまない。サイカ、僕の力不足だ」

「いえ、あの伯母さまに俺のために逆らってくださっただんで感謝することはあっても攻める気はありません」

「そうか……そう言ってくれるとありがたいよ」

「それで、だな……アーシアと離れて暮らすにあたり、たぶん、母親が恋しくなる時もあるだろう。しかし、僕が言うのもなんだがエリスはサイカを甘やかすとは考えにくい。エリスの息のかかったメイドたちも、そう言われているはずだ」

……じゃあ、俺は……ここにいる間、誰ともイチャイチャラブプできないのか！？

そ、そんな……この時期が過ぎたら『まだ小さいから寂しいのね仕方ないな。添い寝してあげるよ』というメイドさんがいなくなるだろ！？

下心を悟られずにエロいことをするには、この時期が一番、良いのに！

「そんな寂しそうな顔をするな。安心しろサイカ。おまえのためにエリスの息がかかっていなくて子供好きの使用人を一人召し抱えた。

その子に存分に甘えると良い」

な、な、なんだって!?

「そ、それは誠ですか!？」

「ああ、そうだ。こんなことで嘘をつかないさ。入ってきてくれ」

ライナ伯父さまの言葉で一人のメイド服を着た女の子が部屋に入ってくる。深紅の髪をサドポニーテイルにしている活発そうな16〜18くらいに見える女の人だ。

猫みたいな黄色い瞳が可愛い!

おおおおおおおおおおおおおおお! 俺は、俺は、こんな平民さんとイチャラブしたかったんだ! アリシアはなんやかんやで幼すぎて、どうしてもハーレム要因と見れなかったんだよ!

さすがは変態勇者!

俺のために……俺はあんたをリスペクトします!

「サイカ、紹介するよ。彼女は今日、雇ったメイドのニーナだ」

「ニーナです。よろしくお願いしますね。サイカさま」

猫みたいに可愛い。お姉さん系の美女に、こんな顔をされたらっ!?

俺は! 母上、すみません。俺は失恋のショックから立ち直れそうです!

「サイカ……そこまで喜んでくれるのか……」

俺はいつの間にかライナ伯父さまの手をとって涙を流しながらお礼を言っていた。

まさしく無我の境地。拾得条件がお姉さん系の美女を手にいれることだったなんて……

涙を流す俺を見てニーナさんは何を思ったのかクスクス笑っている。

「サイカさま、わたしのことは本当の母親だと思って甘えてくださって構いませんからね」

そのニーナさんの言葉で危うく昇天しかけたサイカ・アーシュド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムでした。

Harem 11 俺のお城経済考察

「サイカさま、朝食の準備ができましたので食堂へお越しください」
「はいっ！」

俺の優雅な生活は始まった。

嘘です。朝食の後、いきなり、エリス伯母さまに修行をつけてもらう予定です。……修行やりたくねえ。

だけど、やらなかったらやらなかったで怒られるので修行は全力を尽くすけど。

ちなみに、今、俺に声をかけてくれたのは、もちろん、俺の専属メイドことニーナさんだ。朝から、その綺麗な赤い髪を見れるなんて、俺は感激です！

俺は、ふとベッドメイクしてくれている俺の専属メイドさん第二号の後ろ姿を見ながら、ふと、アリシアのことを思い出した。

そういえば、アリシアがいない間に俺はエリス伯母さまに拉致されたからな……屋敷にアリシアが戻ってきたとき……アリシア泣かないだろうか？ 手紙を書いてもアリシアは、まだ読めないしな……泣くだろうな……泣いてくれないと俺、ショックだけ……

「サイカさま、大丈夫ですか？ ご気分が優れないのでしょうか？」
「いや、ちょっと……実家のことを思い出していたんです」

正確には屋敷じゃなくてアリシアだけだ。

「そうでしたか……申し訳ありません。寂しい思いをさせてしまっ
て」

ニーナさんは俺を優しく抱きしめてくれる……

ぬおおおおおお！

ニーナさんの、2つの膨らみに俺の顔が埋もれる。こ、これは、最低以上はある……やばい、鼻血が……だけど、まだ、ダメだ。これくらいで鼻血を出しているようじゃあ、多数の平民さんの相手を1人でするなんてできない！

「大丈夫です。安心してください。わたしが皆さんの代わりに、ここにいます」

俺が身震いしているのを、俺が寂しがっていると勘違いしたんだろっ……

ごめんなさい。

俺はあなたが考えているようなピュアな心の持ち主ではありません。めっちゃ2つの柔らかさを堪能して喜んでます。

「そろそろ、食堂に向かいませんとエリス伯母さまとライナさまをお待たせしてしまいます。食堂に向かえますか？」

「は、はい。行きます！」

言えない……もうちょっと俺を抱きしめる力を強めてください、なんて……でも、後、もうちょっと力を強めてくれたらニーナさんの膨らみの形が完全に分かったんですが……

食堂に向かう途中、ニーナさんは手を俺の方に出してくれた。これは、まさか……おててを繋ぎましよう、という奴か！？ 前世の

彼女とは手も繋いだことがない、俺としては心臓バクバクだ。

ええい！ 精神年齢30歳の、おっさんが何を迷っているのだ！
それに今の俺のぷにぷにぼでいは現代人で、さえも羨む柔らかさ
なのだぞ（サイカの勝手な自己解釈）！ 虜にすることはあっても、
虜にされることなどないわ！

ごめんなさい、ニーナさんのおてては柔らかくて、触りごこち、
良かったです。また、おてて繋ぎたいたいです。

でも、俺が、こんなに手を繋ぐくらいで同様するのは周りのせい
だと思っぞ！ だって今まで周りにいたのは

天然母上。

常識を超越する伯母。

破壊の幼女天使。

俺にあまり構ってくれないメイドさんたち。

うん。仕方ない。

俺が食堂に入ると

「サイカ、あなたはメイドと手を繋ぐとは、何歳ですか？」
「4歳です！」

エリス伯母さまに声をかけられた。
ちなみに、嘘は言っていないよ。俺は4歳だよ。肉体年齢は。

「はは、エリス、これはサイカに一本とられ　ぐはっ」

変態勇者、もとい、ライナ伯父さまがどこから、ともなく現れた
大量の水によって窓の外に吹き飛ばされた。

……ライナ伯父さま……ご愁傷様です。
というか、フォーク家の当主は一応、ライナ伯父さまなのに、こ
んなに毎日怪我させられて仕事は大丈夫なんだろうか？

「大丈夫です。優秀な家臣がいますので」
「はあ、そうですか」

ちなみに、もう、エリス伯母さまのチートぶりには驚かないこと
にしました。

「サイカ、ライナが戻るのを待たずに朝食をいただきますよ。ラ
イナを待っていたのでは朝食が遅くなってしまいますからね」
「……はい」

吹っ飛ばしたのは、あんだだけだね。とは、もちろん言えない、
俺を許してください、ライナ叔父さま。

ちなみに、エリス伯母さまは俺に修行をつけるよりも、女を磨くことをした方がいいと思います。

「サイカ、今日の朝の鍛錬は通常の3倍です」

「な、な、なぜですか!？」

「何となくです」

……これからは心の中でもエリス伯母さまの悪口は言えないようです。

そういえば、この部屋はやけに朝日が入ってくるな……眩しい……もしかして、この朝の光で目を覚ませってことなのかな? これはエリス伯母さまではなく、後でリリスさんにも聞こう。

「サイカさま、お食事中、失礼します。わたしは少々、サイカさまのお部屋の掃除がありますので先に失礼させていただきます」

そう言って一礼するも

「あなた、貴族の食事中、貴族に話しかけるとは何事ですか? リリス、後できつちりと調教きょういくしておきなさい」

「はっ」

「ごめんなさい……二ーナさん……俺には二ーナさんを庇うだけの力はありません。心の中でだけでも謝る俺。情けない……」

「申し訳ありません。失礼しました」

二ーナさんは無表情にそう言って部屋を出て言った。
ん? そんなにリリスさんの教育が嫌なのかな?

その後、何にもなかったような顔をしてライナ伯父さまが食堂に戻って来たことに驚く以外は普通の朝食の風景だった。

朝食を終え、俺とエリス伯母さまとリリスさんで、城の鍛錬場に向かう。

正直に言っ、ハイム家の屋敷も前世ではマンションに住んでいた俺からすれば、大きすぎて度肝を抜かれたけど、この城は大きすぎるから、一人で歩いていたら、迷子になる自信がある！

というより鍛錬場って、どんな所なんだろう？ ハルゲギニアの文化は昔のヨーロッパに似ているから、同じような感じなのかな？
それとも、意外に日本の道場みたいな感じなのかな？

辛い中にも、楽しみを見いだしていた俺の考えとは裏腹にエリス伯母さまの元に1人の執事がやって来て、エリス伯母さまの耳元で何か囁いている。

どうしたんだろう？

「サイカ、今日の鍛錬は中止です。リリス。サイカを部屋まで案内してあげなさい」

「はっ」

そう言い残して去って行くエリス伯母さま。

今日のところは地獄から解放されたってことか？ ……やった！

やったぞ！ ありがとう、俺の幸運！ これで、ニーナさんと、
にゃんにゃんごろごろできるぜ！

「では、サイカさま、お部屋にご案内しますので、わたしの後ろに
ついて来てください」

「はい」

それから、俺は自分に割り当てられた部屋に戻る最中先ほど、食
堂で感じた疑問をリリスさんに聞いてみることにした。

「リリスさん。なんで、食堂には朝日があんなに入ってくるんです
か？」

「あの部屋はエリスさまが4年前に、この城を建てられる際に、自
分たちが生きるために食事をとる場であり、神聖な場所であるから
こそ、魔が絶対に近寄らないように神聖な朝日が部屋を包み込むよ
うにしているのです」

「……そうなんですか」

食堂の件は、もういいです。

もっと、知りたくない話を聞いてしまった……

『エリスさまが城を建てられる際に』

この言葉が指すところの意味は、エリス伯母さまが、このフォー
ク城を建てられた、ということ…… どんだけ金持ってたんだよ……
普通の安い税収では絶対に不可能なはずなんだけど…… ちよつと計
算してみよう。

普通に考えて、この伝統だけのトリステインで城を建てるには、いくつか順序がある。

まず、王家に了承を得ること。まあ、これは当然と言えば当然。次に政治のトップに了承を得る。本来は王なので、この作業は1回で済むのだけど、今のトリステインには王がいないので、2回になる。

ちなみに、もちろん、認めてもらうのに多額の寄付という名の強奪が行われる。

次にロマリアの坊さんの許可をとる必要がある。これは、なぜ？と思う人もいるかもしれないが、一応、この世界には異端審問というものがある。いくら王家に許可を得ていても、あいつ等は難癖つけてくる時もある。

……本来、始祖の末裔である王家に認めてもらう方法はある時点ではないはずだけど……な。認めてもらう方法は想像に任せるよ。ここまでで、男爵くらいの貴族が5年間に使うだけの金が必要だ。国としては自分たちに反乱されては、たまったものではないから力を削ぐ意味もある。坊さんは……まあ、想像に任せる。

ここから、やっと、建設費用に入る。

まず、材料費、俺は建築関連のことは分からないが、城を1つ建てようと思うと多大な材料が必要になるのが分かる。ハイム家の屋敷を建てるのにかかった材料費が確か、新金貨で2千。これは、原作で3千で庭付きの屋敷が買える、という記述があったはずだから妥当な値段だ。もちろん、固定化の魔法をかけてもらったのを込みの値段だ。この城の面積と大きさから考えるに、ざっと、ハイム家の屋敷の50倍。つまり、材料費だけで新金貨10万はくだっただろう。

……最後に建設費だけ……城を作りには平民は、もちろんだけど……土系統のメイジも必要になる。エリス伯母さまのことだ。平民に無料働きさせるとは考えづらい……やばい、ハイム家の年収の1000倍以上の金がかかっているよ……この城建てるのに……

その他、もろもろの維持費、人件費、日用雑貨品の費用などを考えると……頭がくらくらする。後でエリス伯母さまから経営学でも学ぼうかな……どうやって税率が低い状態で、これほどの城を建てたか。

安い税収にすれば、税収が上がる可能性がある、という考え方もあるが……それはあくまで現代の、ある程度、治安と経済などが安定している国でのこと。

いくら、フォーク領は比較的盗賊が少ないとはいえ、少なからず出る。毎年、税の納入前は盗賊が頻繁に各地で暴れる。村人が金を持っているのを知っているから。

だから、いくつかの村では、納税が行えない。まあ、そういう演技をして、納税を回避する村もあるそうだが、分かったら打ち首では済まないから、それを行っている村は少ない。

納税率が悪いなら、税率を上げて利益を上げるのがトリスティンでのやり方だ。まあ、8〜9割の税っていうのは、さすがに退くけど……

経済の面から見ると、そもそもトリスティンでは、フォーク領とハイム領といくつかの貴族以外の領地の税収は、馬鹿みたいに高い。それなら、商人たちは、フォーク領を始めとする税率の安い領に集中するのでは？　と思つかもしれないが話はそう簡単な話ではない。

商人たちを独占してしまえば、他の貴族に反感を買う。

商人たちが来ないから物流は止まり、領地の税収は減る。そうなれば、税収は下がる。そして、元の収入に戻そうとすれば税率を上げるしかない。

そうすると民は安い税率の場所に逃げる。そして、馬鹿な貴族の税収はさらに落ち込む。そして理不尽に税率が安い領の領主を恨む。それで潰れてくれたら楽なだけ、そういう輩に限って異端だ、とか、我が領を陥れるためだ、とか難癖つけてくる場合が多い。

陥れて、などと言ってくる連中はまだ、対処できないことはない。だけど、異端だ、と騒がれたら正直に言っただけでめっちゃくちゃ面倒なことになる。

そうならないために税率が安い領地は商人たちの出入りに制限をかけないといけない。王家や王家に繋がる由緒正しき貴族たちには、あんまり関係がないんだけど。

この世界で貴族をやっていくためには、この世界の色々な事情を学ぶ必要もあるんだ。

「ちなみに、エリスさまは経済学については、そこまで優れてはおりません。ライナさまが経済については担当されております」

「リスさんが俺の心を読んできた!？」

さすがは、エリス伯母さまのお気に入り……読心術まで扱えるなんて……

それにライナ伯父さまも……チート使用だったのか……

「いえ、サイカさまが口に出されていただけです」
「そうでしたか……」

考えごとを口に出してしまう、何て……失態だ。気をつけよう。

そうこうしている内に俺に支給された部屋に着いた。俺は、とりあえず、ニーナさんにモフモフしてもらったために突撃するのだった、
ぐ／＼／＼。

H a r e m 1 1 俺のお城経済考察（後書き）

今回、ついに、まともにサイカが！！ メイドさんとイチヤイチヤ。もげるコールが聞こえてくる！ しかし！ おそらく、タイトルに『俺に優しい平民ハーレムの作り方』などと書かれているのに、読んでくださっている皆様なら、許してくださるはず！

前半のいちやいちゃだけで終わってしまったら、ただの馬鹿で終わってしまいそうだったので、少し経済考察？ を。

今さらですけど、二桁に到達しているのに……原作キャラがヴァリエール公爵の名前だけしか出ていない、という意味分からない状況に（笑

おそらく、少年期編の序盤で出せるはずです！

今しばらく、お待ちを！

Harem 12 俺のメイド長観察記

急にエリス伯母さまに用事ができたため、自室に戻りニーナさんに突撃しようと思っていた俺ですが……ニーナさんは俺の部屋にいませんでした。

考えてみればニーナさんは俺の専属メイドさんだけど、俺の部屋にずっといてくれる訳じゃないからな。俺から離れて俺の服を洗濯したりもしてくれる。

っ!?

と言うことは、俺の下着をニーナさんが洗濯してくれているというのか!? は、恥ずかしいすぎる。

屋敷にいた時は、俺の専属メイドさんというのがいなかったから（アリシアはサイカのメイドだが、これと言って専属ばい仕事をしていないから除外）代わる代わる俺の衣服を洗濯してくれていたから気にならなかったけど……こう……お姉さんが洗濯してくれていると思うと……どこかね……

とか、考えながら時間を潰していたんだけど暇だ……

ハイム家になら、俺の読んだことのない本が山ほどあるから退屈な時はあそこに行けば良い。そもそも屋敷にはアリシアがいたから退屈なんてしなかったけど。

このフォーク城の書庫は……残念ながら場所が分かりません。だって、この城、広すぎるんだよ！ 迷ってメイドさんに道を聞いたとき

『くすっ、サイカさまは道に迷われたのですね』

と軽く笑われたら恥ずかしくて泣いてしまいかもしれないから、絶対に迷いたくないし！

え？

4歳児なら普通だった？ 生憎、俺の精神年齢は30歳なもので。だから、ニーナさんが帰って来るのを待っている訳ですが……
暇だ……

『コン、コン』

誰かが扉をノックしてくる。

あ、きつとニーナさんだ！

「どうぞ」

「失礼します」

そう言っに入って来たのはニーナさんではなく、エリス伯母さまのお気に入りメイドであるリリスさんだった。

うん、黒髪が眩しいぜ。

「紅茶をお持ちしましたので」

俺の部屋に備え付けられたテーブルに手際よく紅茶が並べられる。この頃、紅茶を入れてくれるのはアリシアだけだったから……どきどきしながら、見ていないといけなかったんだけど……異常な程、安心してみられる……これがチート伯母さまのお気に入りメイドの力ということか……

そういえば、エレンはどこ行ったんだろう？ まあ、子供じゃないし、そのうち、お腹が減ったら帰って来るか。妖精がお腹、減る

のかは知らないけど。

「サイカさま、用意ができました」

「ありがとうございます」

お礼を言いつつ椅子に腰掛ける。

……リリスさんが俺をがん見してくる。

……飲みずれ

「あの、リリスさん、そんなに見つめられると飲みずらいんですが……」

「失礼ですが、サイカさま。エリスさまより、サイカさまが情けないことを、言われた際に、サイカさまにわたしが進言する許可をいただいておりますので、言わせていただきます」

今の俺の言葉に情けないところ、なんてあった？

普段は、アリシアも席に着くから俺をがん見することなんてないから……飲みずらかっただけなんだけど。

「貴族たるもの使用人の視線など、気にしてはいけません。社交界では、サイカさまは次期当主として何百の視線の前で挨拶をしなければいけないのですよ」

……いや、社交界は挨拶するために出ている訳だから、ある程度覚悟しているから大丈夫だけど……今は違っでしょ……と言いつ返し
たかったけど。もちろん、俺が平民メイドさんに反論できるはずもなく。

「……申し訳ありませんでした」

と、謝罪するしかなかった。

……俺、情けねえ。

それから、ちっとも楽しくない、お茶を飲むこと数分。

「おかわりはいかがですか？」

「結構です」

「そうですか」

淡々とそう言って、カップを片づけて部屋を出ようとするリリースさん。

……そうだ！

リリースさんの後をつけてみよう！

だって、こういう完璧そうなメイドさんには、必ず欠点があるはずなんだよ！（ギヤルゲエ知識より）

例えば、1日1回はドジをするとか、蛇が苦手とか、すました顔をしていても可愛いものが好きだったり。

こういう欠点を見つければ、それを改善するためのフラグが立つ。

（ギヤルゲエ知識より）

よし、そうと決まれば行動開始だ。相手に一切、迷惑をかけない、尾行の達人、サッチャーンと言われた俺をなめるなよ！

「ライナがわたしを直接、呼び出すなど、いつ以来でしょうか」

執事と共に、エリスは自分の夫であるライナがいる執務室を指す。

道すがら、エリスの両親の代から仕えてくれている執事に事情を聞こうと思ったエリスだったが、意外なことにライナはエリスを呼びに行かせた執事に、さえも内容を伝えなかったのだ。

「厄介なことになっていなければ、いいのですが……」

エリスの呟きに執事は苦笑するしかなかった。

「失礼します」

きちんと、ノックした後にエリスは一応、断りをいれてからライナの執務室に入る。そこにいた3人の男性を見て驚く。

彼らはフォーク家に仕えてくれている家臣のメイジの中でも上位に位置する3人だったから。

「エリス。すまないね。鍛錬の途中だったかい？」

「いえ、大丈夫ですよ。ライナ。幸い、鍛錬場へ向かっている最中でしたので」

「そうか。それは良かった。皆みなに集まってもらったのは、相談があるからだ」

「失礼ながら、申し上げますと、相談事なら、我々よりも……」

ライナの言葉に集められていた家臣の中で一番歳が上であろう男がライナの言葉に、やんわりと反論する。

「いや、これは、内政を手伝ってくれている家臣では、対処できない案件なんだ」

「そうですか……」

おずおずながら、下がる家臣の様子を少し見てからエリスは口を開く。

「前置きは、必要ありません。内容を端的に述べてください」

「……実はフォーク領内の13カ所で亜人の襲撃が行われた」

『っ!?!』

ライナの言葉に執務室の中にいたライナ以外の者はすべて驚く。

「それは、間違いないのですか?」

「ああ。だから、戦闘に優れ、亜人との戦闘経験豊富な君たちに聞きたい。この件は、たまたまだと思うかい?」

「ライナさま……亜人を操れる人間など、この世に数人しかおりませんし……アルビオンなどでは、傭兵として雇い入れることもあるそうですが……大抵は敵味方、問わず攻撃をして終わりだと聞いております……偶然の方が説明がつくのでは?」

先ほど、ライナの言葉を制した男は、おずおずと口を開きライナに進言した。

「確かに……そうなんだけど……どこか、引つかかるんだ」

「……ライナの勅は、よく当たりますからね。今は黒幕を捜すよりも、領民の安全を確保する方が優先です。わたしも出ますので、あなたたちも出なさい」

『はっ』

「そのこと何だけど……できれば、今回は傭兵を雇ったからエリスには行かないで欲しいのだけど……」

「ここで、わたしが行かなければ領民に示しがつきません。それに、わたしが留守でも、あなたとリリースがいれば、大抵のことは対処できるでしょう？」

「それは……そうなんだが……」

「くどいです」

「はあ、分かったよ。みんな、エリスのことを頼んだよ。傭兵は第三門のところに集めている、城に残すのは最低限で構わないから迅速に行動してくれ」

『はっ』

ライナの指示でエリスと家臣たちは執務屋を出ていった。

「何事もなければ、いいんだけど……」

「ねえ、ニーナさん、どう思う?」

「そうですね〜完璧すぎると思います」

今、俺はリリースさん尾行の真つ最中だ。途中でニーナさんと会ったので今は2人で尾行しているんだけど……俺が尾行を初めてから3時間弱、リリースさんは休憩もとらずに働き続けているのにも関わらず、一切の無駄がない。

体も俊敏に動いており、疲れた様子も一切みせない……言うなればニーナさんが言ったように完璧。

その一言につきる。

もしかして、これ以上、尾行しても無駄なのかな? と疑いだした時、リリースさんは俺の視界から消えた。

急いでニーナさんの方を見るも、ニーナさんは困った顔をしながら、後ろを見ていた。

「はあ、あなたたちは、そこで何をやっているのですか?」

リリースさん!? さっきまでは、あそこで掃除していたはずなのに!?

「す、すいません」

反射的に謝ってしまう俺。情けね。それにしても……今、一瞬で視界から消えた魔法、精霊魔法の『テレポート』か俺の『メタスタスイス』に似てたような気が……まさか……リリースさんって……でも、それなら、まったく疲れていない理由も説明がつく……

「はあ、サイカさまには今後、いたずらは自重していただくとして、二ーナ、あなたは仮にもフォーク家のメイドなのですから主人の間違いを正すくらいのはしなさい」

「申し訳ありません、リリスメイド長」

あれ？

俺へのお仕置きって、それだけのお小言？

この頃、エリス伯母さまの折檻を普通に受けているせいで、これくらいだったら、普通に怒られただけじゃあ、なんか……拍子抜けだ。

エリス伯母さまにいたずらが見つかる、ということは、しばかれるということだから。

「では、わたしは仕事はまだ、ありますので」

そう言って俺を避けるようにして、また仕事に戻って行くリリスさん。

このメイドさんの正体って……

H a r e m 1 3 俺の武装メイドさん

『行ってらっしゃいませ、エリスさま』

30人ほどのメイドさんたちが、エリス伯母さまを見送っている。何でも、エリス伯母さまに急用ができたらしいんだ。どんな内容かは教えてくれなかつたけど、俺への修行がなくなって嬉しい限りだ。それにしても、本来、それなりの地位の貴族は馬車以外で移動することは滅多にないらしいんだけど、今回は馬で移動するみたいだ。

ちなみに、今回、エリス伯母さまに同行するのは、数人の家臣……分かりたくなかつただけど、その家臣 全員がメイジだ。それも、トライアングルくらすの。

なぜ、分かつたかと言うと、明らかに戦闘できますよ！ と言う秀囲気を出している杖を持っているから。まあ、トライアングルメイジだというのは俺の推測、あの伯母さまが自分の背中を預ける人間が弱いはずがない というよりも、エリス伯母さまに鍛えられて精神的に成長しない奴は既に、人間をやめていると思う。

「リリース、後を頼みましたよ」
「はっ」

そして、おそらく、俺のことをリリースさんに任せるエリス伯母さま……甘やかすな、とかそういう意図だろう……はあ、今はニーナさんが甘やかしてくれているから大丈夫だけど……ニーナさんが、なんかの拍子でやめてしまったら、俺、甘やかしてくれる人に飢えるかも……

「サイカ」

「は、はい!？」

まさか、俺の名前が呼ばれるのは予想外だったため、少し驚いてしまう。

「……………できる限り、早く帰ってくるつもりですが……………何かあっても決して無理をはいけませんよ。城にはライナとリリスがいます。何かあったら逃げなさい」

「はい？」

「何でもありません」

変なエリス伯母さまだ。まあ、エリス伯母さまに常識がないのは、いつものことだけだ。

「では、行ってきます」

そう言っつて、夕日の方向に馬を走らせるエリス伯母さま。本来は夜は亜人や獣が活発に人を襲うから、夜に外に出るのは得策ではないんだけど…………あの伯母さまと、あの伯母さまに鍛えられたであろう家臣なら大丈夫だろう。

「エリスさま、行ってしまいましたね」

「あ、ニーナさん、今まで、どこに、行ってたんですか？」

え？ 一緒にいなかったのだったのか？ いやね、何でもニーナさんは、ニーナさんで仕事があつたらしくて、リリスさんに説教をくらった後は別行動してたんだよ。

「寂しいですか？ サイカさま」

「いえ、全然まったく」

一切、躊躇わず、そう言った俺に驚いたのか、ニーナさんは目をパチクリさせる。そこまで変なことを言ったかな？

「エリスさまには、サイカさまの今のお言葉は、黙っていることにいたします」

既に城門から撤退したと思っていたリリスさんが、なぜか俺の傍に残っていた。

「っ！？ 居たんですか？ 居たなら、声をかけてくださいよ！ リリスさん！」

「失礼いたしました」

まったく……心臓に悪いぞ。

「後、少しで、太陽が沈みます。城の門を閉めますので中に入ってください」

「はい、分かりました」

特に拒否する理由もなかったので、城の中にニーナさんと入る……あれ？ いつの間にか、ニーナさんが消えていた。

「あの……ニーナさんは？」

「はい？」

首を傾げるリリスさん。

「そういえば、居ませんね。専属メイドが主人から離れるとは……」

……これは後で仕置が必要ですね」

………今のリリースさんの言葉で、どことなく、エリス伯母さまを思いだししまった………やっぱり、この人………エリス伯母さまと性格がどことなく似てる………

「さて、寝るとするか」

あの後、結局、ニーナさんは俺の前に姿を現さなかった。どこに行っただらう？ ……まあ、もし、リリースさんに捕まってお説教中なら、ごめんなさい、と、ご愁傷様です。俺にはリリースさんを止める力はありません。

とりあえず、4歳のボディでは夜更かしするのは難しいので寝ることにする。

やっぱり、こここのベッドはハイム家の屋敷のベッドよりふかふかだ。ああ、ここでアリシアと寝たら………気持ち良いだろうな………

はっ！？

べ、別に性的な意味じゃないからな！ ただの添寝の話しだからな！

そんな馬鹿な思考をしている時だった。

「きゃあああああああああああああああああああああ」

突然、悲鳴が聞こえて来た。

この声は……シリカさん、22歳、独身のメイドさんだ。バストは79で、現代だったら、見惚れてしまうような大きさだが、ハルゲギニアでは結構平均的な大きさだ。それとも、俺が見て来たハルゲギニアの人たちが、たまたま、平均的に大きいのか？ まあ、そこは要研究だ。

そうそう、シリカさんの話しの途中だったな。顔は綺麗とは言えないが、可愛い系の人。内緒で俺にお菓子をくれる優しい人だ。

え？

何で知っているかって？ ……リリースさんを付け回した後……暇だったから……色々なメイドさんとイベントを起こすべく頑張ってきました。

何？

悪い？

4歳児がメイドさんに甘えるのは当然だ！ それが常識なはずだ！ 誰が文句を言おうと、俺は平民のメイドさんと、イチヤイチヤするぜ！

と、そんなことを考えるよりも、何が合った見に行こう。

その時だった。

『ガアアアアアアア！』

俺の部屋の扉を壊して、オーク鬼が二体現れた。そして、俺めがけて俺の体の大きさはあろうかという棍棒を振るってきた。

なんじゃらほい？

人間、予想を遥かに超えると、ポカン　と、してしまうものなんだな……

そして、俺に向かってくる棍棒……

『危ないですう、ますたー、カウンターですう』

ガキンツ、と俺の目の前で棍棒が弾かれる。

「エレン!？」

『はいですう。ごめんなさいですう……エレン、遊び疲れて寝っちやっついて……オーク鬼の侵入に気づけなかつたですう』

「いや、それよりも助けてくれて、ありがとう」

『はいですう』

『ガアアアアアアア！』

すっかり、倒した訳じゃないのに、存在を忘れていたオーク鬼が吠える。

危な、もし、叫ばずに、もう一回、攻撃を受けてたら殺されてた

かも……

とりあえず、魔法を使おうとした時だった。

「サイカさまっ！」

突然、見知った声が俺の部屋に響いた……

そこに立っていたのは……

立っていたのは……

リリースさんだった……

だけど……格好がその……

昼に見たメイド服のスカートは確かに長かったはずなのに、なぜか、ミニに変わっていて、腰にはナイフ、背中には大剣、左腕には銃、右手には槍を持っている。

これは、いわゆる……武装メイドさんでは、ないのでしょいか？
現実で見ると、萌えるよりも引くよ……何でメイド服を着る意味があるの？ 普通の服で良くない？ あれ？ 普通の服って何だったけ？ あ、そうか……メイド服が戦いの正装だったよね。
うん。

きつと、そうだ……

「サイカさまに手を出すとは……」

貴様等、殺す！

確かに、リリースさんが、そう言ったような気がします……メイドさんが殺す……怖い……怖いっすよ。本当に……色んな意味で。

そこから、片腕なのにリリースさんは、器用に銃でオーク鬼の頭を

……

そして、もう、片方の槍で、もう一体のオーク鬼の首を……

怖いです……この世界に来てエリス伯母さま、以上に怖いと思っ
たのは初めてです……

「サイカさま、大丈夫ですか？」

俺にリリースさんが微笑んでくれる……怖い……怖いっす。転
生して初めて平民さんが怖いと思いました……

「………はい」

「今より、サイカさまは、わたしが護衛いたしますので、ご安心を」

さらに、ニコリ。

「い、いや、いや、リリースさん、さっき、他のメイドさんから悲鳴
が聞こえてきました……だから、お願いします。彼女たちを助けに
行ってもらえませんか？ リリースさんに助けに行ってもらっている
間に俺は、ライナ伯父さまに現状が、どうなっているか、聞きに行
ってきます」

「………しかし」

「お願いします」

「………分かりました。サイカさまは、優しいのですね」

怖いだけです……

そう言つて、武装メイドさんは他の普通のメイドさんを、助けに行つてくれた。

うん、ああいう人のことを、メイジ殺し、というのだと俺は思った。

武装メイド属性……生で戦つて敵を……する所を見たら……トラウマだよ……

「きゃあああああああああああああああああああああああ」

突然、ライナがいた執務室にも、メイドの悲鳴が聞こえて来た。

「……これは」

ライナは杖をとると、扉の外にいる『敵』との距離を測る。

「エア―ハンマー」

そして魔法を放つ。それにより、扉は壊れ、相手の姿が

「まさか……君が？ サイカを……」

「あら、甥の心配？ 随分、余裕ですね」
「っ!？」

『敵』は、先ほどまで、扉の外にいたはずが、突然、ライナの耳元で『敵』が囁きかける。すぐに前方に飛び退く……

「何時の間にこの部屋に入ったんだい？」

「あら？ あなたほどのお方がお気づきにならなかったの？
のライナほどのお方が？」

悠然ゆうぜん

「質問したのは……僕だが？」

ライナは自分が出せる限りの殺気を『敵』にぶつける。

「ふふっ、優しい殺気ですね」

「君の目的は？」

「あら、質問ばかりなのです。まあ、答えてあげましょう。この城が欲しいんです。譲っていただけませんか？」

「……この城はエリスの血と涙の結晶だ。答えは決まっている」

「仕方ありませんわね。では、あの『殲滅』が帰って来る前に片づけさせてもらいましょう」

「まさか、君が領地内の亜人の襲撃を？」

「うん」

『敵』はライナに向かって手のひらを向ける。

「ん？」

「ばいばい」

次の瞬間、ライナは圧倒的な風に吹き飛ばされた。

「……怖い……」

『ほら、まずはー元気出してください……』

「だって……武装メイドさんが……オーク鬼の……顔を……

……首を……あああああああつ！」

『仕方のない……まずはーですね……緊急事態なので仕方ないです』

そう言っってエレンは何かを唱える？

え？ 何か俺のトラウマを和らげてくれる魔法でもあるの？

『魂の調律（チューニング・オブ・ソウル）』

……これって俺の黒歴史の……

「ふう、待たせたな。これからが、俺の時代だ」

いやあああああああ！

H a r e m 1 4 俺の吸血鬼騒動(前書き)

今さらですが、

この物語は可愛い子でハーレムを作りたい願望と中二病で8割でき
ています。

Harem 14 俺の吸血鬼騒動

「さて、俺も、この右腕の疼きを納めるために伯父上の元に行くとするか」

……違うからな。この訳の分からない亜人が現れるという状況の収集のために行くだけだからな。

分かっているとと思うけど、俺が神様からもらった能力は『幸運』だからな。

『ますたー、亜人の気配がどんどん、消えていきますですう』

……おそらく、某武装メイドさんが亜人を戦滅しているんだと思う……俺の目の前で亜人の首が飛ぶところは本当にトラウマだよ……あれを見て何も思わない人がいたら、軽く人間をやめてるよ……

はっ!?

もしかして、あのトラウマを他のメイドさんに植え付けているのでは!?

それなら俺は………無理です………あの人がいるところに行くける勇氣はないっす。

とりあえず俺の中二病の人格はライナ伯父さまの元に向かってるので様子を見てみることにしよう。

この状態の時はエレンの力で俺の体は強化されているから俺の普通の幼児ボディよりも力が強いからな。

俺がライナ伯父さまの執務室を目指していると、廊下を塞ぐよう

に三体のオーク鬼が立っていた。

「ふっ、我が覇道を阻もうとは、貴様！ 死ぬ覚悟は十分か!?」

……オーク鬼はそんな覚悟してないと思うぞ。

まあ、今は周りに誰もいな 俺のことは見てはいけないものを見てしまったような顔をしているメイドさんの姿が!? 単にオーク鬼に襲われて危機迫っているだけかもしれないけど。

とりあえず、メイドさんを観察する。確か名前はジェンダさん、体はフォーク家メイド隊の中ではスレンダー代表のような人だ。

銀色の髪が眩しいっす！ 15歳くらいの年上！

後々、仲良くなるうと思っていたメイドさんだったんだけど……

かなり、ひきつった顔しているよ……

杖の周りに大気の水を纏わせて剣を作り出す魔法

アクアソード
水剣でオー

ク鬼を斬り伏せる俺。

言っていることがまともなら、惚れるくらいカッコ良いはずなのに……

「あははは！ 亜人一（オーク鬼）がゴミのようだ」

その様子は痛い！ もの凄く痛い！

自分の笑顔が気持ち悪いと思わないといけない俺の気持ちにもなつてくれよ！

「ますたーはいつも、あんな感じですよお」

……俺のHPは残り45ですう。
ヒットポイント

『エレンの言葉遣いを真似しないでくださいですう』

そんな馬鹿なやりとりをしている間に、俺（中二病モード）はオク鬼を瞬殺している。相変わらず、痛いけど強い！？

「ふ、口ほどにもない。次は首を洗って掛かって来い」

首を洗って待っている、の派生系なのか？ まあ、俺の言動を、いちいち、相手をしていたら俺のライフがどんどん減るだけだから……無視しよう。

そして、俺（中二病モード時）がジエンダさんに気づいたようだ。

「大丈夫ですか？ マドモアゼル」

マドモアゼル？ って何語なんだろう？ というか、普通に考えて15歳のお姉さんに言うことじゃないだろう。

『あれは、ますたーの中にある言葉ですう。ますたーが知らなければ二重人格のますたーも知りませんからですう』

申し訳ありません。俺が馬鹿でした。

「い、いえ。大丈夫です。若さま」

ジエンダさんが顔を赤くする。

「いえ、お綺麗な婦人を助けるのは紳士（ジエントルマン）の義務ですから」

きりつ、と音声の流れてもおかしくないような俺の笑顔……

『キモいですぅ〜』

……お願いだから言わないで。

「あ、ありがとうございますっ！ 若さまに助けていただいたことは一生、忘れません！」

そんな馬鹿な態度の俺に感動したような視線を向けるジェンダさん……真顔で返されると……俺のHPがガリガリ削られていくんですけど……

『そういえば、この状態の時のますたーはフェロモンで女の人を虜にするんでしたね。鬼畜ですう。後々、女性が元に戻ったとき、あのカキの馬鹿な言葉に何で感激したんだろう？ と思うですう』

いやああああああ。

「本当なら、あなたを守る騎士ナイトでいたいのですが……わたしには使命がござます。申し訳ありませんが、わたしの帰りを待っていてくださいいますか？」

「ええ、若さまのお帰りを、ずっと待たせていただいております」

『後日——あはは、待つわけないでしょ、子供の遊びに付き合っただけだよ、と正気に戻ったジェンダは言うですう』

「では、行って参ります！」

「待っています！ 若さま」

『半日後まで』

……この頃、エレンが冷たいような気がします。

鬱になりかけている俺を余所に走る俺（中二病モード）。
そして、ついにライナ伯父さまの執務室の傍まで来る。……ライ
ナ伯父さまの執務室の前に誰か倒れている。……ライナ伯父さまだ！
「伯父上！」

ライナ伯父さまの元へ走る俺（中二病モード）。

「……サイカか……気をつけなさい……あいつはまだ……僕の執務
室にー」

「伯父上~~~~~」

なんか、ドラマみたいにあるような光景だけど……ライナ伯父さ
まは気絶しただけです。だって、メツチャ普通に呼吸してるもん。

「くっそ……伯父上を……伯父上の仇は俺が必ず……」

何か瞳に決意を宿す俺（中二病モード）。
もう一度、言つがライナ伯父さまは気絶しているだけです。

勢いよく執務室に入る俺。

そこにいたのは……

「はあ~~~~い、サイカさま、さっきぶり」

俺の専属メイドさんのニーナさんだった。

はあ？

意味が分からない。

「……ニーナ、どういうことだ？」

偉そうだな俺。

「あれ？　どういうことか、分からない？　あたしが、今のオーク鬼たちをけしかけている犯人よ」
「……なぜ？」

どうでも良いけど、某探偵アニメの犯人でも、もう少し本音を言わない、と思うぞ、ニーナさん。俺（中二病モード）は、まったく気にしていないようだけど。

「ん？　なぜ？　人間である、あなたが言うの？　人間である、あなたがつ！」

俺（中二病モード）の疑問の言葉を聞いた瞬間にニーナさんの雰囲気が変わった。

「あなたたちは、問答無用であたしたちを襲ってくる癖に！」

「……どういうことだ？　その叫びに、さすがの俺（中二病モード）も戸惑いを隠せない。」

『ますたー、あの人……おそらく』
「あたしは吸血鬼だ！」
「っ!？」

その一言で、だいたい分かった。

ロマリアの馬鹿共は人間以外の連中を見下す傾向が高い。その上、人間に友好的じゃない種族に対してはその土地を納める貴族の金を使って掃討作戦をしているとか……いらん火種を作りやがって……あの坊主共……いつか利用してやるかな。

「まさか……」

どうでも良いけど、その『驚きました！』ていう芝居かかったしやべり方やめてくんないかな？ ……そろそろ、色々な人が飽きてきてると思うよ。

「ええ、そうよ！ あたしが住んでいた森は何もしていないのに人間に襲われ焼き払われた」

「……………」

さすがに話が重いせいか、俺（中二病モード）も何も言えないよ。うだ。それか、これも芝居？

「あたしは、ひっそり暮らしていただけなのに……」

ニーナさんが怒る理由もよく分かる。俺だってハイム家の屋敷が焼き払われたりしたら激怒するもんな。

「だから、あたしは『エルフ』級のメイジと言われているエリスの首を手始めに人間たちに宣戦布告する！」

……ニーナさんの言葉を聞いた瞬間、俺の中に何とも言えない感覚が生まれた。エリス伯母さまを殺すだ……。

いや、一瞬でも修行のことは考えていないからな！

「確かに、人間が悪い。平和に住んでいた君の森を焼き払った。許されない行為だ」

俺（中二病モード）の言葉に満足げにするニーナさん。

「分かっているじゃない。あなたはモノ分かりが良いようだから特別に、あたしの特別にしてあげる」

「……それはありがたい、お話だな。……だが俺はグールになるのか？」

「ええ」

「もし、生まれたばかりなら、俺は君のグールになっていたかもしれない。だけど……今の俺には無理だ」

「……参考までに理由は？」

「俺は人間が好きなんだ」

「じゃあ、あなたを殺して、あたしの配下にするわ。あのエリスでも可愛い、可愛い甥を相手にしたら」

「俺は君と戦うつもりはない」

「はあ？」

「俺は違う意味で君の特別になりたい。俺は君が欲しいニーナ」

……え？

「俺のモノになれニーナ。俺は君を慰めるなどと大それたことは言わない。俺と共に生き、俺と共に歩んで行こう」

「あ、あたしより、遙かに生きていない人間風情が偉そうにっ！」

『注意です。ますたーのフェロモンは吸血鬼でも効くようですよ』
「俺は傲慢だ。だから君を手に入れたい」

「ちよ、ちよつと、あんた頭、大丈夫？ あたしは吸血鬼だよ？」

「愛には年齢も種族も関係ない。そこに愛さえあれば大丈夫だ」

やら『あなた』とか……

『普通のますたーもエリスさまの前では『わたし』だったりするの
です。たーの本質はきっちり受け継がれてるです。』

……そうですね（HP残量1）。

『ここで勝ってニーナさんをモノにしても三日後くらい経って正気
に戻った瞬間、「よくも、あたしの心を弄んだな！」と言ってます
たー殺されそうです。』

……

「ハイム家次期当主にして魔道書の正当後継者、サイカ・リ・ラ・
フォーエン・ジ・ハイム、押して参る！」

『ますたーって自分のことを魔道書の正当後継者とか思っていたん
ですね。通常のますたーも中二病です。』

ある意味……もう、どうでも良いです……

そこから、再び、アクアソードを作りだし、ニーナさんに斬りか
かる俺（中二病モード）。

それを軽やかなステップで避けるニーナさん。

さすがは吸血鬼。どれだけ痛くても身体能力にかけては大人以上
の状態になっている俺の杖を交わすなんて。
アクアソード

「その程度で、あたしを、も、モノにできるなんて思うなよ！」

顔を赤らめて言っても説得力ないですよ……

『デレ率68パーセントです。』

「まだまだ。水槍！」
アクアランス

杖に纏わせていた水の形を槍状ランスに変える。

「我に貫けぬモノなどない！ そなたの心ハートも砕いてみせよう！」

いや、普通に考えて砕いたらダメだと思っぞ。奪うものだろ。

「受けてみよ！ 我が心の愛を！」

そう言いながら、ランスをニーナさんの方向に突き出す。大気の水をどどん取り込んで槍の先を伸ばしていく。

普通、大気中の水を集めるなんて（チート連中以外）魔力を使いすぎて使えないだけだな……この状態は、ほとんど魔力無尽蔵だからな……というより、我ながら重い愛だな……

「受けて立とうじゃない！
ウインドランス 風槍！」

それに対してニーナさんは精霊魔法で作った風の槍で応戦する。

『はあああああー！』

二人の声が部屋中に木霊する。

こうなつては、もはや、吸血鬼として生きてきた経験など、まったく以て戦局に関係ない。

モノを言うのは、魔力量だ。

正直に言つてニーナさんが素直に力勝負に応じてくれたのは幸運としか言いようがない……

『違うですう。ますたーのフェロモンがニーナさんの思考力を奪っ

のに……俺、何しているんだろっ？

『馬鹿やっつていらるぢやっ』

H a r e m 1 4 俺の吸血鬼騒動(後書き)

4歳でトライアングル

やっちゃまった(;)!!

補足説明

幸運、詐欺師、ハーレム、この三つの解釈について、感想で質問される方が多かったので、ここに作者の解釈を書かせていただきます。

『幸運』

この能力を得ているので、お金持ちになって、甘やかされて、幸せに育っていく、と考えられている方がいらっしやるようですが作者の解釈は少し違っていきます。

例えば、現代で言いますと、宝くじを当ててお金持ちになることが、その人にとっての幸運なのでしょうが？

安い稼ぎしかないけれど、暖かな家族、信頼できる友人、優しい恋人を持っている人は、贅沢な暮らしはできませんが不幸なのでしょうが？

ただ、甘やかされて育つのは幸運なことなのでしょうが？

大人が心を鬼にして叱ってもらえることは不幸なことなのでしょうが？

物語で例をあげれば、シンデレラ。ヒロインは最終的にハッピーエンドとなります。彼女は初めから幸せではありませんでした。彼女は不幸だったのでしょうか？ 彼女はああいう境遇だったからこそ、偶然にも色々な方の力を借りることができ、王子に見初められることができた、これは幸運ではないのでしょうか？ それとも不幸なことなのでしょうが？

作者の解釈としては、この『幸運』という能力は必ずしも、主人公に楽をさせる能力ではなく、主人公を成長させるために試練を与えたり、時には偶然、主人公を助けたりする能力だと思っています。

そもそも、幸運のおかげで〜できた、という記述がないから、
とって、作者の中では価値のない能力ではありません。

現に幸運的にも、サイカはゼロ魔の世界に転生し、魔道書を得て、
優しい家族を得ています。

これを、わざわざ、幸運のおかげで〜できた。とは、あまり連
発して書きたくないので書いていないだけで、幸運の能力は確かに
発動しています。傍から見れば作者が使いこなせていないように見
えるかもしれませんが。

『詐欺師』

プロローグの最後に職業、詐欺師と書かせていただいております
ので、女の子を詐欺的なことで落としていたり、色々な策略を常
に行う。というお話を期待されたかもしれませんが、現在、本編は
幼少期編です。

作者が主人公をトライアングルメイジにしたり、色々、やってし
まっている部分もありますが、そもそも4歳児がどれだけ言葉巧み
でも、年上の平民さんを落とすことなど、ほとんど不可能だと思っ
たのでやっていません。

4歳児を恋愛対象として見れる大人は、一部の趣味の方以外は難
しいのでは？ という思想の元で、行っています。

謀略などに関しましては、先ほどと同様に、誰が4歳児の言葉を

信じるのでしょうか？ 確かに文字を習う、街を綺麗にするなどの行為を行っておりますが、それはあくまで親馬鹿な父親が子供が珍しくまともな意見をだし、なおかつ、自分もそれが有効的だ、と判断したからできただけであって、誰でも弱小貴族の子供を信じる訳ではありません。詐欺師にしても最小限の信頼がなければ何もできません。

昨今、色々なドラマや漫画で格好いい詐欺師が、流行っているのは知っていますが、そもそも詐欺師とは、作者の中では色々な人間がいて、ドラマや漫画の格好いい人間だけが詐欺師だとは思っておりません。

少しネタバレになります。普段は気弱で馬鹿で家族思いの良い子、だけれども、きっちりやる時はやる、そんな詐欺師がいてもいいんじゃないでしょうか？

そもそも、詐欺師とはドラマや漫画のような格好いい人たちのことだけではなく、弱い人間からお金を巻き上げたりする人たちのことも指しますし（主人公の前世は違いますが）。

そのような理由から物語の初期である、この段階で謀略を張り巡らせて相手を陥れることは、幼少期編では行いません。複線として張らせていただいておりますが。

『ハーレム』

これにつきましては、あらすじにも書かせていただいておりますが、この物語は題名にある『俺に優しい平民ハーレム』は、すぐには作られません。

あらすじにも書かせていただいている通り、主人公が色々なこと

をして、その先に不本意な形でのハーレムが待ち受けている……だけれども欲望に忠実な主人公がどうにかして『自分に優しいハーレム』を作ろうと頑張るコメディ的なお話です。

なお、この補足説明は prologue の、あとがきにも書かせていただいておりますので、次話掲載時、削除させていただきます。

Harem 15 俺の旅立ち

テーブルの上には一枚の手紙が置かれていた。
そう、いた。

先ほどまで、テーブルにあった手紙は今、ある人物の手に握られている。

彼女の名前は

「エリス、興奮してはいけないよ。今、君が暴れば僕と君の長年の夢に、もしものことがあったら」

「……………分かっていきます！」

手紙の内容を見て眉をピクピクさせるほど怒った様子のエリスだったが、夫の言葉で何とか怒りを抑え、手紙の続きを読み出す。

「しかし……………本当に不思議な子だったね」

窓の外を見て、思いふける夫を横目で確認しながらも、お腹を手で撫でる。

「……………あの子は、馬鹿なフリをしているようでしたが……………気づかない者はハイム家にもフォーク家にもいませんでしたよ」

「はは、だから不思議だと言っているんだよ。わざと道化を演じるなんて並大抵の精神力の人間にはできないからね。子供にできることではないよ」

「……………仮定の話ですが……………もしかしたら、その道化が、あの子の本心だったのかもしれませんが。優秀すぎるが故に」
「そうかもしれないね」

一度、会話を切って紅茶を飲む夫の姿を確認して気づく、彼が共犯であることを。

「聞くのは無粋と言うものですね」

「ん？ 何か言ったかい？」

「いえ、何でもありませんよ。しかし、我ながら4歳の時点でトライアングルメイジに覚醒させてしまったのは、わたしの不注意でした」

「そうだね……僕の研究が正しければ、メイジのランクが上がる時、必ずと言っていいほど心を震わせる必要がある。それに失敗すれば、精神を破壊してしまうかもしれないからね」

自分で書いた本のページを、ぱらぱらとめくる夫は、どこか自分を安心させてくれる。その安心がエリスには心地よい。彼と一緒になった一番の理由だった。

「ええ。復讐のために心を震わせて、トライアングルに昇格した者は……復讐が終わると……廃人になってしまいましたからね」

古き友人を思い出すように、今までのように言葉に早さはない。

「文字、文字、ゆっくりと言葉を噛みしめているようだった。」

「ああ、怒りや悲しみと言った、大きな力で無理矢理、本人の許容できる限界を越えてしまえば、元には戻れなくなる……」

「その点、あの子の成長の仕方は幸運としか言えないでしょうか？」

無理なく自分に沿った形での成長。人よりも遙かに速い成長だけれども。

「ああ」

隣に立っているメイド長に夫がデレデレしながら紅茶のお代わりをもらっているのに少し嫉妬しながらも手紙を読み続ける。

最後の一言まで、きっちり読み、理解した後、ため息をつく。

「あの子には、わたしがあの子に厳しくしていた理由も筒抜けだったようですね」

「手紙に書いてあったのかい？」

「いえ、わたしの女の勘がそう言っています」

「僕も男の勘がそう告げてくるよ。妹は生まれた時より体が弱かった」

突然、話題を変えた夫に怒ることなく

「ええ」

肯定の言葉を返す。

「しかし、一度だけでも子供は産める。だから大丈夫 だけど、自分には、それができない。自分は究極の欠陥品だ。わたしは生まれてこなかった方が良かった」

「……」

「何度も聞いた言葉。何度も泣いたね」

「……ええ」

「絶望した時、妹に男の子が生まれた。たった一人しか生めないのに幸運的にも。将来的に、その子の子供をフォーク家に迎入れ、継いでもらえる。これに僕たちは歓喜した」

「……ですが、あの子はわたしたちの予想を大きく飛び越えていました」

妻の言葉にゆっくりとしかし、力強く頷く。

「妹を治し、何も言わず、きちんとしたメイジに貴族になって欲しいと思ひ厳しくしていた伯母の体の欠陥さえも治してしまった」
「今にして思えば、わたしも、あの時は冷静ではなかったのでしょう。アーシアが育てれば、典型的なわがまま貴族になってしまう、と予想して、あのようになんて厳しくしてしまった」
「あの子が賢い子だったから、それが余計に君を厳しくさせたんだっただね」

無言で席を立ち、ライナが先ほどまで見ていた窓をのぞき込む。

そこには案の定

「……………ありがとう、あなたにはいくら感謝してもしきれません。あなたにもらった、この機会チャンス。無駄にはしません」
「ふふ、サイカに言われた通りに演技したつもりだったんだけどな」
「わたしにバレることも考慮しているでしょう。あの子は」
「そうだね」
「ええ。旅立つ、あの子に神の祝福がありますように」

「よし、城からの脱出完了だ！」

「はあ、何で旅をするだけで、こんなに大変なのよ……本当何でこんな奴と一緒に生きていくって決めたんだろう、あたし」

「ええ！？ ニーナ、それは酷くないか！？ 俺の目標は平民ハ-

レムだから、吸血鬼であるニーナは別にいら

「それ以上、言ったら殺しますよ、ご主人様あ

このやりとりも、あの日から何度交わされたか分からない。

あの日、つまりはニーナと俺（中二病モード）が戦った日。

その後、ニーナは俺と共に生きるため本当に俺の専属メイドになった。幸運としか言いようがないんだけど、何でもニーナの吸血鬼の一族は『自分が認めた相手』の血しか飲まないらしい。

故に、人間と契約を結び、その人間に尽くすことで対価として血を受け取るらしい。ニーナの一族は絶対に血を接種しなければいけない、と言うわけではないので、そういうルールがあるらしい。

それに何とかって、吸血鬼だから、太陽の下も歩けるし、ニンニクも食べれるらしい。

そうそう、あの時、幸いなことにニーナがしかけた亜人によって殺された者は誰もいなかった……リリスさんが頑張ってくれたみたいです……

実質的な被害が物が壊された程度なので……俺のメイドになることをエリス伯母さまも許してくれた。まあ、物凄く色々なことがあったのは言うまでもないが。その色々なことは話し出すときりがないので今は話さない方向で。

正直に言えば、契約をなかったことにしない？ と持ちかけたこともあるんだけど、さっきみたいに『人間を襲いまくりますよ。死

人が出たら、ご主人様のせいですね』とメツチャ良い笑顔で言われた。

ちなみに……ニーナの実力はエリス伯母さまに匹敵する……

あの時、勝てたのは……単に力勝負だったから。経験というアドバンテージがある分、今、戦ったら、まったく勝てない。

敵に回すよりも味方にした方が良い、という考えがエリス伯母さまにあったのは言うまでもない……

まあ、一応、ニーナのことはハイム家とフォーク家の中だけの秘密なのでバレる心配はない。

ちなみに、周りには、俺が平民の専属メイドに手を出し無理矢理、妾にしたことになっている。平民の妾のため、屋敷ではメイドとして働かせて人前に出さないようにしている　という設定でロマリアを欺いている。

そんなので、騙せる訳ないだろ？　だって。

いや、それが結構、騙せるんだよ。だって……5人貴族がいたら3人はやっているから。木の葉を隠すなら森の中だ。ハルゲギニアの貴族は外面ばかり気にするからな。

「それにしても、人間が成長するのは早いね」

どこか遠い目をしながら、ニーナは呟く。

そう、俺は今、13歳だったりする。

……9年、長かった。もの凄く。エリス伯母さまのしごきに耐えながら、ハイム家の屋敷とフォーク家の城を往復する毎日。

それから解放されるために俺は旅に出る、という手段を選んだ。13歳になれば構わない、と乳上と伯父さまに許可をとったのだ。もちろん、絶対に死なないことが条件だけだ。

唯一、旅に出る前にやり残したことがあるとすれば、一度、フォーク家の城に連行された、その時から、アリシアと、ほとんど会え

なくなってしまったのが……

なぜか、俺と会うと顔を赤くして逃げたり、俺がハイム家の屋敷にいる間は実家に帰省していて、フォーク家の城にいる時に仕事しているとかが、ほとんどだ……

アリシア……アリシア……お話したいよ……お兄さんのこと嫌いになったのかよ……お兄さんはこんなにアリシアのこと大好きなのに……

「はあ、情けない顔をしないでよ、あんたは一応、あたしのご主人なんだから」

「うう〜だって、平民さんと仲良く……というよりアリシアと……」

「ああ、あの子なら大丈夫」

「何で分かるのさ……もしかして、お兄さんに内緒で男を作ったのか!? そうなのか!? お兄さんは許さないぞ! アリシアはお兄さんのものだぞ!」

「だから、うるさく言わなくなつて、あの子はあんたにぞっこんだよ!」

「何で分かるのさ!」

ギロツ

視線で人が殺せるというのは、今のニーナの視線だと思う。

「うるさい!」

「分かりました」

『ますたーは、いくつになっても、ますたーのままですね』

今まで無言を貫いていたエレンが、馬鹿にしてくる。

……言い返せない自分が辛い。

「それで、腹はくくれたの？」

「……………ああ」

「はあ、いい加減、少し男らしくなつてよ」

ニーナが呆れている。

……………だけど仕方ないじゃん！ 本当は、もつと悠々自適な旅をする、つもりだったのに……………どっかの馬鹿妖精が『エレン、行きたいところがあるですよ！ 旅に出るなら寄ってくださいですよ！』と人の耳元で毎晩、毎晩、騒ぎやがったから渋々、了解しただけだし……………本当はタルブあたりで……………黒髪平民さんをゲットする予定だったのに。

まあ、しかし……………決まったことは仕方ない……………

「行くとするか、砂漠に！」

「それで良いの男は決断力がないとモテないよ」

そんな無駄口を叩きながら俺は生きたくない死亡フラグ満載の土地に近づいて行くのだった。

どうせ……………死亡フラグが立つのなら……………俺はできる限り、その死亡フラグさえも利用してやるぜ！

ニーナという吸血鬼がいるが、ニーナはあくまでメイドだからな！ 俺はまだ『俺に優しい平民ハーレム』の夢は捨ててないぞ！

H a r e m 1 6 俺の関所突破（前書き）

時々、思いついたようにある 真面目？ パートです。

Harem 16 俺の関所突破

「ここが……砂漠……」

凄い……見渡す限り、砂、砂、砂。

まあ、当たり前なんだけど。

「それにしても半日で、ここまで着けるなんて、サイカも成長したね。昔だったら、あたしのスピードに全然、着いてこれなかったのに」

ニーナが昔を思い出したように、そう言ってくる。

どういふことかと言うと、基本的にニーナは吸血鬼のため身体能力が凄い。もちろん体力も、だから移動は必然的に時間短縮のため走る。

普通の人間なら絶対に着いていけないのだけど、俺も、この9年間の修行により、それなりの魔力を手に入れたのでエレンの力を借りればギリギリニーナが走る速度に着いていける速度で走れるくらいには肉体強化が魔法でできる。

昔はニーナが俺を鍛えるためにした、ランニングでニーナに全然着いていけなかったからな……

というより、あれはランニングじゃない……だって後ろからリリスさんが刀を携えて迫ってくるんだもん……

「そついえば、どうして、あんなスラスラと言葉が出てくるの？ 普通は対処できないでしょ」

おそらく、ニーナが言っているのはフォーク領からガリア国境付近まで一時間足らずで移動した時のことだろう。

何があつたかと言うと

「おい、貴様、名を名乗れ」

そう俺に声をかけたのは関所に勤めているであろう若い鎧を着た騎士風の男だった。

あくまで騎士風の男。こんな戦略的に何の価値もない関所に騎士がいるはずがない。

このハルゲギニアでは、基本的に関所という考え方が、あまりない。

一応、国境の重要箇所についてはきちんと要塞化した関所がきちんとあるが戦略上、あまり重要性がないところは基本的に簡単なものしかない。簡単なモノさえないところもあるし。

だって、色々と整備されていない森などの抜け道を通ればいくらかでも密入国できるから。それも、関所を維持するのにも、それなりの金がかかるし。

きちんと関所を通る者がいるとすれば貴族、坊さん、商人くらいものだから。お坊さんがお金を払うかは皆さんのご想像にお任せします。

そして、そんな関所に子供とメイドが二人で着たら誰だって不振

に思のは当たり前だ。

だけど、目の前の男は分かりやすすぎると思うぞ。

「トリステインに所属する貴族、名をサイカ・アーシユド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムだ」

俺のような子供が敬語を使わずに名乗ったことに目の前の騎士風の男は苛ついている様子だ。

馬鹿だな、そんなに感情を見せるなよ。仮にも金をとろうとしている人間が。

「知らないな、事前に早馬が来ていないどころか、馬車すらない。この状況で、どうやって信じると？」

確かに男の言い分も最も、だ。

だけど、馬車なんかで移動したら、金がかかるだろう？ 今更だけど、俺は貴族だけど、そこまで自由に使える金がある訳じゃない。

そりゃあ、自分で作った水の秘薬を売って多少は儲けているけど、それはあくまで今後のためにしたことだから、ほとんど儲けがない。だから、俺は金を持っていないんだ……ぐすん……金のない俺のところになんて……平民さんも来てくれないよね……

まあ、今は、そんなことは良い……良くはないけど忘れよう……関所を、どう通るかが問題だからな。不法入国しても良かったけど、後々、ガリアの首都なんかも回る予定だから、不法入国がバレて、賠償問題になれば、それこそ関所にかかる値段とは比べ物にならない。

だから、お金を普通に払って関所を通ることにしたんだ。

「俺は見聞を広めるための旅の最中で、長期の旅になるため現地で調達しようと考えているだけだ」

もちろん、そんなことはしないけど、少なくとも、馬車を買えるだけの金を持っています！ というアピール。

「ほづ……」

男の目は金を持っている、と聞いた時点で変わった。

もちろん、ヘコヘコするような感じじゃない。どうやって金を巻き上げてやるのか？ と考えている目だ。

はあ、たぶん、没落した貴族の次男とかなのだろう。こつこつ交渉に明らかに向いていない。

昨今、ガリアでは前王が死去、ジョゼフがついに王になった。そのため、シャルル派の貴族は粛正されるか、没落した。

それにしてもシャルル派って……何を考えていたんだろう……

例え、本当にジョゼフが無能だった場合でも、普通に考えて王に反旗を向けたりしたら前王に従い、前王に忠誠を誓っている騎士たちが動くに決まっているのに。

ジョゼフに忠誠はなくとも、前王にはあるのだから、余程のことがなければジョゼフ側につくだろうに。

シャルルがどう殺されたのか、とかいうことはトリスティンには伝わってきていない。だけど、まあ、死んだことくらいは諜報部が掴んだ。もちろん、ハイム家ではなく、フォーク家の。フォーク家もガリアとの国境付近に位置する訳だから。

国境にある領地という点を考えればガリア側の国境にいる、この騎士風の男は馬鹿だな。

普通に考えてハイム家の名前すら知らないとは。仮にもハイム家はトリスティン側の国境の領地なのに。

「そうか。しかし、なあ〜。俺たちはおまえが本当に貴族か判別がつかない。だって、おまえ馬車に乗ってないんだもん」

急におどけた様子になる男。

突然、後ろから突風が！？ 絶対に二ーナだよ！

振り返ると……二ーナの目が『こいつ、うざい、殺す』って言うているんだもん……急いで止める。

危なかった……一歩、間違えればガリアに入る前からお尋ねものだった……

「誰であろう、と税が変わるわけではないのではないか？ それに俺は通行税の中で最も高い貴族の通行税を払うって言っているんだぞ？」

「はあ？ 身分が分からない者を国に入れないために関所があるんだよ。そんなことも知らないのか？」

……我慢。

「俺としては、そんなことを言われても仕方ない。おまえたちがハイム家の家紋を知らない方が悪い。税は払うから通してくれ」

「ダメだって、言っているだろうが」

こいつは目を細めて俺を威嚇している、つもりなのだろうか？

正直に言って優しい平民メイドさんに威嚇されたら傷つくけど、こ

んなむさ苦しい男に威嚇されても何とも思えないぞ。

だって、エリス伯母さまより遙かに殺気籠もってないし。

「そうだな〜。4割増か、そのメイドを置いていけば許してやるよ。それにおまえのようなガキじゃなくて俺に奉仕した方がメイドも気持ちよいだろう」

男がゲラゲラ笑った、その瞬間、風が痛かった。

やばい！ ニーナが目の前の男を風で殺そうとしているって！

エレン！ 頼む、ちょっとニーナを抑えて俺は、その間に閨所を通れるようにするから！

こっぴつ時、頭の中で話ができるエレンは頼りになよな……

『分かったですう』

というより……こいつ、俺の仲間であるニーナに手をだそうとしたのか？

……やべ……ちょっと切れてきた……苛めてやるか……

「どうした？ 迷っているのか？ 俺としては、このまま、お帰りになってくれても構わないんだけどな〜」

明らかに俺を挑発するでもなく、追い打ちにもなっていない。

本当に没落した貴族の次男あたりの線が強くなってきた。長男だつたら、ある程度、交渉事に強いだろう。それとも他国の貴族に喧嘩売つたらダメだと教育されてないのか？

……とりあえず、苛めよう俺の仲間の手を出そうとしたんだから

「それは俺の旅を否定する、ということか？」

「関所の規則だから仕方ないだろう？」

「関所の規則ということはガリアの意向ということか？」

「そうなるな。本当にトリスティンの貴族ならガリアと事は起こしたくないだろう？」

ゲラゲラ笑っている男。完全にトリスティンを格下に見ているんだろう。まあ、普通に考えて下なんだけど。

こんなことをしている奴に言われるとムカつく。

まあ、言質はとれたから、チェックかな？

「実はこういう物を持っているんです」

懐から、一枚の紙を取り出す。

それを開けて見せた瞬間に、男の顔の血の気退いていく。

だって俺が見せたのは

「ロマリアの旅の承認……」

そう、ロマリアの坊さんに旅を認めてもらった証。

いや〜普段から、寄付は一杯しているんだから、こういう時に役に立ってもらわないと、主に俺のガリアで平民さんゲットのために。

このロマリアの承認というのは、俺の旅を推奨してもらっている

だけなんだけど、俺の旅を邪魔する者にとっては最悪の代物だ。

だって、ロマリアが承認している旅を認めないということは、ロマリア、強いては始祖を侮辱する行為だからな。

ロマリアの坊さんには、『お願いします。始祖さまの偉大さを調べて回りたいのです！』と真摯にお願いしたらもらえたよ。

さつきも言った通り、寄付一杯しているんだから、これくらいもらえないとね。

「あなたは始祖さまに認められた、この旅を認めない。いや、ガリアは認めないのでですね。これはすぐに早馬でハイム領にいる神官さまに伝えないと……」

あたかも、大変なことになった、というアピール。

急に敬語になったのは、タメ語から敬語に変えたことで相手を威圧するため。

自分が追い込まれた状態で、自分を追いつめた相手が急によそよそしくなったら焦るだろ？

と、いうより、あからさま怒っているのに敬語を使ってくる相手は怖いだろ？

「ちなみに、ハイム領はガリアとの国境に面しているトリスティン領ですので、すぐにガリアに抗議文が送られるでしょう」

そうなれば、目の前の男は異端の徒としてガリアから追放、さらにロマリアから追われる最悪の状況に置かれる。

そこで俺の隠していた殺気を表に出して、あんたは俺より弱い、ということを目覚めさせる。

ちなみに杖を出すのも忘れない。

普通にきちんと仕事をする人だったら、普通にお金払うつもりだったよ！ 本当だよ！ ついでに関所のお姉さんが綺麗な人だったら、そのまま……げふん、げふん。何でもないです。

やっと完全に状況が完全に読み込めたのか、男は顔を真っ青にして倒れそうになる。

チエックメイトだな。

「旅を認めてもらえますか？」

「あ、ああ。認める。認めるから！」

「分かっていますよ。だから、早く通行許可所を2枚持ってきてください」

「ああ！」

よし、苛めるついでに無料でガリアに入れた！

と、いつやりとりがあったのだ。

「というより、いつの間に、そんな許可所を手に入れたの？」

「ハイム領にいる神官なら案外簡単にとれたんだ。だって、そもそも

もハイム家は始祖の本を預かっている訳だから、ロマリアとそれなりに交渉ができるんだ。そんな面倒な家が納める領地に来る神官といたら、普通に本当に信仰している人だけ。金の亡者なんかは好き勝手できる領地に言った方が楽だもん」
「確かに……」

ハイム家が完全に没落しなかった理由もこれなんだけど。

まあ、その話は、また今度。

「さて……メツチャ不本意だけど行くとするか……」

「急にテンションが下がったわね」

「……だって誰が好き好んで死亡フラグ立てるの？」

「ここにいる、ご主人さま」

はあ、ため息しかでない……

「それにしても皮肉だね。始祖ブリミルが推奨する旅の本当の目的が『エルフ』との接触なんだから」

ニーナのその言葉で、さらに重くなる足を嫌々、進めるの俺だった……

Harem17 俺のヒロインとの出会い

「はあ……」

「ちよっと、何回、ため息をついてるの？ 腹はくくっただって言うてたじゃない」

「腹はくくっっても嫌なものは嫌なんです」

どうも、元気が出ない俺です。

「それで、エレン」

『何ですかあ？ ニーナさん』

「後、どれくらいで、あんたの目的地に着くの？」

『うっっん、この近くにももの凄く大きな力の塊があつてですね。よく分からないですうっっでも、こっちの方向にあることは確かです』

そもそも、この俺が超不本意な旅の目的はエルフに接触したい、というエレンの要望を叶えるためのものだ。

なんで接触したいのかは教えてくれないのに……行ってきかないんだ……

ちなみに、エレンはマスターである俺から離れられないので俺が同行しているんだ……

平民さん成分が……

そんなことを考えながら灼熱の太陽が降り注ぐ、砂漠を歩いていたらフードを被った集団が俺たちの視界に入ってきた。

おお！？　もしかして、あれは俺の幸運に引き寄せられた平民さん！？　でも、男だったらクーリングオフだよ！　あくまで、女子限定！

というか、あちらさんが、こちらに気づいた瞬間からメツチャコつちを凝視してる！　もしかして、これは俺にもついに春が！？

ぞろぞろ、と列を成しながら俺たちの方に寄ってくる……ついに春が……

「馬鹿やってないで、杖を抜け」

バコツ、と音がしそうな程、大きな音が脳天に鳴り響く。

「ニーナ、大丈夫だよ。あれはちょっとだけ、お耳が長いだけで俺のハーレムに入りたい、と思ってる平民さんだよ」

「……あんだ……ついに……ダメになっただ……」

何か、ニーナが可哀想な者を見るような目で見てくる。

「……分かってるよ！　あれはエルフの集団でしょ！　分かっているから、そんな目をしないで！」

「……分かった。それなら、きちんと交渉してきなさい」

「はいっ！」

とりあえず、俺はニーナに可哀想な子みたいに見られる視線を受けない代わりにエルフとの交渉をすることになった。

っ！？

しまった、何気に面倒を押しつけられた!?

……まあ、どっちにしろ。ニーナは交渉には向かな

「うるさい!」

頭に空気の塊が直撃!?

『ますたーはいつも馬鹿ですね。少しは、でりかしーを学んでくださいです』

「……了解です」

というより、これが、デリカシーなのか分からないけど……

「うるさい!」

仕方ないので、この不詳サイカ、行って参ります……

と、向こうも集団から一人、こちらに向かってきた。

あのエルフが交渉人と見て間違いないだろう。

「蛮族の子よ、この地に何用得参った?」

そう言いながらフードをとるエルフ。

メツチャ美少年風……モテそうな奴は嫌いだ。しかし、こいつの顔、どこかで見たことあるんだけど……

「俺の名前は、サイカ・アーシユド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムです。この度は大切な用があり参上しました」

「我々は蛮族の子に用などない。帰れ」

「はい、分かりました」

『何を簡単に説得されているんだよ!』

エレンとニーナに同時に、つっこまれた。

え？

だって、向こうが帰れって言うているんだから、帰るのは当たり前でしょ？

不法侵入は犯罪だよ。っていうか、一回、転生前に住んでた家のガレージに酔っぱらった、おっさんが入って来た時はトラウマものだったよ。

自分が嫌なことは相手にしたくないです、はい。

「とりあえず、もう少し、頑張れ!」

ニーナにそう言われて、渋々、もう少し交渉を開始する。

「あの〜〜どうしてもダメですか?」

「ああ」

「ほんのちよっとでも?」

「ああ」

「無理だったわ。帰ろ」

『ちよっとは頑張れ!』

再び、エレンとニーナにつっこまれて美少年に向き合う。

「俺、普通の人間じゃないんです。それでもダメ?」

「ほづ……どう違うと言うのだ?」

あ、ちょっと興味を持ってくれたみたいだ。後、もうちょっとだけ頑張れば、エレンもニーナも許してくれるだろう。

とりあえず

「アクアソード」

杖の周りに大気中の水の纏わせて剣を作り出す魔法なんだけど。

「っ！？」

美少年エルフさん、驚いているよ。

「貴様、蛮族の子の癖に、なぜ、精霊魔法を使う！？」

「祖先がエルフと仲良しだったもので、その時、教えてもらったらしいです」

「……精霊が認めている者に名のらなかった非礼を詫びよう、わたしの名前はビダーシャル。老評議会の議員を務めている」
「っ！？」

今度はこっちが驚く番だった。

出たよ！ ついに原作キャラ！ え？ 子供の時にパーティーと
か出て原作キャラに接触しなかったって？

だって、あんな死亡フラグ立てまくりの連中に関わりたくないし。
出なかったよ。

呼ばれたパーティーも「エリス伯母さまの修行しうぎょうがありますので」
と言ったら、来なくてもいいです、という返事をもらえたよ。

「改めて、問おう。汝はなぜ、この地に足を踏み入れた？」

「いや、その、あの用事があって」

「その用事とは？」

「もういいです。ますたー、どうせ、今、どうやってら帰れるかな？ とか考えながら交渉してたでしょ。エレンが直接、話をするです。」

珍しく、エレンが俺以外の人間に姿を見せた。

え？ 今回ってエレンが姿を見せるほど重要イベントだったの？

「っ！？」

ビダーシャルさんは、驚きました！ という顔をしてひざまずく。

え？

「『大いなる意志』の使いである妖精さまに会えるとは、このビダーシャル感激です」

顔を真っ赤に染めてエレンにひざまずく、てか……もしかして、エレンに発情しているのか？

っ！？

エルフはエロフだったのか！？ エレンのような小さな子に発情するとは、なかなかだな！ エロフだと思つと急にビダーシャルにも親近感が持つて来た。

エルフは死亡フラグ。会いたくない。

でもエロフは友達！ 友達には会いたい。

「エレンはエレンの本体が封印されている所に行きたいのです。案内してくれますかあ？」

「はっ。その大役、この身が滅びようと全うさせていただきます」

スゲエ！ 惚れた女のためなら、そこまで！？

はっ！？

そうか分かったぞ！ ご褒美が欲しいのか！？ エロフ、おそろべし……もしかして、罵りたいのかな？ それとも、ツンデレプレイ？ エレンは小さいからロリプレイとか！？

そうこうしている内に他のエロフまでやって来て、顔を真っ赤に、あるいは涙を流してひざまずくエロフまでいる。

女のエルフまで、顔を赤くしているよ！

まさか、エロフは全員、ロリッ子好き集団なのか！？ 争いを好まないのも、もしかして、戦争なんかがあると子供の出産率が低下してロリッ子が減少するからなのか！？

また、新しい事実を発見してしまったぜ……

「んな、訳ないでしょ」

ボコツ、とまた軽快な音を立てる俺の頭。

ニーナの拳は痛いっす。

あれから、なんやらエロフの皆さんに「妖精さまをここまで送ってくださって、ありがとうございます」とか言われてメッチャ歓迎されました。

エルフの一番大きな集落であるネフテス？　つてところに着くまでに4回も「喉は乾いておりますか？」「お腹は減っておりますか？」と女のエロフさんに甲斐甲斐しく世話をしてもらった。

俺がエロフさんに世話をやいてもらっている間、終始、ニーナが不機嫌だったのは、なぜだろう？

「ここが、我らの集落であるネフテスです。エレインさま」

ビダーシャルが俺たちよりも前にいるエレンに説明している。あ、ちなみに、忘れていたかもしれないけど、エレンの本名ってエレインだから。

しかし……

「ニーナ、俺の見間違いじゃなかったら、何か、普通の街みたいなんだけど、ボヤケて見えるんだけど」

「はあ、あんたは…… エレンが旅立つ前にエルフの集落は、魔道書にもある、光の曲げて、そこにはないように見せる魔法と、そこにあるのに認識できないようにする魔法を使って普通の人間が近づけないようにしているって言うてたでしょ？」

「あ、そっか」

そして、皆がゆっくり、街に入っていく、と

「精霊さま」「お会いできて光栄です」「凄いです……」「わしや、これでいつ死んでも思い残すことはない」などと言ってエレンを見ると膝を曲げて臣下の礼をとる。

さすが……エロフ……あんな爺さんまでエレンに発情するのか……

それも俺たちを先導しているエロフさんたちも、どこか誇らしげだ……

ちなみに、エロフさんたちは俺とニーナさんに目もくれない……なんか寂しいぞ。

「なあ、ニーナ」

「何？」

「俺たちつて、一緒に来る意味あったのかな？」

「エレンはあんたから離れられないんだから仕方ないでしょ？ あたしはあんたの護衛よ。護衛」

そして、街の大通りを抜けて、大きな建物の中に入ると爺さんのエロフたちが整列して膝をついている。

さすがはエロフだな。

「妖精さま、この度はどのようなご用件で、こちらに参られましたのかな？」

いつの間にか、ビダーシャルたちも俺たちから離れて老人たちの後ろで膝をついている。俺とニーナは完全無視？ 若干、悲しいぞ

……

「ええ。来るべき崩壊に向けて、エレンも本当の姿に戻ろうと思うです。エレンの本体が眠る、水晶の所に案内して欲しいです」「な！？」

エレンの言葉を聞いて皆、驚く。

来るべき崩壊って……大陸がアルビオン大陸のように浮かんでしまっことを言っているのかな？

と、それよりも今、エレンが言った本体って何？ エレンって本体じゃなかったの？

「……来るべき、崩壊とは……」

おずおず、とエレンに質問する、代表みたいな人。

「それは後で話すです。とりあえず本体に戻るのが先決です」「はっ」

そう言っって、どこかに移動し始める一行。

「ほら、行くよ」

「あ、うん」

ニーナに言われて一行に着いて行こうとした時

「ここに、なぜ、蛮族の子がいるのだ？」

ふと、エロフの誰かが呟いた。

……また、この展開か……誰かが妖精さまを連れて来てくださった方です、と誰かが言っていて終わりだろう。

「ますたーはエレンのますたーですう」

しかし、エレンの言葉で場の空気が凍る。

「……まさか……『大いなる意志』の使いである妖精を……蛮族が使役するだ！？」

え？

今更だけど、エレンって天使のような感じの扱いなの？

「なんとという侮辱！」

俺に向かってエロフもといエルフたちが殺気を向けてくる……やばい……

と思つた時

「あたしのご主人さまに手を出すなら、許さないわよ」

ニーナが牙を見せながら、前に出た！？

やめて、ニーナが出ていったら余計、話がややこしくなるから！

「……あ、あいつは……『夜の女王』！？」

……なに、その中二病的な名前。

「へえ、あたしのことを知っているんだ」

え？

ニーナは少し誇らしげだ。

「他の吸血鬼を遙かに超越する力を持ちつつも森に引きこもっていた奴がなぜ……」

……ニーナって、そんなに強かったんだ。通りで、初戦以降の模擬戦でかすり傷一つ、つけられない訳だ。

「やめてくださいですう！ エレンはエレンの意志でますたーの下僕になったですう！」

やばい……下僕って聞いてエルフたちの顔が変わった。おまえを殺してやる！ という顔だ。

下僕というエロそうな単語で反応するなんて……やっぱり、彼らはエロを愛する種族、エロフなんだろうな。

しかし……この状況では、戦闘を行えば……明らかに、こちらに部が悪い。

はあ、こうなることが、だいたい分かっていたから、来たくなかつたんだよ。

エルフは人間が蛮族だと教え込まれているから、俺に対する風当たりが強いのは分かりきっていたんだ。

人間でもエルフは恐怖の対象だと教え込まれているのと同じよ

うに。

仕方ない。

「そう殺気だたないでください」

ニーナを制して前に出る。誰かが俺の言葉を遮る前に

「エルフには真実と嘘を見抜く魔法があると聞きました。使用してください」

一瞬、呆気にとられているが、俺の宣言の通り、ビダーシャルを含む一部の優秀な使い手たちは使ってくれたようだ。

「はじめましての方がたくさんいるので、名のらせていただきます。俺の名前はサイカ・アーシュド・リ・ラ・フォーエン・ジ・ハイムです」

もちろん、偽名ではない。本名、これで魔法が正常に発動しているのが分かるだろう。

正常に魔法が発動していることを確認してもらった後で、俺は爆弾を落とす。

俺は神に会ったことがある

その言葉を聞いた瞬間、数人のエルフが驚愕した。

俺が嘘をついていないことを彼らには、分かるのだから。「嘘だ！」と叫ぼうとしていたが俺の真意に気づいたのか、言葉を失う。

俺は今、嘘を言えば彼らにバレるのだから。

それにしても、あの神さまに会って良かった〜今度、向こうに行った時はお礼を言っとい。

「そこで、俺は神から祝福（幸運）を受けた」

よし、場の空気は俺が制覇した。

「話を聞いてくれますか？」

こういう状況では無言は肯定と受け取って良い。

「俺は神より受けた祝福のおかげでエレンに出会うことができた、少なくとも、そう思っています」

これは本当に思っている。

だって、たまたま会えたに、したらラッキーすぎる。

おそらく、幸運が導いてくれたのだろう。

「ニーナと出会えた幸運についてもです」

俺の中では正しいのだから、真実か嘘かと言えば、間違いなく真実だ。

ビダーシャルのような熟練の使い手の顔の動きでは分からないけど、若そうな騎士っぽいエルフが驚愕しているところを見ると、きちんと真実だと伝わっているのだろう。

こういう時、若くて分かりやすい奴がいてくれるのは、ありがたい。

「……あたしと出会えたことが……幸運……う、嬉しいことを……」

後ろでニーナが何か言っているような気がするけど、今はエロフたちへの対応が先だ。

「おそらく、そんな、神に認められているのでしょう」

「少し、質問していいかな？」

ん？ ここで何か言われるのは予想外だった。俺が完全に主導権を掌握している、と思っていたのに……名前を聞いておくのもいいだろう。

「失礼ですが、あなたの名前は？」

「失礼した、ネフテスの頭領をしておりますテュリユーク」

っ！？ 頭領だと……トップが賢いのは当然のことなんだけど……一歩間違えば、やばい状況だから……頭の回る奴とは会話したくなかったんだけど……仕方ない。

「分かりました。どうぞ」

「神とはあなたたち、『蛮族』が崇拜する悪魔ブミルか？」
「違います」

良かった……と、頭領までも蛮族というのか……それとも、蛮族

と呼ばれて俺の反応を見ているのか？ 分からないから注意しておこう。こいつに関する情報を俺はほとんど持っていない訳だから。

「では、我々の崇拝する『大いなる意志』か？」

痛いところを……

「合っているとも言えますし、合っていないとも言えます」

「ほう それはどうのことですか？」

「俺は『大いなる意志』がどのような定義の神かは分からないので」

「では、あなたが言っている神とは？」

「生物の生と死の象徴の神」

俺を転生させてくれたんだ。嘘ではない。

「ということとは、我々の崇拝する『大いなる意志』と同様の神か……」

どうやら、納得してくれたみたいだ……ふう、相手に嘘が見破られるのだから……言い回しが難しい……。

「皆も知っただけの通り、こやつは嘘をついていない。この者は『我々の神である『大いなる意志』が使わしてくれた妖精と同じ神の『使徒』だと判断する、異論のある者はいるか？」

誰も何も言わない……ふう、戦闘フラグは回避できたみたいだ。

「我々はあなたさまへの数々の非礼、お許しください。妖精さまが従っている時点で気づくべきでした、『神の使徒』サイカさま」

………魔道書の魔法使いよりも痛い二つ名きたあああああ
あああああああ！

今更ながら、神さまに会って祝福された存在など言わなければ良
かった………とほほ。

Harlem 18 俺のエロフの連れ……

『神の使途』認定されてしまった サイカです。

あれから、エロフさんたちは俺をメツチャ丁重にもてなしてくれています……さすがに対応に困るほどに。

まあ、それはともかく、エレンの本体？　さんが封印されている？　という場所に現在、向かっています。というより……エレンの本体って何？　もちろん、ニーナに聞いても分かる訳ないしエレンはエロフさんたちと話していて、こっちに来れなさそうだし……というよりエロフさん、少しはエレンを解放してあげなさい。どんだけ、ロリツ子大好き集団なんだよ！

それにしても、エロフの集落は快適だな……こっちの世界に来てクーラーみたいなモノがなかったから夏は物凄く暑いし、冬は物凄く寒い。だけど、ここでは水石と風石を利用したクーラーみたいなものがあるから快適な温度だ。こんなところにずっといたら砂漠そとに行けなくなるぞ。

俺としてはエロフの里に永住する訳にはいかないから、滅茶苦茶、不味い状況だ。

しかし、今はエロフさんたちに着いて行くしか道がないので着いて行く。

そうそう、何か先ほどまではいっぱいのエロフさんたちが俺たちを取り囲んでいる状態だったけど、今はそんなことはないぞ。だいたい、テュリユークとビダーシャルを合わせ7人程度だ。まあ、そもそも俺に敵意はないしな。

「ここです」

テュリユークが止まった部屋はまるで、城の王様がいるような大きなドアの部屋だった。

それも、門番っぽい二人のエロフがいるし……

テュリユークが門番たちに何か言っていると、すぐに扉が門番たちの手によって扉が開かれる。

そこにあっただのは……

「綺麗……」

ニーナがそう呟く。

そこにあっただのはきらきら光る翠色の水晶があった。それも大きい高さが直径5メートル、幅が3メートルほどある。

「マスター。エレンは一度、本当の姿に戻るですう。驚かないでくださいね」

水晶に見とれている間にいつの間にか、エレンが俺の目の前までやって来ていた。

「あ、ああ」

つい、そう言ってしまった。

その次の瞬間、エレンは翠の水晶の中に飛び込んで行った。

すると 水晶は光だし、ゆっくりと解けていく。

ゆっくりと、ゆっくりと。

その光景が神秘的でつい見いつてしまう。

そして、そこから現れたのは……

「はじめまして と言っべきなのでしょうが？ マスター」

二十代前半くらいの美人のお姉さんが現れた。背中には六枚の羽根が生えている。緑色の髪を腰まで伸ばしている。どこかで見たとのあるような……お姉さん。

それにしてもマスター？ …… エレンなのか？

「そうですよ。マスター」

「それが、エレンの本当の姿？」

「はい。これがエレンの本当の姿でございます」

ニーナは美少女 と言った感じだけど、エレンはまさしく美人人間で言えば絶世の美女と言っても良い。

「ふふ、エレンに欲情されても構いませんが、エレンではマスターの子を宿すことはできませんよ」

エレンとの精神リンクは解けていないみたいだ……メツチャ、恥ずかしい……

「それにしても、大分変わるんだね……あたしも驚いたよ。あんな、チンチクリンだったエレンが……」

ニーナも驚きが一周して、もはや絶句している。

だって、ですう〜が口癖の妹が突然、お姉さんになっているんだもん。驚くよ……

「あれは、本来の力を隠し、マスターを探しだす仮の姿なのです。本来の力の一割も、あの状態では出せません」

「まあ、とりあえず、これで目的は果たしたし次の場所に行こうか」

そう、ニーナが言った瞬間にテュリユークとビダーシャルが慌て
だす。

「お、お待ちください。妖精さま、我々はあなたさまの復活を心待
ちにしていたのです。なにとぞ、我々に導きを」

「テュリユーク、エレンはマスターの僕しもへであり他の誰かに力を貸す
ことはありません」

「しかし！」

一応、神の使途さまになっている俺を、思いっきり睨むテュリユ
ーク。

「ただ、ロリツ子のエレンじゃなくなったからってキレすぎだ
ろっ……」

え？

違うのかな？

「ん〜、このままじゃ、拉致があかないから、俺が話すよ。エレ
ン、それでいいかな？」

「はい。エレンはマスターの下僕ですので文句などあるはずがあり
ません」

……俺をエレンって、こんな子だったかな？ 大人になったから？

「テュリユーク、何をエレンに望んでいるんですか？」

「……それは……」

やっぱりか……極端な話しになるけど、宗教関係は扱いが難しい
ので困る。たぶん、崇拜の対象に居て欲しいだけなのだろう。

「別にエレンはここに帰ってこない訳じゃあないんですよ」

「しかし……」

「それに、あなたたちの『大いなる意思』に対しての信仰は崇拜対象が傍にいないと薄れてしまう程、弱いものなのですか？」

「違う！」

お、必死になった。

でも、ここで、あまり手の内は見せたくないからな　とビダーシャルが俺のことを興味深そうに見ている。余計に切り札になるようなカードは切れないな。このまま、宗教関係で交渉していくか。

「おそらく、神は何らかの意図があって俺をこの世界に使わせた、と思います」

嘘ではないぞ。嘘では。俺は転生先を厳密には選べていないのだから。

「その意図が俺には、まだ分かりません。ですから、俺たちは旅をする必要があるのです。神がどのような意図で俺をこの世界に使わしたのか？　を知るために」

「………そこまで考えられていたにも関わらず、勝手な意見を申し上げてしまいまして申し訳ありません」

「いえ、自分の考えていることは言葉にしない限り、誰にも分かりません。言葉にしなかった、俺が悪いのですよ」

さて、これでチェックメイトな訳だけど、ビダーシャルが面白いものを見つけた！　みたいな顔をしているよ。俺は男に興味がないから……興味も持たれたくないんだけど……

「ですが、今日はもう、遅い時間ですので旅立つのは明日にしたい
と思います」

それを聞いた瞬間　テュリユークの瞳が少し輝く。飴と鞭の使い分けはきちんとしないとな。まあ、泊まりたいのは本音だけだな。

そんなこんなでエロフの方たちに丁重にもてなされての一夜が終わった。

と、せっかく、エロフの里まで来たんだから、ついでに地下に大量にある？　とされている風石の撤去も手伝ってもらえるように頼んでおこう。

神の用途さまに認定されている俺が頼めば問題なく、OKしてもらえるだろう。

「テュリユーク、少し、いいか？」

「はい、何でしょうか？」

ちなみに、俺たちを見送りに来たのはテュリユークだけだ。俺がそうするように言った。だって、俺たちが旅立つのを、たくさんの方の方に引きとめられたら……説得するのがメンドイ。

「まだ、確定ではないんだけど、人間の国々の地下で今、少しずつ風石の力が増しているような気がするんだ」

「っ!? それは……」

「たぶん、来たるべき災厄の一つだと思う。他にあるのか、それだけなのかは分からないですが、もう少し、調査したら一度調べてみようと思います。その時に、エルフの力を貸していただけますか？」

「神の使途さまの頼みとあらば」

「ありがとうございます」

よし、とりあえず、これで風石の件は何とかなるだろう。原作が始まってからしか発起することはなかったと思うから、今はこれで良い。

テュリユークから、お昼御飯のお弁当をもらって俺たちは旅立つ。そうそう、エレンは今までと同じように俺とニーナ以外の人間には見えないようにしてもらっている。

そっちの方が色々都合が良いからな。いざと言う時。

それから、別に急ぐ理由もないのだけど、ニーナと走って移動していたら、ニーナが突然、止まった。

「どうしたんだ？ ニーナ」

「あれ……」

ニーナが苦笑して指差す。

そこにいたのは……ビダーシャルだった……なぜか、臣下の礼をしているし……

「神の使途、サイカさま、わたしは感動しました」

「はあ？」

なぜか、臣下の礼をしたまま、変なことを言いだした。

「ネフテスの中で最も交渉事に向いている、と言われているテュリユークに終始反論させない、その話術。わたしにも、その尊い技術を学びたく……ここに参上した次第です」

「え？」

「わたしは聖者アヌビスⅡガンダールヴ説を学会で唱えておりますが、テュリユークと同等の話術を持つエルフたちを前に手も足も出ないので。どうか、わたしにご教授を」

……テュリユークとの話し合いは俺の方が圧倒的に有利な手札だったから勝っただけなんけどな……それを勘違いしたのか……しかし、こいつを連れて行ったら、軽く原作が壊れるんじゃないか？でも、ここで追い返すとしつこく着いてきそうだな……

「いいんじゃないの？ あたしは構わないよ。エルフならフェイスチエンジの魔法も使えるでしょ？ 人間に偽装してもらえば完璧じゃない？」

「……でも……」

「このビダーシャル、神の使途さまの技術をご教授していただけなら、どのような仕事でもこなしてもせます」

……これは、とても魅力的だ。

エロフさんは強力な力を持っている。それもビダーシャルは原作キャラの中でも烈風に次ぐチートキャラだからな……力を貸してくれるのはありがたい……だけど、唯一の問題が俺の平民ハーレムの夢が遠のくような気がするけど……仕方ない……俺の所属する国はトリステインだからな……戦力はあるにこしたことがない。

「分かった。ついて来ていいよ」

「ありがとうございますっ！」

そついえば……ビダーシャルってこんなキャラだったけ？

まあ、どつでも良いや……平民さん……会いたいな……

Harlem 19 俺のビダーシャルについての悩み

なぜか、俺を滅茶苦茶、慕ってくれているビダーシャルというエロフの連れができたサイカです。

俺とニーナが手分けして持っていた荷物を全て持つてくれるなどして俺の三歩後について来る……昭和の女かよ……

原作では人間を見下してなかった？ いや、それ以前にビダーシャルを連れて来てしまった時点で某無能王さまのところに行くのはビダーシャルじゃなくなつたせいで、どうなるか分からなくなつたんじゃない？

しかし……今更、後悔しても遅いよね。

ニーナなんかはビダーシャルに「良い、サイカの従者はあたしの方が先輩な訳だから、あたしの言うことは聞きなさいよ」と宣言して上機嫌だ。

ちなみに、反論したビダーシャルだったが、吸血鬼としての牙と圧倒的な風の精霊魔法により黙らされた。

………ニーナ、エルフの原作キャラを瞬殺とか。やばすぎるだろ。

そんなやりとりをしながらも、普通の歩くペースでガリアに戻る。もちろん、そのまま、普通にガリアに入ったら明らかに怪しいので対エルフ用に作られた壁などを魔法で飛び越えての移動した。

風竜などで移動しない限り、ばれることはない。

そう、そう、エレンに性格が変わってない？ と聞いたら恥ずかしそうに「力の大半を封印していたエレンは本当に子供だったので。あれほどのご無礼をしてしまい……本当に申し訳ありません。マスターが死ぬと申されますならエレンは死ねます」と言われた。

……… どうかの無能王の使い魔みたいなことは言わないで………
言われた時、マジで泣きそうになった。

「ただ、砂漠から出るといつもの『ですう〜』が語尾の子供に帰ったよ。」

「何でも、砂漠は魔力が豊富だから、あつちでもいいけれど、こっちに来たら、ロリツ子状態でないとすぐにバテるらしい。良かった良かった。」

「サイカ、そろそろ、ガリアの王都よ。」

「ニーナ。一応、旅の最中はサイカ『さま』でお願い。」

「あ、そうだったわね。あたしは『平民』だもんね。」

何か含む言い方……今は気にしないでおこつ。

「そういえば、ニーナの扱いについては、一応、俺の専属メイドさんだけど、人間じゃないのでこういう時以外は特に何も強要していない。」

「普段、俺の世話をやいてくれているのは、ただの趣味だそうだ。」

「後ろでビダーシャルが何か俺に話しかけたそうな雰囲気醸し出しているが……ごめん、ビダーシャル。少し考え事したいから無視するよ。」

「さて、ガリアの王都について何がしたいかと言つと簡単な話、俺の目的である平民ハーレムを作るための準備だ。」

「そもそも、平民さんを妾にするのは簡単だ。アニメでもシエスタは何も抵抗できずに連行されていたし。」

「しかし、現実問題としては、話はそう簡単じゃない。トリステインは俺の見立てによれば、原作のルイズたちが40〜50歳くらいに滅亡する。」

原作でもルイズが『虚無』だったからトリステインは生き残れたのだ。

エリス伯母さまや烈風のように年老いても、強い例もあるが虚無の場合は違う。使い魔が心の震えで戦うのなら、その主もそうだと思う。

お婆ちゃんになっても、あんなツンデレとか……ないでしょ。

たぶん……

そうなれば、ロマリアにとってのトリステインの価値はなくなり、どうでも良くなる。

新たな虚無を生み出せばいいのだけど、ルイズを殺す何て、姫さまを始め原作組が許さないだろう。

さすがに、その時になればマザリーニは死んでいるだろうから冷静な判断ができる者がいるとは考えにくい。

ロマリアの庇護のなくなったトリステインなどゲルマニアに一瞬で征服される。

トリステインの最も強い私設軍を持っているヴァリエールが辺境泊であるキュルケの生家であるツェルプストーと互角なんだ。

正直に言ってゲルマニアにはツェルプストーと互角の名家が、いくつがある。軍を動かさなくても、その私設軍を使われただけでトリステインは滅ぼされるぞ。

今、それが行われないのはアルビオンが健在だから。

三王家の内の一つが潰えれば、始祖の子孫というアドバンテージの効果も、そこまで大きくなる。

それにゲルマニアが怖いのは最強の空軍を持つアルビオンからの援軍がくることなんだ。

勝ててもトリステインは疲弊している。

そんな国をアルビオンの攻撃を受けて被害を出しつつも落としてもメリットはない。

最悪、ロマリアの坊さんに全部良いところを持っていかれる。

そんなトリステインから逃げるためには金がいる。
身も蓋もない話だけど。

俺のプランとしてはエロフと友好関係を築きつつも商売で儲けて
ゲルマニアで爵位を買って、そこに領民を連れて移住、もしくはエ
ロフの力を借りてハイム領とフォーク領だけ防衛する。

一番、理想はゲルマニアにお金を払って、見過ごしてもらうこと。

エロフのアイテムを売ればお金になるだろうが、それはあくまで
最終手段。

俺は仮にも『神の使徒』で通っているから、絶対に公平な商売は
できない。そうなれば俺が死ねば信頼関係はなくなってしまうこと
を意味する。

それは避けたいところだ。

だって、俺が死んでも嫁や子供たちは残る訳だから。

そんな訳で俺は、もちろん、平民さんをスカウトする、ついでに
ガリアにてお金を得るための情報を集めるためにやって来たのだ。

さて、今、まさにビダーシャルをパーティーに加えたことを猛烈に後悔している。

なぜって？

ビダーシャルがイケメンだからです。

一応、俺も自分で言うのも何だけど、あんな可愛い母上から生まれたのだ、ブサイクなはずがない。

それどころか平均よりも上だろう。

だけど、ビダーシャルはなんて言うのかな？ 神秘的なイメージがあるから……どうしても俺よりも奴に目がいつてしまうのだ。

なんてこった……

俺に優しい平民ハーレムの邪魔をエロフごときにされるとは……
本当なら、ここで抹殺！ と言いたいところなんだけど。

ビダーシャルが……

「師匠 喉は乾いていらっしやいませんか？」

「師匠 服に埃が」

などと言って俺の世話を焼いてくれるから、どうしても、抹殺！ とか叫べない。

だって、自分を慕ってくれている子を嫌いになれる人なんていな

いでしょ……

そんな訳で、平民さんを一人もスカウトできないまま、宿をとる
ことになった。

もういつそのこと、タルブの村でシエスタをスカウトしようかな？
その方が圧倒的に楽な気がして来た、今日、この頃だった。

Harem19 俺のビターシャルについての悩み(後書き)

翼「次回、ついに、あの人が登場予定！」

サイカ「あの人って誰だよ！ 聞いてないぞ！ 平民さんだろうな！」

翼「ノーコメントで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2121t/>

魔道書の魔法使い～俺に優しい平民ハーレムの作り方～

2011年7月2日08時23分発行